

淫淫の爲めに遂に身敗名裂になり、その結果が死を早めたのであることは歴史上にも著名である。ルイ十二世は前代の諸王と較べると貞潔であり、その宮中も嚴肅なものであつたが、之れはルイ王妃の力のしからしめた結果であつて、彼自身の青年時代は落見として知られてゐた。

フランス第一世は梅毒に罹つて死んだ。この時代までは宮中には賣淫専門の女の一面を許して、宮中男子の好色をこれに依つて満足せしめる方法を採用してゐたが、フランス第一世はこの宮中の賣淫婦を一掃して、それにかゆるに宮中女官の階級の差別なく、男子の犠牲とすることを許し、自分も手に任せて女官達を耽しめた。そしてこの宮中の習慣は宮中外へも波及して、パリは勿論其他の都市に於ても、女子を凌辱するを以て男子の権利の如くに考へ、茲にフランス未曾有の大暗黒時代、大淫蕩時代を現出して終つた。

王は女官を凌淫したり、宮中大官の妻や娘を犯す爲めに、王自ら出仕時間を作つて宮中に泊らせ、これらの女達にはそれぞれに私室を興へられてゐて、その室の鍵は王が保管してゐた。若し王の要求を拒んだ場合には、その婦人の父兄或は夫は職を奪はれ、又は罪名を被せられて罰せられた。またそれと反対に有罪者であつてもその者の近親の女の罪を王に献上することに依つて、その者の罪が許される。パリエが斷罪台に上つて首を斷られんとした時に、自分の娘のダイヤナを王に許すことに依つ

て斷首の罪を許された如きは、その好適例である。

梅毒王フランスの好色はこれのみに止まらない。彼は妾に對して非常に敬意を拂つてゐるやうに見えるが、それは外観だけのことで、彼が妾を訪問するのが必ず夜間に限られてゐたのも、この外観を飾る便法に通じなかつた。エタンブ公爵夫人はフランス王と廿年以上の情交を續けた女であつたが、或夜のことフランスが彼女を訪問すると、彼女の夫がそれを拒んだので、王は忽ち激怒し劍を抜いて夫人の夫の前で振り廻はしながら、「世間の人々が熟知してゐることであつても、自分が關係してゐる女を處罰し、またはそれを口にする事があつたなら、即座に手打に致すぞ」と云つて公爵を脅しつけた。彼はこんな歴史的な方法を用ひさへすれば、自分の淫行は何時までも覆けられると考へてゐた。或時のこと、宮中に飼育してゐる鹿が交尾期に入つたので、この鹿の〇〇を見せる爲めに宮中の女官を集めて、自分も女達と共に鹿の〇〇を眺めて喜んだ。すると運悪く一人の宮内官の男がそれを盗見してゐる所を見られた。忽ち彼は官位を削奪され流罪に處せられた。

このフランス王の死因——即ち梅毒に就ては語る可き最後の挿話がある。フランス王は或る獵士（商人とも云はれてゐる）の妻のフロニールを見極めて、彼女を自分のものにせんと、彼女を宮中に召呼んで口説いた。フロニールは歸つてこの事を夫に打明け相談したが、王の命に背けば必

すその報のある事は従来の数々の事件でよく知られてゐる。二人は智慧を競つたが、結局王の命令に従ふより他に方法はなかつた。そこでフロニエールは夫の〇〇を得てフランスにその〇〇〇〇〇のであつたが、フロニエールの夫は何とかして、この淫蕩王に復讐せんと考へた機句に、妻に梅毒を感染させ、それを更にフランスに〇〇させて、王を梅毒で苦しめる方法を案出した。彼は妻の同意を得て遂にこの目的を達した。フランス王は永い年月を梅毒に苦しみ、最後にその爲めに死んだ。

ヘンリー二世もフランス王に劣らぬ好色王であつた。彼の妻はフランス第一世の妾でもあつた有名なダイアナで、この女は單にフランス王やヘンリー王に忠誠であつたばかりでなく、誰彼となく誠實であつた。彼女の青春時代には「多くの人々、悉くに満足を興へた」と云はれる程に、性の博愛家であり、性の慈善家であつたのだ。或時のことヘンリー二世が彼女を訪問すると、彼女は宮内官のブリュサクと〇〇であつたが、男の通場を失くした彼女はブリュサクを〇〇の下に匿した。王は彼女に酒肴を命じ、寢室で酒宴が始まつた。すると王は彼女の持つて来た菓子箱を寢床の下に投げ込んで「ブリュサクよ、人間は誰でも生きなければならぬから」と嘲笑した。

然しこんな事があつてもヘンリー二世のダイアナに對する愛は薄くあつた。彼女の美貌と肉體とに彼はすつかり魅せられてゐたから、彼は官所共之の場所でも愛人と彼女と腕を組み、または馬に

同乗して散歩した。當時のフランス帝國の腐敗はローマ帝國のネロ時代に優るとも劣らぬものであつた。男色と近親交姦は老人間の嗜好となり、淫具、春山、春本の洪水を現出したのも此の時代であつたのだ。その殆んど大部がイタリーから輸入せられたのであつた。

實際に（後に説くであらうが）總ゆる淫具と春話本と春畫帳とがイタリーで作られた。有名と無名とを問はず、凡ゆるイタリーの作家は春話と春畫の傑作で賞牌を得んと競争し、雜誌といふ雜誌は淫蕩な作品で全頁を埋め、これを悉くパリへ輸入したから、パリ市到處の商店はこれらイタリー商品で埋められた。然かもこれらの商品が忽ちパリ人に消化されたのである。法皇クレメント第七世が猥褻本の作者、春畫作家の大檢舉を行つた時には、これらの人間は悉くフランス領に移住したのであつた。

ヘンリー二世の治世以後三代の間は、所謂メヂスンのカサリンが威を振つた時代で、そのカサリンは賣笑婦政策を以て、大に政治的に發展をしたと云はれてゐる。彼女は一時は二百乃至は三百の女官の一團を支配して、政治家外交家の秘密を嗅ぎ出す爲めに使用してゐたと云はれる。カサリンはフランス帝國支配の實権を自分に保留して置きたい要求から、王や王の世嗣達を強いて放蕩に導いたと云はれ、酒宴の席では裸體女官をしてその宴席に侍せしめ、自分もまた王に侍すること屢々であつた。

シャルル第九世の妹、マーガレットの一生は、こゝに語るに足る挿話である。彼女は兄のシャルルと不義の關係にあつたことは云ふ迄もないが、初めヘンリー四世に嫁したが、その當時既に處女ではなく、十一歳にして彼女は二人の愛人を持ち、この二人の者に貞操を奪はれてゐたと云はれてゐる。従つて彼女はヘンリー四世を棄て、パリーの好色漢の話題の中心となつた。ヘンリー三世はその義妹を夫の許へ送り返したが、ヘンリー四世はマーガレットと同棲することを拒絶した爲めに、彼女はアジャンの一都市に身を匿したが、又もや放蕩生活を始めたので、民衆の爲めに放逐され、第二の避難所としてニュートンの要塞を見つけ、そこに廿年間を寛笑婦として暮した。その間の彼女の遊藝は家僕、事務員、音楽家や近郊の田舎者で、一流の紳士、宮中の大官は彼女を慕向かうとしなかつた。老年になつてパリーに歸へり、尼寺や修道院を建設したが、それはこれに依つて修道士を招き寄せる策略であつたと嘲されてゐる。彼女は自分の一生運に關係した情人の氏名録を抱いて死んだ。

このマーガレットの夫であるヘンリー四世に就ても物語が建つてゐる。彼は比較的性的快樂の爲めに精力を費さなかつたが、然し唯一人、ガブリエール・デスソンに對しては別であつた。彼はガブリエールを愛してゐた。彼女がベルガート侯爵と關係を持つことも、彼女の生んだ二人の子供が果して國の子供であるか疑問であつても、彼は總てそれを許してゐた。

或時、彼はマーガレットの邸に行き、入らうとすると既に先客としてベルガート侯爵が来てゐた。彼は憤怒し顔色を變へ眼を血走らせ、劍を抜いて扉に手を掛けたが、「いやいや、そんな事をしては彼女が心配をするかも知れない」と云つて、そのまゝ吾家へ歸つたと云ふ話がある。ガブリエールは非常な美人で、また探險を好み、自分の室の壁には自分が探險になりその周圍に子供達が楽しく遊んでゐる畫を架けて楽しんでゐた。

このマーガレットの死後、ヘンリーはマドモアゼル・ド・ワラギユを妻にせんとした。彼女の美容は宮中第一と云はれた。彼女はヘンリー王からこの交渉を受けた時に、「自分は總てを両親の意に任せると答へたので、彼女の父母兄弟は彼女に賣淫させて王を喜ばせんと協議して、買淫代として十萬クロンを王に要求した。ヘンリーは五萬クロンに値切つたが、彼女の父兄は王の申出でを斷乎として拒絶したので、王は十萬クロンを提供してワラギユの肉體を買つた。すると今度は彼女の父兄達は彼女が一ヶ年以内に男子を嫁んだ時には正式の結婚する約束を提出して、王の同意を得て終つた。然し其後になつてヘンリーはパリスムベール將軍の許嫁になつてゐる若い婦人に戀をして、例の如く熱心に使者を以て自分の意中を將軍並に彼女に訴へた。そして將軍との約束に従つてコンデ公爵に彼女を嫁せしめた。然しコンデ公爵は自分の妻を王の妾にすることを拒絶したので、王は公爵を外國に追放

して終つた。

肉慾の天國

情慾と淫靡の宮廷生活

フランス建國時代からの性的歴史を叙述して来て、茲にフランス王朝の全盛期であるルイ十四朝のこゝとを物語る順序に來た。ルイ王朝時代こそはフランス帝國を飾る最後の花であり、爛漫たる肉慾天國を展開した時代である。この時代はフランス實業婦の全盛期で、纏ゆる法令も嚴重な檢査も死文に歸せしめて、パリ市街の間に賣笑の徒が横行した時代である。

ヘンリー四世の王朝に全盛を極めた勳事はルイ十三世の時代に入つては、益々美花され時化されて、誘惑と口説とは教養高き紳士淑女間の日常茶飯事とされ、貴婦人は情夫を持つことを憚らず、男子は情婦のないのを耻とするやうになつた。彼のリュシユリユは自分の投げたハンカチーフを拒絶し得た女は一人もなかつたと誇り、マザランは女王と姦通して訴へられたことを自慢としてゐた。ルイ王は妻の許へ行くに衛兵を引連れ宮内官を供奉として、公然と妻宅通ひを民衆に示してゐた。

ルイ十四世は宮中の既婚婦人に組合を作らせ、その父や夫はその背後にあつて自分の娘や妻が王と關係するやうに誘導すると云ふ有様であつた。だから宮中の女官達は王の愛顧を公平に享け得たが、その中でもルイス・ドラ・パリエールと呼ぶ少女が心から王に戀してゐるのを知つてルイ十四世は驚ろいた。またオルレアン侯爵夫人は熱情を以て王を愛し煩悶してゐた。この夫人は王の義妹になる女であつたが、この少女も夫人も共に王を得ることが出来ず、王は別にラバクエールと云ふ女を愛して妻とし、その妻は二兒を産んだ後に王に棄てられて、彼女は修道院に入り、そこで三十餘年間を過して苦業を積み自分の過去の罪を贖つたと云はれてゐる。其後にまた王は貴族の一婦人ナンモスパン侯爵夫人に思ひを寄せたので、侯爵を國外に追放し夫人と同棲した。夫人は虚榮と傲慢の權化であつたから王との間に八兒を産み、彼女は女王然として、その八兒は悉く王族となつた。

ルイ十四世最後の妻は天才詩人スカロンの寡婦であつて、有名なマダム・ドモンノンである。この夫人はルイの庶子達の探母として宮中に來た者であるが、彼女はルイ王の妻となるやその心を傾けて宮中の腐敗を計り、ルイ十四世統治の最後の廿年間、フランス君主政體中の最も道德的な文學的な時代であつた。彼女の感化力に依つて、宮中は非常に宗教的に敬虔になり、從來の姦通密通は姿を消し、公衆の眼前では少くとも淫褻な行列は廢せられ、彼女の周囲の女達は外見上では品行方正な

生活をすべく餘儀なくされた。そして遂に王に迫つて王の觀念をも改めさせ、その貞操觀をも改めしめるやうになつた。

特にルイ十四世晩年の治世に於て著名な出来事は、以上のやうに官中を廓清したばかりでなく、フランス諸縣の領主が持つてゐた性に關する權利——例へば領主は自分の領土内に於て結婚が行はれる場合には、その初夜を樂しむ權利即ち初夜權を持ち、また領土に附屬した農奴の妻女に對してはそれを自分の意のままにする自由を持ち、家臣の娘を口説く自由を持つてゐたのを、ルイ十四世の晩年になつて悉く消滅して終つた。

ルイ十四世の治世中はその晩年は斯くの如くに道德的であつたが（これはマダム・ドメントノンの力であつた）ルイの死去後、攝政オルレアン侯が實權を握るに至つて、またもや時代は逆轉して官中は淫蕩の巢となり、オルレアン侯は毎夜官中に酒宴を張つて、淫蕩な活人畫と猥褻な談話に夜を更かし、放恣な婦人達と共にそれを樂しんだ。

攝政オルレアン侯の娘ベリは、まだ子供であつた頃にベリ公爵に嫁したが、その浮氣な性情は遂に公爵を落魄させたと云はれる程の淫婦で、彼女は父と共に當時のフランスの道德を墮敗させたと云ふ嫌疑さへ蒙つた女である。彼女は侍従との密通を發見されて、公爵家を追放されたが、公爵の死去後

に公爵家に歸へり、ルクサンプール宮殿を自分の住居のやうに心得て、其處へ取代へ引き代へ情人を引き入れて淫慾を樂しんだ。そして女王の如く多くの男を弄んでゐたが、最後に近衛の一士官リオムと戀に落ち、リオムの爲めに鬪弄されて流石一代の淫婦も、この男の意のままに動かされた。そして約一ケ年の關係の後に彼女は一子を分娩するやうになつた。がその出産は非常に難産で、再び生きることが困難であらうと思はれた。そこで聖スルピース寺の牧師を招き塗油式を頼んだが、牧師はリオムにルクサンプール宮殿から退去することを命じ、彼が宮殿を退出しなければ塗油式の準備をすることを拒絶した。然しベリ公爵夫人は情夫リオムと別離することを欲しなかつたので、遂に牧師も頑固に塗油式を拒絶し、その間に惡運強きベリ夫人は生を回復した、父攝政は遂に自分の權力を以てリオムを職隊に追ひ歸したが、ベリは父に乞ふて自分とリオムとを結婚させやうに願つたが、益々父の怒りに觸れ彼女は病床にあること二日、その間泣き叫びながら遂に永眠したと云はれてゐる。この娘の父もまた娘に恥ぢぬ好色漢であつて、多くの淫蕩な挿話を今日に残してゐる。いまその二三を擧げやう。

攝政オルレアンの多くの妾の中で、クローチニス・ド・タンサンは田舎に住んだ貴族の娘であつた。彼女は両親から強制された結婚から逃れん爲めに修道院に入らうと決心したのであつたが、彼女は修

修道院の生活様式に自分を適合することに努めるかほりに、修道院の生活を自分の欲する生活風に改めさせることに努力した。そして修道院内に社交的悦楽を持ち込み、陽氣な空気を送り出し、絶えず客を招待しては楽しんだ。その客の一人、幸運な紳士が詩人デストーシユであつた。美しきクローデヌ又は詩才豊かなデストーシユに魅せられて、数ヶ月後には彼の子を孕んだ。クローデヌの兄である修道院長はこの妹を餌にしてバリーで幸運を掴まうと考へたので、妹に紹介状を持たせて、親政オルレアンに許へ、妹、クローデヌを遣した。

そこでクローデヌは親政の妻となつた。然しそれは長く続かなかつた。と云ふのは彼女は親政の餘り度過ぎた放逸と酒狂とを嗜んで、嫉妬の餘りに復讐的に總理大臣カーデュナル・デュボアの妻となつた。デュボアの死後、彼女は「女たらし」として最も著名であつたりエシュリー公爵を避んだ。その後また一著作家の妻となつて、彼女の家はバリー第一流の文學クラブとなり、最も現代的な人物の談話室となり、彼女はバリー文學黨の頭領となり、彼女の息、グランバリーヤもまた一流の哲學者として世人から認められた。

次でルイ十五世は曾祖父及び親政の保護の下に生長し、メリー伯爵夫人を妻とした。メリーは四人の妹を持つてゐたが、この妹は妹の成功を羨んで、王の寵愛を自分達も受けんと欲した爲めに

ルイ十五世は妹三人をも宮中に入れて妻とした。然るに其後に第五番目の妹が十六歳になつた時に、妹連四人の利益を凋落させる原因となつたので、王は心を傷め其後暫らく病床にある程に、國情の言葉をに入れて、三人の者と關係を断ち、許婚であつたマダム・ド・ノルマンデトワールを正妻として、彼女をポンパドール公爵に叙して宮中の諸侯に紹介した。

ノルマンデトワールは極めて高雅な趣味を持つた人格者であり、ヴォルテールの文章を愛讀し、王並に國民全體にも善良な感化を與へた婦人であつた。ところがこの夫人の死後に王が選んだ女はマダム・ジュネーベリーと云つて、眞實の名はパンペルニーヤと呼ぶ海千山千の純然たる賣笑婦であつた。彼女は放蕩生活に鍊え上げた手段で王を囚にし、有名な「パーク、オ・セヤーフ」(杜鰲園)を開業して、其處へ多くの美少女を集めたが、この杜鰲園こそは王室附御殿で、史上に有名なマダム・ド・ポンパドールもこの御殿から出た女であると云はれてゐる。

ジュネーベリーは老練な手管で、多くの美しい少女を集め、これら十四五歳の少女を甘言を以ては老漁色家に紹介した。そして王の好色を満足さす爲めに、多くの探求隊がフランス領土内を歩き廻り、少女を探してはそれを宮中に掠奪して行つた。この總指揮官がジュネーベリーであつたので、地方の警察官は後進を恐れて、この掠奪隊に對して何等の抗議をすることもしなかつた。そしてこれら掠奪せ

てゐた。然し實際はそんな数ではなくして八萬であつたと云はれてゐる。今日ではその数はすつと増加して、正確な数の統計を見ないがフランス全人口に對しての割合は、三百人に對して一人の賣春婦を持つてゐると云はれてゐる。そしてこれら賣春婦の産地はパリ一出生三分の一、他は各處からパリへ出て来たものであるが、その中でもパリ一出生の賣春婦の生れが多い。パリの賣春婦は自分の姓名をも満足に書けぬ程度のもが多く、その四分の一は私生兒である。今日のパリが如何に世界の歌樂舞の中心であり、流行の發祥地であつたかは（最近はアメリカに奪はれたが）、總ゆる情事の風習が各國に於てパリを模範として考へられてゐたのでも轉るが、性愛文學としてもフランスは世界の文學中に頭角を擡いてゐる。パリの赤本は全世界の蕩兒をして嘔吐せしめたものもある。然しフランスをして、斯く迄も世界の蕩兒のエルサレムに如くならしめたものは、何處に原因してゐたのか。その源を搜くつて吾々は、國イタリーの文學美術の影響を考へないわけには行かない。それは既に前の章に於ても説いた所であるが——そのイタリーに於てこれから記述をする前に、フランスの性愛史を簡単に一瞥しやう。

ペーランド・シャトレの發表に依ると、氏の意見では賣春婦の多くが供給されるのは、オテ・ルド・ミデイ即ち花柳病院であつて、この病院は花柳病の婦人患者を收容して治療す目的で設置せられた

が、この病院へ入院した若い女達を餌にする爲めに、老年の性愛婦が出入りする。これらの老賣春婦は賣春婦としては老年に過ぎて、最早やその價値がない爲めに、彼女等はこの病院へ出入りして少女誘拐を業として生活してゐる一群である。この賣春老婦に目星をつけられた若い患者達は、何時しかこの老賣春の甘言に誘はれて女達となり、遂には金銀其他の物質的援助をも受ける迄になる。そして退院の頃にはその金額も相當に達するやうになるが、すると今度はその義理にからまれて退院間際に、遂にこの老賣の手から運れることが出来ずして、パリの賣淫窟へ連れて行かれるやうになつてゐる。今日のパリの賣春婦の多くはこの経路を辿るものであると、シャトレは説明してゐる。

またパリへ賣春の目的を以て地方から誘拐されて来る少女の數も少くはないが、それには地方離りの外交員がゐて、これらの外交員は皆巨額の俸給を受けて淫賣屋の主人に雇はれてゐる。そして各自の郷里であるとか、または知人のゐる地方の工場などへ行つて所謂「新玉」即ち新しい女を捜し出して、甘言でパリへ連れ出して来る。一時は有名なジャン・グーテの生れた土地ランスの如きは非常に深山のこの種の女をパリに出したと云はれてゐるが、更にこれが國際的となつてロンドンとブラッセル——パリ一間に大仕掛けの賣春婦運送が行はれたことがある。

最後にパリの賣春婦の前職差別をして、どんな職業の女が多く賣春婦になるかを見ると、これも

何處の國も同じやうに（勿論日本も同様）大部分は労働者の家庭からで、それを内閣すると、家内工業に従事する者の娘と工場へ通つてゐた娘とである。次に多いのは商人（と云つても主として飲食店の）の娘にこの種の女が多く出てゐる。特に注意すべきは軍人の家庭からも出てゐること、その数は農夫の娘のすぐ次に位してゐる。その他知識階級に属する學校教師や音楽家、醫者、法律家の家庭からも、少数ではあるが出てゐる。

またその原因に就ては男に棄てられて自家からこの商賣になつた女が最も多く、次は貧乏、家庭から棄てられた者、田舎から誘拐されて来た者が多い。次は自治の道をパリイに求めに来て魔手に落ちた者、風主に弄ばれた後に棄てられた者であつて、兩親、兄弟或は子供を扶養せんが爲めに賣春婦になつた者は殆んど少数である。

パリイの賣春婦は今や世界職業社會の華であり、世界各地からの遊客をして、一度は「花のパリイの女」を知ることが、フランスへ遊ぶ目的の大半たらしめてゐる。賭博のモナコに性のパリイは現代人の職業の二大目標たらしめてゐるやうである。モナコの賭博は知らないが、パリイの賣春婦こそは、皆ての日本の「ヨシワラのオイラン」と同様に觀光外人の心を誘惑するものである。そのパリイの賣春少女の大部分が貧乏な労働者の娘であり、農夫の娘であることは、一つの大きな社會問題の

關心事ではないか。傳統主義者モリス・バレスはその小説の中のある頁で、「パリイの賣春婦の眼の中に、地中海の浪の色を見る」と云はしてゐるのは單に小説家のロマンチズムのみではないのだ。

梅毒と男色のイタリー

臀部にマークをつけた法皇

兩脚の腐敗した王様

イタリー。地中海の浪の波に浮べるやうに長靴の脚を伸したやうに、フランスの南に横はつてゐるイタリー。この國こそは昔のギリシヤ、ローマ時代から引續いて、美術の國であり文學の國であると同様に、悪の華の咲き榮えた國でもある。マツデニヤカブルルヤガリバルデイヤの愛國的熱情の歴史を有すると同時に、その裏面には恐る可き放埒、淫蕩、官能に絶した罪惡の數々を持つてゐる國である。

イタリーに於て最も權威を持つてゐた者は法皇であるが、この法皇の統率下にあつた僧侶の腐敗墮落は最も甚しく、イタリーをして梅毒國たらしめた原因は、この僧侶の背徳淫奔にあるとさへ云は

れてゐる。ローマ法皇の治下に於て、當時 Inopon 即ち「窮」と云ふ語が使用せられ、この窮は
經の名に置れて當時のローマ法皇並にイタリア王室が、如何に自分達一家の利益を計り、また自分
人の性的放恣を合理化したか知られる。事實インノセント八世は八人の息子と八人の娘とに、この
「窮」と「経」とを興へて、自分の息子や娘の性的遊戯の對象物たらしめた。法皇並に王室に於て、こ
の種の行爲が公然と爲されてゐたのであるから、その下にある僧侶間に於てもこの「窮」の大流行を
來たし、各宗派の僧侶にしてこの「窮」乃至は「経」を持たざる者はない有様であつた。

遂にラテラン會議の第十一議會では教會の布告に依つて、僧侶が公然と妻を畜ふことが習慣となり
尙ほその上に蓄妾を市民にも許可し、僧侶はその蓄妾許可料を收得した。而かもこの弊風はトレント
會議に於て改造の機運を見せはしたが、肝腎の法皇、大僧正、大教主に對するこの犯濫を取締るこ
とをせずして、下級一般僧侶のみの犯濫行爲を取締らんとした爲めに、その効果は何等見る可きもの
なくして終つた。

イタリア國民そのものが國民性の上から先天的に放恣自由な人民であり、自然の影響を受けてその
性情を益々助長せしめた上に、尙ほ外敵の侵入がイタリア國民の性的墮落を一層に烈しからしめた。
フランス王チャールス八世のイタリア侵入は、王並にその軍隊の好色的であつた結果からして、イタ

リ侵入のフランス軍隊は到處に於て兵士の不拘束な淫蕩の結果を被せしめ、イタリア國民をし
てフランス軍隊の通過した所、淫風一時に榮えるの現象を見た。更に恐る可きことはこのチャールス
八世の軍隊の侵入に依つて、花柳病が発生したが當時のイタリアに於ては、この病氣に對する治療法
も發明せられて居らず、爲めに漸次諸地方に蔓延してこれに感染する者夥しくなり、實に前代未聞
の悲惨事を惹起した。そしてこれを一層助長したものは花柳病に關つてゐたフランス兵士が、占領地
帯に於て〇〇に耽溺したことであつて、その爲めに性的商業に何等關係なき處女なども花柳病に苦し
められた。當時のイタリア人はこれを以て、自分達の不拘束な性的耽溺から來た天刑としてあきらめ
たと云ふことであるが、イタリア人民にとつて僧侶の背徳と外敵の侵入は、最早や不可抗力として忍
従してゐたのであらう。實に當時に於てこの病氣に犯されない者は國民中一人もなかつたと云はれて
ゐる種である。

當時最も豪放瀟灑な、また淫奔極りなき僧侶として知られてゐたタクサス四世の甥タクサス・ド・ラ
ロペールは梅毒の爲めに脚の中途までは腐れてゐたと云はれ、また當時梅毒及ぶ者なしと讃はれたジ
ュリアス二世は婦人に接するに、決して兩脚を露はさなかつたが、それは兩脚が變色してゐた爲めだ
と云はれ、また才氣最も傑出してゐたレオ法皇も病氣の爲めに身體が腐れてゐたので、高等顧問

風俗の弊には、コンシストリウムで外科手術を受けねばならなかつたのだと云はれてゐる。

當時のローマの権威官は公然と賣笑婦を受用することが決して許ではなかつた。チャールス八世がネーブルスへ進軍した時に、ルドビコ及びスフォルツ及びこの兩國官の妻女は、最も美しい賣笑婦を連れて行つて、大酒宴を催して淫樂の限りを盡した。そしてチャールス八世が花柳病に感染したのも、このイタリー遠征中の出来事であると傳へられてゐる。

斯の如くにイタリー全土をして一大梅毒國たらしめた慘憺たる事實の記録は今日までも多數に残つてゐるのであるが、當時のこの病毒を防止せんとして、イタリー各地に於て賣淫禁止の法令が出された。ネーブルスに於ては嚴重な防止令を發布したが、それに依ると梅毒患者は鼻を切り落された。また同様に娘を賣淫せしめた母親も同様の刑に處せられた。十三世紀以後は生活困難の爲めに止むなく賣淫せしめた母親のみは、この刑罰から免除することにした。然し貞淑な女子に對して對稱的飲料物や、催淫藥を使用した者に對しては嚴罰を課し、またその爲めに女子に傷害を與ふる如き事があつた時には、其者を死刑に處したまた被害の極めて少なき場合でも投獄した。

然し斯る嚴酷な法規にも拘らず、其の目的を達すること不十分であつて、十五世紀の末にはネーブルスの酒宴には淫樂は附屬物のやうに考へられ、無賴漢は各所に徘徊して、暴力又は甘言を以て若い

女を賣淫場へ誘拐した。遂に極めて苛酷な刑罰を公布し、斯る無賴漢を國外に逐去を命じ、賣淫婦を懲罰した者に對しても刑罰を以てし、また賣淫婦に對しては前額に烙印を押す如き非人道的刑罰を以て處罰せざるの止むなきに至つた。

ローゼ王の時代にも引續き同様の苛酷な法律を以て取締つた。強姦は死刑を課せられたが、それには暴力を以て監禁された事實、不同意を示して反抗した事實、又は銃を叫聲を擧げて助を求めた事實を明かにして八日以内に強姦の證明を提出しなければならぬとされた。が然しこの場合にも嘗て一度でも賣淫した婦人若しくは賣淫婦は、この權利なき者として法律の外に置かれた。以上のやうにして幾多な方面から賣淫婦退治をしたにも拘らず、依然として娼家は榮え無賴漢は横行した。そして何時しかネーブルス市の中央に宮殿を建てるやうな娼家を現出せしめたので、遂に八日以内に市を立退くことを嚴命せられ、それに従はざる者の家は取毀された。

然しそれにも拘らず前に述べた通りに、之等の嚴重な取締は下層社會に對してのみであつて、法廷以下の上流階級では依然として日夜の酒宴と淫樂とに耽溺し、セクサス四世の如きは最も男色の愛好者として知られ、自分の〇〇〇〇〇〇〇〇には、悉く肥體を附けたとさへ云はれる變態性慾者であつたから、その下にあつて取締の任に當る役人達も、その取締に當つては暴行、強罰、賄賂など各種

の不正行為で私腹を肥すことばかりを考へてゐた。だから賣淫業者も金を積んで放免され、この種の慣習を利用して取締役人は賣淫婦でない少女をも捕へて投獄し、その上で放免に要する金を要求したりさへした。總てこの不正手段や横暴の事實は世間に曝露せられて、その革新は断行せられはしたが、根本的にその不正を断ち切ることは出来なくて、尙ほ百年間もその不正は続いた。

そして却つて賣淫婦は増加し、淫褻な偶像教は繁昌したので法皇は命じてその偶像を破壊せしめた。また少女をして賣淫せしめる者には拷問、管打、烙印、放逐などの刑を以てしたが、實際に於て賣淫は金に依つて罪を免れた。また暴行を以て賣淫婦を引致懲罰する者には「右手の切斷」と云ふ重刑を以てしたが、之れも賣淫は金に依つて罪を免れることを得たので、實際に於ては餘り効果がなかつた。

クレメンヌ二世は遂に勅令を以て娼家の得た過剰の利益を教會へ寄附させ、また罪を得た賣淫婦が死亡に際し賣淫の半分を修道院に寄附することを強制した。斯くして遂に賣淫婦は公認され、賣淫制度がイタリー全土の各都市に制定されたので、この種の女の数は一躍して夥しい數に上り、マンチア及びベニスの如きは賣淫婦の巢窟となつて終つた。この賣淫婦の制度法律に關しては歐洲各國の規定が不思議な程によく類似してゐて、衣服に關しても貞淑な婦人と區別する爲めに、特別に規定さ

れてゐる。マンチアに於ては賣淫婦は外出に際しては白衣を纏ひ胸間に徽章を附けることを命ぜられてゐた。ベルマでも同様白色の衣服を着せられ、ベルカマでは黄色の外袴を着せられ、ミランでは黒色の毛織物であつたが、後には黒絹製のものが使用せられた。そしてこれに違反した者は初犯は科刑に、再犯は管刑に處せられ、三犯には衣服を剥ぎ取られた。

マラツヤビエモンに於ては娘が放埒を犯した場合には母親は娘を懲罰することを得た。然し母親が娘の放埒生活を黙許した事實が證明せられた時には、母親はその權利を失つた。父親も同様であつたが、唯財産分與の件に關しては、父親が娘を結婚させやうとして財産を分與したに拘らず、娘が賣淫した場合に娘を懲罰することが出来た。然し娘が廿五歳になる迄その結婚に反對してゐて、其の間に娘が賣淫婦に落ちた場合には、父親は娘に財産を分與する事を拒むことを得ない。また娘の結婚に就ては父親の同意を必要としたが、娘が同意を求めたに際し父親がそれを拒絶し、而かも娘が既に三十歳以上であつた場合に賣淫行為があつたとしても、父親は娘を懲罰するを得ずとなつてゐた。

遂にイタリー政府はこれらの賣淫婦を一箇所に追ひ込めたが、ベネジユラに於ては浴場が之等の女の巢となつて、浴場の主人は娼女屋の主人を兼ねるやうな状態になつて終つた。その結果はアビニオンでは娼家と稱せられてゐる浴場へ、僧侶教師の入浴に行くことを禁じて終つた。然しアビニオン市

の法皇は世界各地からの外來者の群衆が集つてゐるので、従つて賣春婦は教會の門前に市をなし、
法皇の邸宅、僧侶の住宅に集居して来て、遂に全市を一大淫蕩場、人肉の市場化したので、最後に市
舎を以て賣春婦を全部この市から放逐すべしと勅令が出された。

前に述べた通りに、イタリアは梅毒に於て世界中の何の國よりも、最も多く傾まされてゐた。殊
にその中心地はローマであつて、千八百四十九年にフランス軍がローマを占領した後に於ては、最も
恐る可き流行を極めたと言はれてゐる。ローマに於ける花柳病の爲めの公立専門病院は十九あつて、
患者は一日四十餘の費用を支拂つてゐるが、平均一病院の各日の患者数は、一萬四千人と云はれてゐ
る。これで見ても當時のイタリアの梅毒の流行が如何に國民を傾ましてゐたかを想像し得られるが、
この梅毒を新しく遂に蔓延せしめた原因は何處にあつたか。それは勿論、當時のイタリア國民の道徳的
墮落に依るのだが、此處に一つの注目すべき社會上の階級がイタリアにある。それは「ラザロチ」
と稱せられる乞食階級で、今日と雖もイタリアの乞食は世界的に有名なものであるが、それは數世紀
の前からこの國に存在してゐたのである。このラザロチの不節操が、フランス軍のイタリア侵入と相
呼應して、イタリア全土を梅毒の蔓延たらしめた點があつた。

イタリア社會にいま一つ特殊なものは「カバリエール・サーベント」であつて、これは男の小間使

とでも稱すべき階級で、婦人が外出の際には必ずこのサーベント（召使）がお供をして行くのであ
る。このサーベントは婦人達の召使であると同時に〇〇でもあつて、この召使と婦人とが〇〇する爲
めに使用する貸家さへ建てられてゐたのである。そしてこの制度は公衆と社會からも認められ、夫た
るものも自分の妻がサーベントを連れて外出し、または公共の集會へも行くことは、夫妻相伴つて
行くよりも、儀禮的なことと考へてゐたのである。そしてこのサーベントは婦人の命令に唯々諾々と
して少しも反抗せず、服を持ち、傘を持ち、時には犬を抱いてお供をするは職かのこと、如何なる下
賤な場所へでも命令せられればお供をして行くのである。そしてそれを耻ぢないばかりか、寧ろそれ
に非常な満足を感じてゐたのである。これはイタリア國民の好色の性質を満足せしめるに充分だから
であつて、この好色性と怠惰性が相待つて、イタリア國民を、好い方面には美術の國たらしめたと
同時に、花柳病の國ともさせたのであつた。この變態的發展は更に他の流行をも生んで、有夫の女に
して良人以外の他の男子と親密な關係を結ぶ風を生じ、それが一般的な慣習とまでになつたやうであ
つた。

資本から希臘に、更にローマ大帝國に傳つて來た人類性慾の歴史的發展は、既に述べたやうにロー
マ帝國の時代になつて、「肉慾の天國」を地上に現出させた。然しキリスト教が起るに當つて、このロ

ローマ帝國を支配したヘレニズムを漸次に征服して行き、一方またネロ大帝を最後の時代としてローマ帝國は崩壊した。そしてキリスト教は肉慾王國に對して「靈の王國」を建設するかに思はれたが、伊太利史の上に現れた通りに、次でローマ法皇の並にその墮下の僧侶達は、男色と女色とに耽けり、全土を擧げて花柳病國たらしめ、それをフランスに移入したのであつた。そのことは既に述べた通りである。

女漁り・尼寺荒しの英國

國王ヘンリー八世と

女僧エリザベス

同性愛の宮女生活

ローマ帝國の軍隊が諸方へ侵入して、その威を逞くし肉慾の天國をこの地上に現出してゐた頃の英國は、まだ北海の片隅に存在した未開な一島嶼に過ぎなかつた。そこでは遊牧民が諸所に小集團を造つて狩獵に日を通し、その小集團の中の男女は自由に各人の欲するまゝに〇〇して、特定の男に特定

の女が隷屬すると云ふやうなことはなかつた。殊にそんなことがあつたにしても、それは、その男女間の感情がこの性的關係を繋いだのであつて、相互間の義務的又は道德的觀念も思想も全然存在しなかつた。それは無差別の雜種であり〇〇生活であつたのだ。

この未開野蠻の域から少しづつ抜け出して、結婚らしい形式を持つやうになつたのは、それから少し時代を過ぎて後であるが、然しそのやうになつた原因は、子孫に對する哺育上の必要からであつて、未だ依然として道德的觀念からはなかつた。その證據には當時のアンゴロサクソン種族の結婚式を調べると、當日の花婿は半裸の上にその〇〇〇〇を吊して式場に現れると、一方花嫁の方でもこれは半裸々の姿で式場の片隅から出て来る。そしてこの一對の男女は衆人の中で〇〇〇〇〇〇しながら結婚式を済せると云ふ風であつた。

だが然し茲で更に注目すべきは、斯くして結婚した者達が姦通を行つた場合の處罰法である。それは頗る嚴重な、寧ろ恐怖に近いものであつた。まづ姦通は捕へられて、豫て用意してあつた薪の上へ横臥させられて焚殺されるのであつた。そして姦通の身體が灰となつた時に、今度はこの灰の上に姦夫を臥させて再び焚殺するのである。だから大抵の場合に姦夫姦婦は捕へられると同時に、この處罰の苦痛から遁れる爲めに自殺をして終ふのであつた。また或場合には他の方法が執られることもあつ

たが、それは棍棒又は小刀などの兇器を持った女達に依つて、姦通者が弄り殺しにされるのであつた。そしてこの嚴格な姦通處罰法と矛盾することには、骨肉相姦は公然と許されて居り、また近親血族結婚は彼等の間の慣習となつてゐたことである。然しこれも其後に至つて愛蘭土人が英蘭土へ上陸移住するやうになつてからは、姦通者兄弟相姦の風習は漸次に消失して行くやうになつたのは事實であつた。

この時代に英國に賣春婦が既に存在してゐたことは、今日の道徳堅固な（表面上だけでも）紳士を以て誇る英國と相對稱して考へる時に、頗る興味あることである。勿論、それは數に於て微々たる者で、また或は賣春婦と云へぬかも知れないが少くも性慾を賣ることに依つて、金錢を獲て生活してゐた女の存在したことは事實なのである。それは親が遺言としてその娘に金を授與する場合に、必ずその娘が身體を賣つて金を得ないことを條件とすることが附加せられてゐた。同時に滑稽にもその當時の結婚は純然たる賣買婚であつた。夫は物品を以てその妻にすべき女を買ふのであつたから、その結婚契約なるものは賣買の證明に過ぎぬものであつたのだ。これが總ては姦通處罰法にも影響して、後に至つて姦通罪は罰金刑と變じた。すると今度はその金を目的として、英人局をやる者が出て來てこれを商賣にする不良夫婦が頻出した。

これを防止する爲めには、その處罰法をかへねばならぬと云ふので、姦夫姦婦に極端な勞役を強課したり、戰爭の時には出陣させたりしたが、次第に後になつて、エトローガ時代には一洲間の中に三日間を、水とパンのみを喰はせて、それを七ヶ年間強課したりした。初期のイギリスの統治者エセルバートは法律を以て男子は物品を以てその妻を買ふ規定を設けた人物であつて、彼はその治世中この法律を改めなかつた。然し晩年になつて彼はキリスト教に改宗した。そしてその息子のスンドバートもキリスト教徒であつたが、この息子は後に自分の義母と結婚しやうとして、教會がその許可を拒んだ時に、彼はキリスト教會から脱して、義母と結婚し後にその結婚に飽き果てた時になつて再びキリスト教に復歸した。

然しそれよりも以上に有名なのは七百八十四年のウエヅツタスの王カヌルフの殺害事件であるが、カヌルフは女官と姦通したり、又は田舎へ旅行して田舎の社交界で女漁りをするのが常であつた。彼の王位窮乏者はそれを知つて絶えず機會を狙つてゐたが、遂に或時にその敵キャンチャードは自分の部下をして、カヌルフ王が田舎の美宅へ赴いたのを追つて、その邸を包圍しカヌルフは自分の愛妻の手で殺害された。また第七世紀の初めの王であつたエトウイは教會の禁を犯して、從妹のエルチへと結婚した。これは當然の結果としてキリスト教會での問題を惹起したが、その後の戴冠式當日の酒宴最

アナルオールドは陸方なくそれを承諾して、歸つて妻には成る可く、化粧をして王に會ふやうにと、妻のエルフリダに懇願した。所がエルフリダは夫の願ひとは反對に念入りに美しく化粧して、王の訪問を迎へたので、忽ちアナルオールドの望が暴露して終つた。王は非常に怒つて彼を殺し、彼女と結婚した。其他に數へ上げて行くなればこのエドガー王の情事に就ては、數へきれない程に積み上げることが出来るのである。

然し茲で眼を轉じて當時の賣春婦の狀態を述べて見たい。この事は直接に同時代のイギリスの諸王の生活にも關係を持つことになるのである。その時代の法律は賣春行爲を許したばかりでなく、寧ろそれを奨励した傾向さへあつたのである。既に述べたやうにエセルバート王の時代には妻を買つたのであつたが、その代償としては金銀以外に馬とか又は他の器具が用ひられた。然るに賣通の罪に對しては、賣夫は賣婦の夫に罰金を支拂ひ其上で他の婦人をも賣婦の夫に嫁合すべしと規定されてゐた。つまり賣夫は金と女とを賣婦の夫に提供すれば、賣夫は従前通りの關係をして宜しいと云ふことになり、賣婦の側から云へば金銀の贈物を受けて賣淫すると云ふことになるのであつた。然かも尙ほ賣通なことはこの金額が女の所屬する階級に依つて増減のあることであつた。この法律の結果は非常に國民の風紀道徳を頹廢させて、不良な感化を社會に及ぼした。彼女達の貞操の見積額は、市場で賣つて

ある安物商品と同様に捌引もされ、またその捌引した金額を月賦支拂ひにすることさへ出來たのであつた。これは明白な賣春行爲であるので、間もなく之等の取引方法は變化されるやうになつた。

妻とするには本人の同意を必要とし、夫は妻を扶養し保護し且つ敬意を以て待遇すべきことが強要された。婚約を希望する兩人は、尙め牧師の前で許嫁することが必要とされたところで、これが法律としての規定を見ずして、宗教的義務としてのみ課せられた結果は、同じく惡弊を屢々生じたのであつた。假令、宗教的義務として彼等の道徳心に平等の精神を鼓吹したとしても、法律の上では封建的精神が支配してゐて、その處罰法も社會上の地位に従つて差別があり、爲めに事實上には封建的主人と家隸との二階級に別れてゐて、主人は家隸に對しては專制的な權力を持つてゐたのである。

即ち領主が死亡した時には、その領土は王の保管に歸し、その相続者が返還を請求する時には、王はその保管料を領土の相続人に請求するのであつた。而かもその保管料は王の自由であり、相続人が未成年者であつた場合にはその者が成年に達する迄は、王はその領土を自分の手で保管し、また相続人が女子であつた場合には、その婿の選擇權を王が持つてゐるのであつた。斯の如くに王は絕對的な權限を持つてゐたところから、その權限を濫用し悪用して當然女子相続人の手に入る筈の領土やまたは彼女將來の運命までも、王自身の利益の爲めに賣るやうなことをさへあるのであつた。

デロセフ・レイドマンドビルと云ふ男が、ドロセスキーの伯爵イサベルの全領土を手に入れやうとして、イサベルとの結婚許可を王に願ひ出で——つまりイサベルの婚を自分に選擇して貰へるやうにと四萬圓をヘンリー三世に提供したとぞは、王が自分の手に握つてゐる権限を濫用して四萬圓の金を取つた例である。同時に男子相続人と雖も結婚の相手を決定するには、王の選擇を待つか又は王の認可を得なければならなかつたので、女子の婚適びと同様にこれもまた金を提供して王の認可を得なければ、自分の好きな女と自由に結婚することが出来なかつたのである。

斯の如くに王に財産並に結婚の自由を奪はれ、王はまたその権限を利用して、配偶者を選ぶに當つて、全然報酬の如何に依つて、その結婚を左右した爲めに、その不平不満が王に對する復讐的な氣持も加つて、婦人の不義事業の風が生じたのである。この問題を解決せんとして、ヘンリー王の治世中に民法學者と教會法律家との間に争論が起つた。民法學者は結婚前の出生兒は悉く私生兒なりと云つたに反して、教會法律家は若し兩親が子供の出生に次で婚姻してゐたならば嫡出兒であるとした。そして民法裁判所はこの相續上の争ひが起つて相續人が嫡出兒なりや否やとの疑問を持つた時には、教會へ照會したのであるが、すると教會では兩親が結婚してさへ居れば嫡出兒なりと回答を與へた。この結果が著妻制度や賣春婦制度をも間接に保護する効果を生み、賣春婦の数が著しく増加した。

た。

然るに餘りにも極端に女子を玩具視し物品視した從來の反動として、茲に極端に女子の價値を認め道德的並に社會的に女子の地位を向上させやうとする思想が起つた。即ち騎士團と呼ばれた所の女性崇拜者群であつて、この一群の社會的出現は一躍して婦人の社會的地位を高度にまで引揚げた。この騎士團の出現が從來の爲政者や法律家が、爲さんとして爲し得なかつた女性の貞操保護を完全にしたのである。これ迄は婦人の外出、又は公共の集會には武裝した家臣を伴はないでは行かれぬ程に婦人の地位は低く、見られ且つ危険でもあつたのであるが、この騎士團の出現に依つてその心配は一掃されたのである。

然しこの婦人崇拜者群の騎士團と雖も、賣春婦に對してだけは例外であつて、彼女達は騎士からは保護する價値を認められず、名譽の保護を受けることを得なかつたのである。それ故、若し公衆的集會の席で賣婦人より前に席を占めてゐることが發見された時には、彼女はその席を追はれて後方へ退けられるのであつた。そしてこの風習が續ては男子にも影響して、男子の品性そのものも大に改まつた。その時代に於ては戰場に於て婦女を捕虜とすることは騎士道に違反することであつて、城下を占領した軍隊が先づ布告する傳令は、婦女子に對する暴行は何事にも依らず一切を禁止すると云ふこと

であつた。然しこの布告が如何なる場合にも嚴重に守られたとは限らなかつた。騎士道主義やかなりし頃にてさへも、多少の例外を餘儀なくされたのであるから、次第に月日が経つに従つて、この騎士道に殺みを生じ其處に種々な問題が生れるに至つたのは、人類本然の性情からして無理のない道であつた。この騎士道の破滅は十字軍遠征に依つて完く明かにされた。熱情はあれど金のない騎士道は、遠征の途々に於て放逐をやり、彼等に随行した婦人達を自分の熱情の赴くままにしてゐたのである。そして嚴格な清教主義に束縛されて、獨身主義を強要されてゐた僧侶達と、女主人に熱情を以て仕へ而かも性の満足を得られない騎士道とは、自然の道として實存を要求し、最後には宗教的戒律が形骸と化し去つたと同時に、騎士道も只々名のみ存在となり果てて終つた。そして實存が益々増加して行く傾向を示した。

斯る週圓の情勢に取巻かれて王室はどんな有様であつたか？。當時代の王室の「圓ひ者」として歴史上に有名なのは、ヘンリー二世の愛妻フェア・ロサモント及びエドワード四世の寵ひ者ゼーン・シヨワであつた。ロサモントはクリフォードの男爵オルターの娘で、その絶世の美貌の故に、フェアと名附けられた。彼女はフランスゴの厄僧院で教育されてゐたが、ヘンリー二世はその美貌を憐へ聞いて、僧院から彼女を連れ出し、ウードストツクの遠宮の一軒の家に幽閉した。これは貞操の堅固な

彼女を自分の意に従はす爲めと、今一つは女王エリエアの嫉妬から彼女を保護しやうが爲めであつた。しかし王がフランスへ旅したその不在中に、ロサモントの堅固な貞操を破つたトマス男爵は、ロサモントを度々口説いたが彼女の常に拒絶するの意味から、遂にこの隠家に女王を案内した。嫉妬に目の眩んだ女王は、携へて来た毒を至に調合して、贈りして来た従者達はロサモントを捕へて無理にその毒をロサモントの唇に押し當て、遂にその毒藥を彼女に飲ませたのだと云はれてゐる。他の説には女王がピストルでロサモントの唇を射撃したとも云はれ、また他の説では全然そんな事はなくしてロサモントはオックスフォードの厄寺で天命を完ふしたのだと云はれてゐる。

エドワード四世の愛妻シヨワは、ロンドンに住んだ金屋細工商人コトリー・シヨワの妻であつたのだ。エドワード四世は非常に運動好きの王であつて、また市民とも頗る親しんでゐた。そして彼の風姿は一般市民の妻と違つて、常に持てはやされてゐたのであつた。これが原因となつて兩者は何時しか接近する機会を生み、それが次第に濃厚となつて彼女はエドワード王の愛妻となつた。彼女は美人であると同時に、その性質も愉快に富み、王の傍にあつて不幸に泣く市民達の爲めに王に切腹したと云はれてゐる。また王も彼女の美よりも寧ろこの性質の爲めに魅惑されて、彼女を妻としたのだと傳へられてゐる。そして彼女はエドワード四世の死後はハステングス男爵に身を任せてゐたが、リチャ

ード三世がハスタンフ男爵と交した時に、彼女も妖婦であるとして告発された。然し彼女はこの告発を財貨を以て承服とすることが出来た。

これらの情話を歴史上に残した後に、ヘンリー八世の時代が来た。このヘンリー八世は英國史に於ける暴君の典型的な王であつたとも云はれてゐる。彼は「人間」と稱するよりも「怪物」と云ふに相違しないと評する者もあつて、彼のローマのネロ大帝を聯想させるやうである。彼は青年時代は何等非難される暇もなく、また家庭的にも十七年間と云ふ長い間を、カザリンを妻として平和な裡に過したのである。ところが不意に彼はアンニー・ホレインと呼ぶ婦人に熱中しだし、ホレインを宮中に入れたが爲めに、カザリンを離婚する理由を探し出し、その間絶えず次から次へと女漁りに耽溺し、而かも手に入れた女との關係も極めて短期的で、寧ろそれは〇〇と呼ぶのが至言であるとさへ云はれた。

アンニー・ホレインとの關係並にその結婚に就ては、多くの語る可きものがあるのである。アンニーと關係を結んだヘンリー八世王は、それを理由として彼女と結婚せん事を申出でた。アンニーの母はそれを拒んだが、それ位で自分の意志を斷へずやうな王ではなかつたが、カザリンとの離婚に就ては彼も非常に困難をした。一方、王とアンニーとの間は益々濃情となり、世間へもその事は知れて来た。漸くにしてカザリンとは離婚をして、アンニーを妻とすることを得た。その後、間もなく

の事である。王は新妻のアンニーを同伴で、グリンニツアの舞會へ出席した。その際に王は自らも其の舞技に出席した騎士の一人に、彼女の情夫のある事を發見したのである。ヘンリー八世は直ちに彼女の中途から、ウエストミンスターに歸へり、アンニーを本通罪として告發すべきことを命じた。調査の結果はアンニーとその騎士とは久しい前から情交關係のあつたことが明瞭となり、彼女は私通及び骨肉相姦の罪名で告發され、審問に附せられた審判官はアンニー・ホレインは宮内官四名と私通し、彼女の兄クロフォード男爵とも不義を續けてゐると發覺した。そして以上の罪に依つて彼女は遂に死刑を執行せられた。然し事實は全くなかつた。唯、王と結婚する以前に一人の情夫があつたことだけであつたが、彼に關り立てられたヘンリー八世の意を迎へる爲めに、審判官が虚偽の事實を造り上げたのだと云はれてゐる。

このヘンリー八世の娘エリザベスは、父の強烈な性慾をそつくりと遺傳されて、その一生を淫業と淫蕩とに送つた女である。彼女は未だ少女時代から野郎な阿諛と淫蕩とを好み、追従巧言は終日無くも飽きなかつたと傳へられてゐる。そして年頃になると彼女は男性から男性へと移り歩るき、而かも同時にその悉くを情夫としてゐると云ふ様な有様で、ヒュームの著述の中にはエリザベスが多数の男性に取巻かれて、〇〇〇〇〇〇ある状態を描寫した一頁がある程に、彼女の淫慾は飽く所がなかつ

たのだ。ライセスタ、ハトン、エセツタス、モントジョー等の人々は皆彼女の愛の分割を受けた連中であり、更に他面にはスリムーブリー伯爵夫人との同性愛さへ傳へられた。究くヘンリー八世の娘たるに相應しい女性であつた。

然るにこの「女性」エリザベスの直系は彼女とは正反對の性質であつた。ジエームス一世は節制のある王であつて、一人の妻も持たず、また好色の宴樂に耽けることもなく、彼自身は立派な人物であつたが、然し従來の宮中の空氣——特にヘンリー王とその次のエリザベス時代との類處と淫風とに浸み込んだ宮廷の空氣と、その空氣に支配せられて來た宮内官、女官連の風習を改革することは到底出來ないことであつた。

劇場通ひの王様と「女たらし」

國體的 舞臺圖 幕本のやうな新聞紙

然しその前勢に依つて宮中の空氣は儼然として淫蕩ではあつたが、ジエームス王の個人的品位の力

は何時しか漸次的に、英國民の間に浸透して轉てはピューリタン運動が起るに至つた。ピューリタンの徒は一切の愉快な事を絶てて罪惡なりとして避けた結果、社會を陰鬱な空氣を以て蔽ふやうになつた。芝居、舞臺、舞踊は全部罪惡とせられ、男女間の交際を嚴禁することが姦通、私通、誘惑を除去する良策なりとせられた。

然しこの餘りにも不自然なピューリタン運動を國民全體に強いた反動として、前時代の騎士道の反動よりも尙ほ一層の強い反動が、社會全體を襲ふて來た。その結果として宮中に於ては美しく飾り立てた酒宴が打撲き、それを見習つた庶民階級の人々は、猥褻な歌樂に打没り、芝居、舞踏は一齋に隠滅せられて、到る處で舞員の盛況であつた。不自然に壓迫せられてその吐口を見出さなかつた人々の性の慾望は、様々な形で到る處に爆發したのであつた。

この時代の社會状態を知るには、何よりも劇方面に見ることがいいのであるが、舞臺の上で演ぜられる筋書は、何れも皆、私通、口説の類から強姦の場面までも脚色して見せなければ、観客は承知しないのであつた。舞臺上の道具にも華美を極めた色彩を用ひ、淫蕩な空氣を舞臺に漂はすことが要求せられた。俳優は自分が舞臺上で演じた筋書を、そのまゝに自分の實生活上にも適用した。そして劇場全體が隅から隅まで毒兒、姦婦、不道德漢の中央集會所のやうになり、密會の約束は

必ず劇場が利用せられ、賣場は賣店を出してその商品を賣るよりも酒を賣り、性器を賣るのに忙しい有様であつた。

また宴會は必ず徹夜するのが其の例であつて、人々は相集つて徹夜して飲酒し舞踏する習慣であつた。そして酔ひしれた極旬には、必ず裸行爲や淫蕩極る遊戯でなければ、その酒宴を閉じることがなかつた。而かもそれが上は王宮から下は乞食階級のやうな者まで悉くが、この酒と淫蕩とに耽溺したのであつた。そしてこの流行に相應しいやうに、衣服の胸は成るだけ廣く開けて肉體を露出させるのが好かれた。

當時の劇場の空気を知る爲めの挿話として、その時代のロンドンには唯一つの劇場しかなく、それは「キングス」劇場と云はれた。そこで當時の俳優として有名であつたネル・グウィネ並にベカ・マーシャル夫人が出演してゐた時である。この劇場の最貴客の間に、何かの機會から二派に分れて論争が始まつたのである。一方はネル派、一方はマーシャル夫人派と別れて、その争論は何時決着を見るか知れない程であつた。するとマーシャル夫人は突然に「ネルはフックハースト男爵の妻だ」と叫び出した。一方ネル派はこれを聞いてマーシャル夫人は数人の男と情交があると断し立て、何時この争論が終るとも思へなかつた。このやうなのが觀客の間の空気があつた。

そして上演される劇はといふと前述の如くに不道徳な演劇極るものであつて、淑女達はマスクで顔を蔽はなければ観ておられないやうなものを上演したのである。事件は大抵は宮中での事件や人物を取り脚色したが、餘り明瞭なもので女官達が不安に思ふやうな場面には、筋の作り換えをする事も稀にはあつたのである。それで舞臺の俳優達は脚本に書かれてゐる言葉よりもつと野郎な語を使い、猥褻な身振りをする事に依つてのみ、觀客席を喜ばすことが出来たので、彼等俳優達は好色的な露骨な語や感情をそそり立てるやうな露骨な語を吐いて、自分の誇りとしたし、また斯る語や行爲も許されてゐた。女優達も自分の人氣を博する爲めには脚本の原文以上の思ひ切つた自由な淫蕩な表情と語を使用した。

劇場の劇場時間は普通は午後四時であつて、それから芝居が始ると觀客達は公座とか又は俱樂部へ相伴つたが、其處では今觀て来たばかりの舞臺上の事を演説するのであつた。前にも述べた通り少女賣場は劇場へ出入して、其處では多く果物屋を出してゐるのであるが、これらの少女達には監督が附添ひでやつて来る。所でこの監督が名だけのもので、實際は客引のやうなものであつて、客の前で幕間ひには少女達と好色的な會話を取交はしたり、野蠻な行爲をして見せるのであるが、客はそれを見て喜び芝居の幕間ひの楽しみにするのであつた。

チャールス二世にはこの劇場の女優数名を愛妾としてゐた。その愛妾の一人タピスがチャールスの妻となることを得たのは、彼女が常に舞臺の上で「私の家は冷たい庭だ」と唄つてゐるのが、偶然にもチャールスの耳に入り、王は彼女は自分の妻になりたいのだと判断して、そこで彼女の爲めに莫大な費用を投じて壯麗な住宅を建てて與へたのである。

女王がチャールスと女優タピスとの關係を知つた時に、彼女は少しも争論をしないで、タピスが舞臺に現れると不意に劇場を去つて、チャールス王に對して自分の感情を知らしめやうとした。然し王はこんな程度の緩慢な抗議では、その放埒を改めさせることは不可能であつた。王は依然として放縱であり横行であつた。然し王の情婦カスルメーン伯爵夫人は女王のやうな消極的な態度を執らずに、王の多情に對して復讐する爲めに、自分も他に情夫をつくつてそれと同様した。

ベックハースト男爵の妻であつたネルに就ても、彼女がチャールス王を迷はしたとの噂が立つた。然し間もなくそれは單なる噂だけのものとして、世の中から打消されて終つた。所がドリデンの悲劇上演に就ては、このネルが主演として舞臺へ出ることに決定してゐたのに、その初日の前夜になつて芝居は延期されることになつた。ネルが初日に出演し得られないのが延期の理由となつてゐたが、延期の原因が明かにされた。そしてネルとチャールス王との間の關係が社會に公然と曝露された。然しこ

のネルも自分割りで王の寵愛を保つことは出来なかつた。従来と同様に王は間もなくネルに飽いて來たのである。

そしてチャールスの妹オルレアン侯夫人が彼を訪問した際に、夫人の従者として伴つて來た少女の一人、ルイス・ド・タルエルといふ少女に王は眼を着けた。總てこの少女は一子を産み、それが後のリッチモンド侯爵となつたのであつた。そしてネルはこの少女に完全に王の寵を奪はれて終つたのである。

チャールス王の放埒とその周圍の無節制を見せつけられてゐる民衆も、その模倣をして一世を擧げて享樂天國と化せしめた。斯くして滔々としてこの類敵と無道徳とが打撃いて行きさうであつたので、女王は遂に宮殿を棄てて、ストランド街の「サンマーセツトホール」に移り住んだ。女王のこの行動は睡つてゐた民衆の心を振盪して、漸やくにして世論を喚起し、帝國議會に於てもこの社會的墮落の不秩序を改造し、社會組織を緊張せしむ可しと云ふ氣運と努力とが勃興して來た。遂に議會は賣春婦の異窟なる娯樂場に課税するの議案を提出した。その議案の論戰の最中にパンクハースト卿は、「遊春は皆王の僕臣であり、王の歡樂の一部である」と放言した。これに對してカンタベリー卿は「王の歡樂は男子の間又は女子の間の何れに横はるのであるか」と反問したが、このカンタベリーの

王は王に對する攻撃であると云はれ、遂に某官内官は彼を暗殺せんとして、その爲めにカンタベリー卿は鼻を削ぎ落された。然し王が臣下の或る階級の専横との間に強固的な好色淫蕩のあつた事は否定されない。また妻を持つにしても多く外國人を妻に選んだが、これは外交的結果を考へて斯くしたのであつたらしく推察される。マドモアゼール・ド・タルウエル即ち普通にはカウエル夫人と呼ばれてゐる佛蘭西女は、英國と佛蘭西との間を安全且つ有利にする爲めに用ひられた、私的外交官である。英國民衆は考へてゐた。それ故に、カウエル夫人は一般民衆からは敵意を惹かれ、民衆は何か機會ある毎に彼女に對して嫉妬の情を表はした。

前述の女優ネルはイングラント人で且つ清教徒であつたが、カウエル夫人はローマ教徒であつた。或時ネルがオプタスフォード通りを通行の際に、カウエルと間違へられて民衆から暴行を受けやうとしたが、彼女はその奇智を出して車の窓から紙を出し、「自分は清教徒であつて、舊教徒者ではない」と告げて、漸くその暴徒を鎮靜した。

斯の如き社會の狀態であつたから、そこに生れた文學美術も頗る遠慮風紀を棄す露骨文學であり、繪畫であつた。ポーワマウス侯夫人が、レース仕立の衣服を着て蓮の花の咲き亂れてゐる埜に凭れてゐる古き繪草紙、また女優ネル・ダウイネが半裸體である何像畫などが、王の宮を飾つてゐた。チャー

ルス王は斯くて毎日曜日には王宮で多くの愛妾を兼ね、自分はその中央に處して女達の勝手氣位な態度を見て喜んでゐる。この愛妾達の群から少し離れて近習達は愛妾達を歌はせる爲めにとて歌を囀ひ奏でる。その間に賭博用の大車が持ち出されて、女官達はこの車の周圍に着席して賭博の遊びをする。時には二萬圓といふ大金が賭けられる事もあり、斯くして賭博と酒と淫樂とは夜を徹して圖まで續けられる。

或日曜日もやはりこれと同じやうな騒ぎが朝まで續けられた。朝の八時にチャールス王は突然に車中に擱はれて、それから六日間を生きてゐたが、發病してから一週間目に彼は死んで終つた。チャールス王こそは歡樂の中に文字通りに死んだのだ。

チャールス二世の死後にジェームス二世が王位に登つた。ジェームス二世は性格として質朴且つ嚴格であつたが、その多情な點では前王に劣らなかつた。チャールスが美人を求め容姿の艶麗を受けたのに比して、このジェームスは容儀などは殆んど意に介せず、専ら肉慾そのものを追求した。ジェームス王妃は容姿の點では何等すぐれたものがなかつたが、それに比較して尙ほ見劣りのするアラベラ・チャーチヒルと呼ぶ女を愛した。然しその女に對する愛も夫でカザリン・セトレイに移つた。

カザリンの父チャールス・セトレイは強情で且つ豪放な性情の持主であつた。このセトレイは文學

的才能の持主であつて、多くの作品を發表して社會から認められてゐた。然し彼の作品を社會的に有名にしたのは、その作品を構成してゐる非常に流暢な會話と、その極端な猥褻とであつた。そして彼の日常生活もその作品と同じやうに、頹廢した當時の社會に於てさへも非難された程に不道德なものであつた。その一例として、或日のこと彼は同じ仲間の飲友達と一緒に、公園の屑酒屋で酩酊した上で、彼は裸體となつてそのバルコニーに現れ、猥褻野蠻な言辭で演説を始めた。すると群衆はそれを見て憤慨し投石したので、流石に豪傑な彼も屋内へ逃げ匿れたと云はれてゐる。その娘として父の性情を承け継ぎ、また斯る家庭の内に教育せられた娘の生ひ立ちも想像するに難くはない。カザリンはその容姿に於て婦人としての何等の魅惑力をも持たなかつた。彼女は瘡を帯びてヒヨロ長く、間の抜けた姿で、凹んだ頬、陰鬱な顔、それはヤブ配みに輝く眼——これら總てが彼女の容貌を語るものであつた。ジェームス二世が魅惑せられたのは、彼女の外貌でなくしてその性格であつた。

英國の歴史上にチャールズ二世及びジェームス二世の宮中に於ける放縱放埒より以上のものを見る事が出来ない。フランスに於けるルイ十五世の治世中及び攝政時代の宮中と匹敵すると云はれてゐる。英國中世の歴史はその時代が決して儼然のある時代ではなかつたことを物語るところの、數々の挿話を後世に殘してゐる。例へば騎士道の勃興と清教徒の運動があつたにしろ、それらは悉く短かい

期間だけの感化力であつて、而かもその感化力が宮中にまで充分に徹底しなかつた。そして宮中腐敗の影響は下層社會に直ちに反響した事實は明瞭であり、その媒介を爲したものが當時の劇文學であつた。當時のコミツクドラマを讀めばその時代の宮中と云はず田舎と云はず、社會全般に涉つて實情を露骨に暴露し、兇惡などの數々が、どんな風にして行はれたかを充分に知り得られるのである。

當時の文學的批評家は「英國紳士は他人の妻と自分の妻とは同一である」と考へてゐた」とか又は「英國の淑女は快樂と虚偽とで構成されてゐる生物だ」と評してゐる。斯の如き考へ方は、英國初代の王エセルバート時代の貞操觀と相似たもので、或はそれ以上の頹廢であり惡化であつた。何故ならエセルバート王時代には姦通は死刑を以て罰せられてゐたからである。その時代の新聞から材料を抜いて以下に少し記して見やう。

或時、一記者はロンドンのある通りを歩いてゐると、泥炭に汚れた瘡を細つた十七八の女が、その記者に近寄つて来て一盃の酒で宜しいから、それで自分を買つて呉れと申込んだ。彼は驚ろいてよくその女を眺めるとなかなかの美人で、それが男の淫情をそそるやうな風情で近寄つて來るのであつた。が然し記者はその時に非常な努力で冷静にかへり、そして尙ほ充分に女の身装を調べて見ると、その顔は鷹の如くに鋭く瘡せ、着物は下品に飾られて、その風姿全體が野郎であつた。記者は避ける

やうにして、その女に鏡を興へて立去つた……と記載してゐる。

また他の記事を捜すと、これも同じくその記者が（この記者は所謂昔の「探訪」と云つた種類の外交記者であつたのだらう。即ちロンドンの街の中を彷徨き廻つて、新聞種を拾つて歩いてゐたのだ）、コーチオフィスへ入つて行くと、其處で自分より先に紳士風の男が、少女の身許調査に来てゐるので、それをそつと窺見してゐると、この紳士こそは當時ロンドンでも有名な女術であつて、この女術が調べてゐるのは、今朝ロンドンへ着いたばかりの外國婦人や、英國の田舎少女を誘拐して行く爲めに來てゐるのであつた。これらの徒は金錢さへ貰へれば、高貴の夫人の邸からでも少女を誘拐して來て、外國紳士や田舎紳士に賣りつけるのは難作もない程の手段を持つてゐたのである。

その他この新聞にはこの書の中に、そのままでは記載出来ぬやうなロンドンの暗黒面が、露骨に記載されてゐる。しかもそれが普通の記事として社會に受入れられ禁止にもならず、寧ろそんな露骨な記事が一般民衆からは大に歡迎された。これを以て見ても當時の社會の風紀頹廢、好色文學横行が推察し得られるのだが、假令ば女術が少女を誘拐する手段と経路、それから誘拐した少女を客に提供する手法や、そして所謂水揚げ賣場後にそれを人肉市場に投げ賣りにする有様などが、詳細にまた極めて挑発的に記載されてゐる。そして事實それが當時の社會の實態だつたのである。

然しこの後に讀いたジョージ一世及び二世を経て、ジョージ三世の時代には幾分官中も清掃せられて、當時のフランス王ルイ十六世と共に、累代の積弊を改革し得られるかのやうに考へられたが、ルイ十六世は讀いて來た大革命の爲めに打倒され、ジョージ三世の息ウエールス公及びヨーク侯は、父王の意に反して姦臣と愚臣とに取巻かれて、淫蕩放埒を盡したので、ジョージ三世の努力も餘り効果を擡げ得なかつた。

ジョージ四世は稀に見る色魔として記録されてゐる。感情に走り、愼忍で淫蕩で、到底矯正し得べき性質ではなかつたと云はれてゐる。彼は「女たらし」と云はれた程に美貌の持主で、當時歐洲に於てこの王と、ルイ十六世の弟ドルトゥ伯とを以て、美男の兩大國なりとした。ジョージ四世が自分の美貌で多くの女を迷はし、自分の好色的感情を満足せしめてゐた影響は、當時の貴族青年にも放蕩の口實を興へて、シリダンの奇習、グイトハムの輕佻は英國紳士の理想となり、デボンシャイヤ侯夫人デールシアナの纏綿は民衆の間の崇拜となつてゐた。そしてウエールス公はこれらの蕩見妖婦の一大陳列の中心となつてゐたのである。

斯の如き英國累代の官中の頹廢と、社會全般の無道德淫蕩とを、兎も角も矯正し得られた力は、英國自身の事情でなくして却つて外國の事情の變化——明確に云ふならばそれはフランス革命の結果が

奮した力であつた。フランスに於けるヴォルテール、及びルーソウの思想はフランスの社會ばかりでなく、英國へも勿論影響した。そして英國民中の自由主義者は眞先にこれに共鳴したが、遂には中庸主義者をもこの心辭に引き入れた。然し他方これに反對して英國維新派の思想もあつて、相互に論争し合つてゐる程に、自由思想の母胎であつたフランスには革命が起り、引續いて来た戦亂に遂に歐洲各國を戰禍の巻に巻き込んだ。そして交戦國となつた英佛兩國は茲に思想的にも國文斷絶をして終つたので、一切のフランス式思想、社交術など、總てフランスの名詞の冠せられるものが、英國民から排斥せられ、且つその反動として純潔な思想哲學と文學とが要求せられたのである。

ロンドンの賣春窟

賣春窟と暴力團

「倫敦」そのまゝの賣春窟

千六百九十年に出版されたフレッチャーの作「ユーモアス中尉」を讀んで居ると、官中女術が自分の傳忘録を讀んで居る條があつて、この女術はそれを讀みながら叫ぶ「おゝタロー（これは官中へ歸

探された少女）この見は三百五十クローンで仕入れた玉だ。田舎紳士の娘で十五才だ。この見の値は相當になるぞ。賣れた値の中から、馬一匹だけはこの見の父に贈つてやればいいだらう」。

また千八百五十五年七月の某日のロンドンタイムスは一讀者からの次のやうな投書載せてゐる。

——「私は汽車を待合せてゐる友人と共に××停車場のプラットフォームに立つてゐた。其時二人の賣婦人が同じくプラットフォームに入つて来た。その二人の内一人の若い方は自分の知人であつた。その婦人は私にこれからロンドンへ行くのだが、それは或る貴族の家庭の取締人が必要なので、これからこの人と一緒に（と云ひながら知人は傍の老婦人を指しながら）其の邸へ行くのだ」と云つた。其内に汽車が来て、老年の婦人が二人分の切符を買つて汽車に乗つた。私はそこで私の知人に別れの挨拶をして、再び友人の所へ引返へして行く、その友人「あゝ驚ろいた。君が斯く迄も感面皮を人間とは知らなかつた」と云ふので、私は不審に思つて「君は何をそんなに驚ろくのか」と訊ねると「何だつて？ 君がいま話してゐた二人連れのことさ、よくも君は衆人の前で話が出来たと驚ろいてゐるんだ」との答へである。私は「うん、あの婦人か。あれは僕の知人の娘と、その同伴者だよ」と答へたのである。すると友人は「君は何も知らないやうだね。宜しい君の爲めに説明してあげやう」とかう前置きをして云ふには、「君の知人の同伴者と云ふ女は、マダムWと云ふので、あれはロンドン

でも有名な淫賣周旋屋だよ。つまり君の知人の娘さんは、あの女に誘われてロンドンの麗窟へ連れて行かれる所なのさ。この話を聞いて私はカッとなつて、再び汽車の窓に走り寄り、驚ろく娘を無理に汽車から引下ろして叫んだ「旦那さん、この汽車でロンドンへ行つては行けません。貴方の伴れの方は貴方によくない人です。それから老年の同伴者に向つても、「私は貴方の商賣が何だかを知りましたよ。私はこの娘さんを貴方に預けられないのです」と私は云つた。そして危い一刹那で、この純情無垢な女を救ふことが出来た。

こんな例は近代英國の社會に毎日のやうに起つてゐる出来事である。これらの女は大抵家政婦入用の看板を掲げて、何も知らない女を釣り寄せる。そして一度彼等の毒手に落ちたが最後、最早やその網から脱け出すことは不可能に近い。萬一にも強情を張つて自分の貞操を賣らうとしない場合には、彼等は何時でも暴力を用意してゐる。そして強制的に貞操を金にかへさせるのである。尙ほこの他にこの種の廣告に依らずに、漫然とロンドンへ逃げ出して来る少女達も、これら悪漢の手を運れる場合は殆んどないと云つていい、そして麗窟へ入つたが最後、歸國などは絶対に出来ないので、死ぬ迄は其處で賣春奴をやらせられるやうな仕掛けが出来てゐるのだ。

この女術達は教會の日曜學校にさへも出入りしてゐて、目星しい少女と見ると直ぐさま話しかけて

行く。そして最初は少女達の好きさうな品物を贈つて漸次に親密の度を加へ、總てはその少女を麗窟へ連れ込んで行くのだが、それが女術であるか、又はその少女の親類の者であるかが牧師にも判然しない程に、實に巧妙な手段で誘惑するのだ。それが性業婦人であると牧師が氣附いた時には、既にその麗窟から少女を救ひ出すことは不可能になつてゐると、或る牧師は告白してゐる。

少女保護を目的として設けられた「ロンドンソサイエティー」は多くの少女誘拐者の記録をつくつてゐるが、それに依ると誘拐された少女達は三ヶ月間は絶対に禁禁されたまゝで、賣春を強制せられる。三ヶ月後には外出自由となるが、この時期になると逃亡も自由ではあるが、少女達は最早やその生活に慣れて逃亡するものは極めて稀である。他へ行く者もあるが、其處でもやはり彼女達は同じやうな生活を続けるのが多く、賣家へ歸つて行くのは稀である。そして女術達はロンドン市内の各所に代理店を設けて、失業下女やまたは就職してゐても現狀に不満足を覚えてゐる職業婦人達の申込みをも受附けてゐる。この代理人は小さい商店の香頭、洗濯婦、掃除婦であるとか又は日傭稼ぎのやうな種類の職業を持つてゐる人間なので、自然と下女其他下級職業婦人との知合ひも多い譯である。其他ロンドンの山手町の下宿屋、旅人宿の香頭や帳場人もこの代理人を兼ねてゐるのが多い。これは若い田舎婦人がロンドンへ来て、この種の宿屋へ泊ると、その香頭なり帳場人が甘言を以て、女中率

公と稱して女術に賣渡したり又は娼家へ連れ込む。それ以外に公然と女中口入屋の看板を掲げて、この種類の商取引をやつてゐる人間もある。女術はその店と絶えず連絡をつけてゐて、勞せずして金を握む。また女術が自分で店を開いて田舎からロンドンへ来る女を誘拐賣渡してゐるものもあるなど實にロンドンの周旋屋なるものは千差萬別である。

この他に流石に大陸と近い關係上から、國際的な賣春婦の密輸出入が行はれてゐる。その連絡所はロンドンとハンブルグ、ロンドンとパリである。ロンドンの誘拐業者は皆パリやハンブルグにその代理店を持つてゐて、其處の代理人が誘拐した女を甘言を用ひて船に乗せてロンドンへ送り込むのである。だからドーバー海峡の連絡船には英國の「家庭教師入用」とか「家政婦を求む」とかの廣告を出してゐる。これらに對する英國警察の取締も相當に苦心してゐるに拘らず、餘り効果を挙げないのは、彼等悪漢が違法行為で誘拐と賣渡はしをやつてゐるのと、また賣春婦連自身も二三ヶ月の間にはこの商賣に慣れて苦痛を感じない所から、却つて警察の眼から逃れやうとする爲めであるといはれてゐる。

また日本でも同じことだが、英國でも淫賣窟には附物の暴力團がゐて、これらの男達が表面は何處までも「正義の味方」を演じて、實は娼家の用心棒を勤めて絶えず女連を監視してゐるのと、他國に

は女連の衣服化粧道具其他を主人から高價に賣附けられて、それで借金の返済開始に身體を押へられてゐるからである。勿論、法律はこんな借財を認めないから、そんな借金で身體を押へられる筈はないが、その法律を知らなければ殆んど役に立たないが、若しその法律で借金を押引にしようとする時には、何時でもお抱への用心棒が顔を出すのである。

英國に於ける賣春の研究者アートの發表を見ると、賣春婦となつた原因として自然的な原因と偶然的な原因とに分けて研究してゐる。先づ自然的な原因を見ると、性質上の淫逸並に感傷性、虛榮、不正直、貪慾、懶惰を挙げてゐる。偶然的な原因には男女間の不睦の情事に原因するもの（即ち密通、誘惑又は暴行に依る關係）、貧窮の低廉、失業、暴飲暴食、貧乏、不完全な教育、兩親の品行、悪質な出版物を拜讀してゐるのである。この内で最も最大の原因となつてゐるのは、貧困と誘惑とであることとは無論だが、賣春婦の殆んど全部の告白を讀くと誘惑を原因に數へてゐる。然しこの告白の全部を眞實として聽くことは出来ない。自ら進んで口入屋や代理人を訪ねて魔窟に入つた者もあるからである。然し斯の如くに自分で進んで賣春婦に墮落した者も、その原因を更に探ぐると多く貧困に依る者が多い。

この貧困に就てロンドン下層社會の光景を描寫したいと思ふ。貧困者の家庭がどんなものかは次の

一瞥でも明らかになると思ふが、ロンドンのある家では一人用の組合へ五人から以上の人数が暮らしてゐる。そして斯の如くに男女同居の生活の中に、幼少時代から成長して来た影響は、長ずるに従つて不良の常習を生むやうになり、甚しいのはこの同居生活中に見舞ふ事件が度々起つてゐる。彼等は少年少女の間から既に賣春婦的現象の種に育てられて來てゐるので、道徳的に無關心であるから、何等の反省もなく生活の爲めには賣春をするのだと告白してゐる。ロンドンの木賃宿式宿所も亦、これらの賣春婦の學校である。そこでは六歳乃至十二歳の宿料で一晩を過すことが出来る。そして男女雑然として寢床の中で、大人達に依つて野蠻な話や言語が、誇らしげに大聲で語られる。そして悪事の數々が相互に相談し合はれ、淫褻な行爲は公然と行はれる。少年少女はそれを傍で見聞してゐて、自分達も早く大人になつて大人のやうな事をしたいたとの願望を持つやうになる。然かもそれ以上にこの木賃宿のお客達は、衣服と云つては唯一枚の「着たきりの連中」であるので、寢床に入る時には赤裸々となつて寢るのが常習である。

この木賃宿の光景は「地獄」を彷彿させると云はれてゐる位に、悪夢でそして好色的なものである。この木賃宿の實際は「強盜、スリ、賭博の」と海千山千の賣春婦とである。そしてこの實際が、この木賃宿のお客達を支配してゐるのである。斯る空氣の中から將來強盜になる少年と賣春婦

になる少女とを川さなかつたとしたら、それこそ頗る奇蹟であらう。現に母と娘とで賣淫をして、床を並べて客をとつてゐるやうなことは、ロンドン貧民街には數多く見ると云つて、チートは自分の調査を發表してゐるが、その一部を挙げるとエチンバラ性賣婦の項目の中に、娘四人と共に賣春してゐる母親二人、三人の娘と共に賣春婦になつてゐる母親五人、二人の娘と共にしてゐるもの十人、一人の娘と共にしてゐるもの廿四人を擧げてゐる。

而かもこれらの原因が多く貧困であり、遊惰な夫を持つた妻、病氣失業に依る夫を持つた妻などが一片のパンの爲めに娘と共に賣春婦となつてゐるのである。この現象を救済する爲めにロンドンに於て救護所と投産場がある。然しこの設備はこれら飢に迫つた家族に對して殆んど其の用を爲さないと云はれてゐる。それは投産場にしても救護所にしても夫々に、非常に嚴格な規定があつて、救護期間中は夫婦別居すべしとか、子供とは別れてゐるとかの要求をされる爲めに、正直且つ眞面目な貧困者は、この救護法を嫌惡するに至つた。そればかりでなく、假令救護所規定に従つて救護を受けやうと欲しても、その收容力よりも希望者の人員が超過してゐるのが普通である。年々一千萬圓の大金が貧民救済に投ぜられ、また全土に涉つて救護所が設備せられてゐるにも拘らず、それだけでは到底救ひ切れない現状にある。この二箇の原因からして、貧困者の家族はパンを求めて賣春婦となるのである。

る。

まだこれ以外にも原因となるものが多くあるが、當時の（十八世紀時代）貧民救護所の機構を記載したディッケンスの小品を見やう。當時第一流の英國の小説家ディッケンスは書いてゐる。——千八百五十五年十一月の寒い或る雨降りの夕べであつた。ホワイトチャペル投票場の門口を過ぎやうとして、圖らずもその門口に五箇のボロ東が横臥させてあるのが目についた。よく見るとそれはボロ東ではなく死人のやうになつた婦人達で、この五人の女達は雨に濡れて地上に寝てゐるのだ。私は友人と二人で起して見たが、地面に立つてゐるだけの氣力が失せてゐる。投票場へ入つて所長に會つて、「門前で五人の女が飢えて倒れてゐるが知つてゐるか」と訊ねると、彼は少しも知らないと言へた。そして續いて云ふには、「此處はもう一杯なんです、申込みはあるのですが、家中一杯でこれ以上は、もう收容しても寝かせる場所もないのです。それに申込は毎日のやうにあるのです。私は何うしたらいいのですか」と斯う陳謝した。

圖て私達二人の訪問が所長を訪問する爲めでないと思つた時に、彼は漸く「實はあの五人の婦人達は三日も前から門口で倒れてゐるのです。時には十人、廿人と連れ立つて来て門前で倒れてゐる事もあるのですが、そんな時には仕方なく子供だけを收容してゐるのです」と告白した。

私達はこの所長の告白を聞いて、何うする術もなく投票場を出て、再び女達の所へ近寄つて訊ねた。けれど女達は運着する氣力も、既に失せて絶つて唯表情だけで「空腹です」と意味を通じた。私達は一枚の銀貨を興へて「これは神の御恵みですよ、神に感謝して何か買つて食べなさい」と云ふと、彼女達は滿面に活氣を浮べて、それでも立つて歩むことは出来なくて道ひ去つた。——ディッケンスは斯く書いてゐる。讀者諸君は考へるであらう。こんな境遇に落ちに女達が、生きんが爲めに最後の手段として何を賣るかを。そしてこれは十八世紀末葉の英國貧民の生活であつて、今日は更にこれに幾百倍する悲惨事が繰返へされてゐる。ジャック・ロンドンには自ら貧民窟イーストサイドに身を投じて、二十世紀の英國貧民生活を——その裏面の悲惨と犯罪との暗黒面を——世界の讀者に訴へた「落の人々」は、英國ばかりでなく、全世界の貧民窟の生活を代表した叫びと聽く可きである。

以上の程度の悲惨に至らない迄も、職業に就いてゐる婦人達の賃銀収入の程度を調査したものを見ると、ロンドンに於ける或る若い職業婦人の告白に依ると、彼女は一落三十鎊の割合でモール皮製ツボンを縫つてゐる。全努力に依つて一週十二着を縫ひ上げる事が出来るが、然しその週間には働かない時間も出て來るので、朝は六時から夜の十時まで仕事をして、一週間の収入四圓が普通である。然しこの四圓の収入から、糸代燈火代七十六鎊を消費するから、一週間三圓五十鎊以上は絶對に手

にすることは出来ない。この金で自分は母を養つてゐたが、到底永續する見込みが立たず、三年間辛抱した揚句に遂に別の内職をもする可く餘儀なくされた。つまり或る青年の妾となつて、収入を増加する方法を執つたと云ふのである。そしてこの女は若いとは云つても有夫の女であつた。それで尙ほこれに附加へてこの夫人は、ロンドンで商店に働らく少女で、その商店からの収入だけで生活してゐる少女は皆無である。彼女達は總て實業が一の財源となつてゐて、その収入なしでは衣食を満たして行くことは到底出来ないと言白した。

更に一層直接的な實話を述べると、三人の子を連れたい一家婦は何う働いても、一週間に一圓五十錢以上の収入を得ることが出来なかつた。然し彼女は自分と三人の子供を喰はせなければならぬ。投函所へ行けば一圓五十錢以上を手にすることが出来たかも知れぬが、然しさうするには子供と別れなければならぬ。親と別れた三人の子供は何うするであらうか。これを考へた時に彼女の行方はストリート・ガールより他に道は開けてゐなかつたのである。また他の例として美談の彼女氏が、生活の方便としてシャツ屋に雇はれることになつた。彼女はそこで一週間に三圓の収入があつたが、家族を抱へての三圓の収入では一家を維持して行けなくて、遂に彼女も街上に出て男を捜す女の群に落ちたのである。然し一度は道徳的の叫責から、それを止めたのであつたが、愛児の一人が毒傷に罹つた時に、泣

き叫ぶ子供を前にしては身も切られる思ひで、その醫藥の料金を得る爲めに再び賣春婦となつて悲つた。而かも彼女の父はキリスト教の牧師だつたのである。

押えても押え切れぬ

妻妾本の大洪水

賣春婦の所、下級職婦人達に次で多く賣春婦を出す階級は女中の階級からである。これは賃仕事に従つてゐる。貧困婦人よりも、幾分か安全な幸福な境遇にゐる。然し彼女達にはまた別な壓迫力があるものであつて、その爲めに衣食の問題からは比較的に安全ではあつても、同じく賣春婦の境遇に落ちて行くのである。即ち彼女達とその雇主である男子達との關係であつて、主人や男子雇人の爲めに絶えず誘惑を受け、不當な寵弄と侮蔑とを蒙つてゐる。そればかりでなくこの女中階級は家庭に於ける病毒の散布者となることもあつて、雇主達の秘密な歡喜の犠牲となりつゝ、自分も次第に墮落して行く。そして解雇された時には忽ち衣食に窮乏する所から、彼女達は直ちに塵屑へと跳び込んで行くのである。そればかりでなく淫業周旋屋は、精ノ目、肉ノ目でこの失業下女を探索してゐるから、忽

ち教育の親切を装つた甘言に引墮つて賣春を強められる機會も頗る多いのである。

この女中階級の間から多く生れる私生児であるが、この私生児は多く長じて賣春婦となるのが例であるやうだ。何となれば母親が既にその商賣に従事してゐるのであり、また幼少時代からその種の空氣の中に育てられて、他に眞面目な職に就くだけの觀念を失つてゐるからである。だからインダランドでは私生児即賣春婦とさへ考へられてゐる。ロンドンの貴族階イーストエンドでの住民の多くは内縁關係であり、田舎に於ても數名の私生児を連れてゐる婦人を見ることは珍らしくない。そしてこの種の婦人は賣春婦であつた女か、或は現在もそれである女が多い。これらは悉く生長して年頃の女になると、自分から進んで賣春婦の道を探ぶのであつて、前述の數例とは違つてこの女達は生活の爲めとよりは、寧ろその性情から來てゐる。

最後に賣春刊行物に就て少しばかり述べて置かう。この種の刊行物が少女をそのおかしめて、性的墮落に導く原因となる事も頗る多い。ロンドン市に於て賣春刊行物を賣減せん爲めの協會が設けられたのは、既に古いことであるが、設立當初三年間に協會で行つた仕事の數は

不教育書物

二七九

賣春書物

一、二六二

賣春歌

一、四九五

賣春畫

一〇、四九三

と云ふ莫大な數に昇つてゐるが、それは全禁止數の一部分にしか過ぎないのである、と聞いたら禁止の數を免れてゐる數をも加へて、賣春刊行物の全數を想像する時には、殆んど想像もつかない程の數字を計上しなければならぬことになるであらう。

この種の刊行物を出す場所は決つてゐるやうで、ロンドン市のストランド通りホリウエル町及びライセスター廣場が、その主な場所だと見られてゐる。そしてロンドン警察の干渉は、餘り積極的な活動をこの方面に對して向けて居らないので、幾回の檢舉に會つてもこの種の刊行物の發行所も、亦この種の刊行物も減少を見ない。然しこの種の刊行物が、如何程の感化力を青年男女の墮落に對して持つてゐるか、と云ふことは明瞭ではない。然し娼家に於ての裝飾用として、多く使用されてゐるし(特に繪畫がさうである)、娼婦の愛護書ともなつてゐるのは事實である。

これらから見ても賣春刊行物と、賣美との關係は切り離せない。唯、衣食問題のやうにそれが直接的ではないだけである。教育と賣美と犯罪との間には密接な關係があるのである。

ロンドン警察署賣美の材料に基くと、賣春行為に依つて檢舉された女の三千百三名の中で無教育の

者が大半を占めてゐる。即ち内閣を示すと

- 読み書きの出来ぬ者 一、七七三名
- 不完全でも讀書の出来る者 一、二三七名
- 充分に讀書の出来る者 八九名
- 高等教育を了へたる者 四名

そしてこれらの賣春婦達を地方別に分類して見ると、田舎出の女達は多く教育を受けてゐるに反して、却つて都會の女は教育がないのが多い。

次に賣春婦の年齢を調べると、普通は十四五才から四十五才の間とせられてゐるが、事實では十四才未満で誘拐せられて、賣淫を強いられてゐる。實際に十二歳にして誘拐されて來て賣春婦とせられた少女があつたのである。そしてこれらの女の性的營業期は幾年間位であらうか、これも四十五歳までは可能なりとは純理的に説明し得られるが、然し事實は却つても四五年の期間しか、その營業を繼續する可く身體が續かないことを證據立てゝゐる。一ヶ年この營業を續けた女は、一ヶ年後には甚しき肉體の衰弱を覺え、三年間も續けた女には、その舊友と離れ別れられぬ程に、容體肉體の變化が甚しいとの事である。特に廿才以後に於て賣春生活に入つた女は、その變化の甚しきものがある

のである。

テートの發表を見ると、廿五歳以上迄も兩賣をしてゐられる女は、全體の十分の一に充たないし、またその死亡率に於ても頗る多く、この營業中に、又は營業後に過勞の原因から死亡するものは、死亡人員中の五分の一若しくは六分の一に該當するだらうとのことである。またレーファン博士は賣春婦としての營業期間を四ヶ年を限度とすると主張してゐる。またミラトの意見では賣春婦として適當な年齢は十五才から廿才までの間であつて、五年間が平均年齢であると云つてゐる。

エデンバラの「ロック病院」入院患者中の賣春婦、一千名に就て調査した年齢の内閣を見ると

十五歳未満	四二名
二十歳未満	六六二名
二十五歳未満	一九九名
三十歳未満	六九名
三十五歳未満	一六名
四十歳未満	六名
四十歳以上	六名

以上の数でも明白な通りに、十五才から廿才迄の賣笑婦の入院率が最も多く、次が二十五才迄の年齢である。然しこの二つの年齢の間の数字の差に非常な差を生じてゐることは、二十才近くの少女が如何に多く賣笑婦になつてゐるか——これを換算すると賣笑婦としての女の年齢は十五歳から廿才の間が、最も適當であり、また斯る商賣に従事するには、肉體的に最も耐久力を持つものであることを證明する最も雄辯な事實である。そして三十歳未満から三十五歳未満への間の数字の減少、殊に次の四十歳未満との間の減少は、そもそも何を圖つてゐるか。この数字の減少は彼女達の職業の率を示すものでなくして、それは實に死亡数——即ち彼女達の過勞と病氣に依る死亡数を示してゐるものである。

人類の——否生物の——性慾は實に無限であり、他の種での慾望を減しても、この慾望は決して減することも得なければ、また抑ゆることもない。文明が益々發達し、社會の秩序と抑壓機關が發達すれば、それに適應して益々性的手段機關も發達し完備の域へ進む。人爲を以て——假令は法律乃至は強制的抑壓力を加へても、一時的の對策はある程度は成し得ても、その反動は寧ろ恐る可きものであり、また法律機關の力を以てすることが不自覺の結果を生み、却つて男色などの強制的現象を促進ならしめたのは、前掲のフランス王朝史、英國中世史の王族の生淫や、ローマ法皇の男色生

淫に見て明かである。

さて私は人類性慾の發展史として、世界で代表的な數國を擧げて、茲に人類の歴史が即ち性慾の歴史に通ざないことを説明して来たが、顧みて過去から現代までの五千萬年の人類性慾と、未來に亘く幾千萬年の性慾史とを聯想する時に、吾々は實に無限の神妙に包まれざるを得ない。性慾よ——汝は何處から來たり何處へ行くのか。誰しもかう呼びかけずにはゐられないであらう。ネロの亂世も、ルイ十五世の亂行も、チャールス二世の好色も、さてはまたヴァチカン宮殿の奥深くに宗教のペールに蔽はれて、色好みに取つたローマ法王の男色沙汰も、總ては夢のやうで夢ではない。彼等が色慾地獄に墮いた吹息を、今も尙ほ現代人は感じてゐるのだ。そして自らも亦、その地獄に墮いてゐるのだ。私はその地獄繪圖の最後の章を吾々の國圖「日本」の性慾史に挿げやう。

第三部 日本の性慾史

— 遠き上古より明治時代に至る —
— 性慾生活の大膽なる大暴露 —

上代性慾史

古事記日本書紀に現はれたる

古代日本人の風俗時代

人類の婚姻史を細くと共同婚なるものが存在した事を否定し得られない事實を数多く發見する。我國の太古時代も亦然りである。一部の學者はこの事を否定して、我國には最初よりして斯る事なしと主張し、我國家の尊嚴を保つには、この共同婚の時代の我國になかりしことを立證せんとして我國の歴史を強ても曲解せんとしてゐるが、然し斯る曲解を以て奥い處に蓋をせんとする如き態度は、眞面目なる史家の態度ではない。

我國の上代に附母系以外の者とは誰とでも自由に結婚が許され、伯母を妻とし、異母妹を妻としたことは歴然たる事實がある。喜田貞吉博士の研究に依るものを見ても、上古我國に於てさへ斯ることとは通常のこととて、その時には決して共同婚は不思議ではなかつたのである。大政記の文句の「己が母を祀せる時、己が子を祀せる時、母と子と祀せる時、子と母と祀せる時」と敬へて國祚の中

入れてあるが、兄弟姉妹相姦は決して罪とはしてゐなかつた。仁賢帝の六年に日鷹吉士の従者鹿寸の妻鹿田女が夫と別離を情んで「母にも兄、我れにも兄、鹿車の我が夫はや」と云つた記録があるがこれは、鹿寸が自分の夫であると同時に自分の母にも夫であつたことを物語つてゐる。然かも當時の社会は決してこの事を不倫とはしなかつたのである。

鳥羽帝の御作八雲御抄に、天下の五奇祭として擧げられた京都洛北大原神社の鯉魚祭、近江気摩神社の鯉魚祭、越中輪奴神社の尻たき、常陸鹿島神社の常陸祭、陸奥の錦木など悉く共同婚の名残りであつて、後世の實淫の形式もこれから發生してゐる。近頃まで野處の農村に（或は場所によりては現在でも）様々な縁組の形式や盆踊りの中などに残つてゐる奇風と稱せられるものは、悉くこの上代の人類の共同婚の名残りであつて、我國三千年の歴史に連続として傳つてゐることを見て、人間性善の執着の如何に根強いかを思はせる。

共同婚に就いて起つたのが掠奪婚で、これには定期婚、試験婚、賣買婚と別つことが出来て、この中から實生的に實淫が生れたと見る可きである。

定期婚から説明すると、これは名の示す通りに或一定の期間を定めて結婚するのであつて、例へば越後國四萬原郡地方のドガタメと稱するものはそれである。これは十七歳より廿五歳までの青年の爲

めにドガタメと稱する宴會を催し、その年中の若者の數を定めてその若者と村内の中流以下の家庭の十五歳以上の女または下女と婚せしめて夫婦の約を成さしめ、期間を三月位に限りて相互に公衆と交情することを許し、期限が来れば又ドガタメを催して他の男と婚せしめる。また信越の國境關川地方では、舊曆四月八日には藥師堂で祭典を行ひ、同夜は藥師堂内に男女相集りて酒を呑み宴の酬なる頃になると燈火を消して、闇中に手を握り合ひそれが男女の場合には、そのまゝ夫婦となり翌年の四月八日まで一ヶ年間は同様し、その期日には又も同様にして改婚する風習である。最も奇なる定期婚は越後の「盆くじ」或は「盆かか」と稱するものである。これは明治の初年頃までは存在したとの事であるが、この盆くじは舊七月の盂蘭盆に當つて、村々の若衆か籠引に依つて村の女達を引當て、盆休みの期間中を自分の妻として自由にするのである。

更らに試験婚になると、より實淫に近いもので、短かいものは三四日、長くも一二年の間で、而かもその形式は下女の名義で迎へ入れ、それに満足なれば遂には名實共に妻とし、若し意に満たぬ場合には下女として給料を支拂つて歸へすのである。また妻として正式に入籍するにしても、それまでの期間中の給料は同じく支拂ひ、それが支度金となるのである。斯くの如く甲から乙へ乙から丙へと轉々として遂に相當の貯金を爲す女もあれば、また「アンナ氣むづかしやの家で一年も辛棒した女なれ

は「嫁にしたらい」と希望する特志の男も出て来るのである。この民間婚儀の中から今度は賣買婚が生れるやうになつた。

賣買婚の名残りは今日もそのままに残つてゐる結婚の形式である。これは女子を物品として、他の物品と交換した時代の遺風であるが一例として、所謂「女の市」の事を挙げて置かう。これは現在では廢れたが、東京府下の某郷に嘗てあつた女市(年二回定期に開かれた)筑前の津岸に漁夫の間に開かれた女市、尾防國に毎月三回づゝ開かれた女市などがあつて、これらの市場では女奴隷が賣買されてゐた。舊妻の習儀もこの時代から發生した。この賣買婚はかなり最近まで我國に存在してゐた。否現在の〇〇〇〇〇の各地遺儀に際して信心の篤い家庭ではその子女を〇〇の國房に送つて、これを「お手附」と稱して世間に出るとかの如きは、これは信心に因るものとは云へやほり賣買婚の變形と見る可きである。初夜禮なども同じくこの時代の餘度から發生したもので、後世の「水揚げ」は即ちこの初夜禮の延長である。

以上に述べて来たやうに我國の上代は共同婚、定期婚、賣買婚の時代であつたと同時に賣買時代であつたと云へる。その始原とも見る可きは我國上代の「嫁女」であつて、史上に残つてゐる天照大神の天岩戸入りに際して、岩戸の前で踊りをして八百萬の神々をアツと笑はせた天照女命は、この

嫁女君の祖先であると傳へられる。古事記に記されてゐる天照女命の容子からしても、この事が賣買であると同定される。更に上代の記録の中に發見される「嫁女」なる文字であるが、「いらつめ」即ちいらふめ、弄ぶ女であつて、この嫁女の名が上代より存してゐたに見て我國に新より賣買の嫁女が存在してゐたと思はれるのである。

また更に嫁女に關聯して「遊部」の存在である。この事はより以上に益々我國上代の賣買婚の存在を立證してゐる。即ち遊部は遊女であつて、阿曾比女または宇加離女である。然しこの遊部が次の時代の遊行舞即ち賣買婚の先驅をなすものではあつても、この時代の遊部そのものは全體的に賣買婚として認めることは出来ない。上代の「遊ぶ」とは神樂りを意味してゐて、この遊部は諸國を遊行して祭事を行つた女遊である。嫁女君も同じく鎮魂祭を行つたが、この遊部と嫁女君との所屬、形式及びその持つ内容も相違してゐた。然しこの遊部の女遊が時代の發展と共に次第にその社會的勢力を失ひ、同時に經濟的關係に於ても窮迫するやうになつては單に祭儀を司るだけでは衣食に窮するやうになり、その越く所は女の持つ最後の武器に依つて生活を維持するより他には、生きる道がなくなり遂に遊部は完全に賣買婚化したのである。

上代各地神社に附屬してゐた巫女が、遊部の女遊即ち遊行舞と同様の經濟をとつて賣買婚化した

とは見られないが、この巫女に就ても説明したい。と云ふのは巫女、神母と混同して采女なるもの
を生を見たらからである。神社附屬の巫女中で所謂「玉神」なる神の子供を生んだ者を神母と云ふ。考
へれば幽明世界に存在する神が人間の女に子を生ますと云ふ事は、實に無稽の事柄であつて到底傳説
とよりしか考へられない。然しこれは上代に於ける「神」なるものの内容を考へた時には直ぐこの異
念は解けるのである。上代の神とは所謂「現神」であつてこの現神とは神社の神主そのものに他なら
ない。即ち神主を神として認め、その下に巫女があつて神主は巫女の上に絕對の權力を握つて来た。
王神即ち神の子とはこの神主の子であつて、神主の子を産んだ巫女を神母と稱して特に崇敬せられた。
この神母が容姿衰へ寵愛失せて神社から追ひ出された時に、生活の道として選んだものは遊行婦と同
じやうに賣笑の道であつた。そして巫女は神に仕へたのであるが、采女は人に仕へたのである。即ち
地方郡領の子を〇〇に召して〇〇の采女とし、また地方官舎貴家の女を神社に召して神社の采女と
した。この者等が任期を終へた場合に、華やかな都の生活を後にして歸國すれば相當幸福な生活にも
恵まれたであらうが、その多くは都の生活をあきらめ兼ねて任期終つた後も都に留らうとする。そし
て多くは嘗て官仕へした神社の附近に居を定めるのであるが、隨て生活に窮すればこれも辿り行く道
は一つで采女は巫女として落ちて行く。そして巫女や神母の末路と同様に闇に咲く花として一生を終

るやうになる。

今日、各地の神社を廻つて遊廓や私娼窟が發達してゐる。これは勿論他にも多くその原因はある
が、その中の一つとして賣笑婦の始原が神社に仕へた巫女並に各地を遊行して神事を行った遊行即ち
遊行の巫女達の末路からであつた事にも原因して、それが今日に傳つてゐると見る可きである。

上代の性慾生活に就て最後に述べたのは「御陣女郎」の事柄であり、男色が我國上古の社會に既
に存在した事實である。それを次に述べやう。

御陣女郎とは何か？ 我國上代に存在した桂女が軍族に伴はれて兵士達と同じく各地を移動し歩い
た。これを御陣女郎と呼んだ。この桂女が巫女であつた。

京都市伏見町（舊京都府下伏見町）の御香宮は神功皇后を祭神とするが、これに附屬してゐた桂女
は神功皇后の征伐の軍に従ひ陣中にあつて皇后の妊娠中は御介抱申上げたと云ふので、以來は産婆の
役目や更らに婚嫁の介添人をも勤めるやうな變な存在となつたが、然しこの御陣女郎はその發祥は軍
族の間にあつて遠征の將士を慰める爲めに隨伴した大桂女の一群であつて、その目的が何にあつたか
は察知するに難くはない。

以上は異性間の上代性慾史であるが、これとは別に變態的な性慾の存在として男色の事實が上古に

於て既にあつた事は、神功記に載せてある。即ち小竹説と天野説との二人が男色關係があつて後代の所謂金葉の仲であつたが、小竹説が病死するに及び天野説は悲しみ歌きその傍に於て自殺した。人これを哀れんで合葬して墓を立てた。○○○○記伊國に讀でられ、忍熊王を哀めんとして小竹宮に行きたまふに靈啼くして夜の如くである。○○怪しんでその理由を訊ねられると、一老父がこれに答へて小竹説天野説の金葉のことを告げたと云ふのである。これが我國最初の男色の記録である。然し上古には男色はあつたが男婦の發生は見なかつた。戰爭と男色は附きものである所から考へて、上古のやうに戰爭の絶間なかつた時代に、軍旅の間から男色の如き變態性慾が生れたのは、寧ろ自然なこと云ふ可きだと考へられる。

斯の如き上古時代を経て大和朝廷の國家統一の運動が始まり、外來文化の輸入と共に我國の性慾史にも、また一段の發展と熾熱とを見るやうになつたのである。

奈良朝性慾史

萬葉集に載せられた

遊行婦と國司との情話の歌々

大和朝廷の奈良朝時代は貞観觀念に於ては頗る裕福で、青丹よし奈良の都は咲く花の匂ふが如くいま盛りなり」と歌はれたやうに、政治に於ても經濟に於ても美術工芸に於ても實に盛衰を極めたが、他方面に於て上古時代からの傳統として、その夫妻關係は亂倫を極め三角關係四角關係はそれ以上に様々な多角關係を極めて、處女と人妻との區別も判然しがたい社會狀態を生み、一夫多妻は寧ろ社會の誇りとなり、人妻を盜む男、人妻を遣ひ出す女を續出し、また賣笑婦も恐らく萬を越えたらうと算出する輩もある。然かもこの賣淫行爲は現代の如く職業を以て見られず、勿論名譽なことではなかつたらうが、一箇の職業として認められたことだけは確かであつた。

殊に當時の風習としては夫婦となつても、夫は他にあつて妻の家へ通つたが爲めに、この習俗を利用して夫は隠し妻を持ち妻は忍び男をこしらへた。これらの事實は記、紀或は萬葉集中の到處に散見する。

萬葉集中の阿曾比女、または宇加贈女と同じ種類の者として、一つの遊行婦女の群に入れるのは少し間違つてゐるやうである。が兎も角もこれらの女達が賣笑婦であつて、その賣笑婦の中には巫女或は采女としての役目を果しながら、その傍ら賣淫をしたのと、他方純然たる賣淫のみに依つて生活した賣笑婦との二種類があることを知らなければならぬ。萬葉集中にある遊行婦に關する歌は、多く前

者の神即ち巫女、采女として勤めつゝ、實笑した女である。萬葉集第十六卷に「吾が門に千鳥しば鳴く起きよ起きよ、吾が一夜妻人に知らゆな」とあるが、この一夜妻を直ちに實笑婦と連断することは書らく避けて、考へるにこの歌が後に制定を経て平安朝の時に「鹿島はかけると鳴きぬ起きよ起きよ吾が一夜妻人に見らゆな」とある。これを無釋して婚即ち巫女と神祭の一夜だけ神龍の犠牲としたとの意味であるとしたい。後世の人身御供はこの一夜妻の形式である。人身御供と云へば怪物にでも喰はれて終ふやうに後世傳へられてゐるが、事實はこの一夜妻と同じく、祭の夜にその神社の神官の性的犠牲とされることを意味してゐる。この一夜妻は更らに一夜女郎と云ふものを生んだ。

一夜女郎とは神祭の夜に少女に飯櫃様のものを持たせて神社に参詣し、氏子達が多勢集り來つてそれを祈し立てる風俗である。この一夜女郎の故事中で特記することは、(一)飯櫃様のものを持つこと(二)新婦の着物を着ることである。この飯櫃が後に饅にかはり、天下の五奇祭の一つ筑摩の饅餅祭り祭に殘つてゐる。この一夜妻一夜女郎はその起源を琉球のイヂイホウと稱するものと同じく、鹿女試験であつて、所謂初夜帳または「飯の役徳」など、類似の性的神事である。

萬葉集中には其他に松浦佐用媛があり、其間の手兒奈あり、これは東西の兩大國のやうに世間に有名なものであるが、其他に集中から一つ一つ擧げてゐたら恐ろしい數に上るであらう。佐用媛は小夜媛

で初夜夜咲く花の一輪であつたらうが、然しこの佐用媛の他に筑前風土記には那古君の名はあるけれども佐用媛の名は見えない。更に肥前風土記には乙等比賣の名が出てゐても佐用媛の名がない。そこで考へさせられるのは山上憶良の歌「松浦佐用媛の子が賀布振りし、山の名のみや聞きつゝ居らむ」の佐用媛は小夜媛で、而かもこれは實笑婦の一面に冠せた名であつて那古君も乙等比賣も、この實笑婦の別名佐用媛こと小夜媛の一人であつたと云ふ無釋である。これと同じく高橋の真間の手兒奈もその土地に住んでゐた實笑婦の一人だと見る可きである。

更にこの二人の實笑婦に夫で有名な二人がある。北の佐夫流兒と南の股河采女とである。天平感賣元年五月に當時越中の國司であつた大伴家持の臣史生尾張小咋はこの佐夫流兒と馴れ、小咋は奈良に正妻があるにもかゝはらず「里人の見る目眩し佐夫流兒に、感はす君が言出後振」と笑はれる志に迷ふたので、家持は重婚の罪からぬことを書き送つて置したが、それでも小咋は迷ひから覺めず、少咋の正妻が奈良から越中まで歸せつける程の大膽さを逞起した。そしてこの佐夫流兒に就ては連行婚の家なりとあるから、この名も前と同じく婚の別名だつたことが知られる。

股河采女のことには萬葉集卷に「歌抄の枕ゆくる涙にぞ、浮妻しにける戀の氣まに」とあるが、この歌から推察してもこの女が實笑婦であつたことは知られる。神社に仕へた采女が始めはその勤め

の物ら實感してゐたのが、後に生活の方便として實感の爲めの實感となつたことは既に述べたが、この歌河采女もこの神針采女の純然たる實感と化したものであることは明かである。

これら多くの實感の中にあつて、斷然異彩を放つたのは石川采女である。彼女の上は 〇〇〇〇〇〇より下は僧侶の久米蘭舟までと和歌の塵囂をしてゐて、實にその道の達人であつた。殊に歌々ある彼女の情態の中で大伴田主との一徹は有名である。田主はその時代の風流男の代表的男で雄ゆる女性の戀の標的となつた才人でもあつた。石川采女はこの田主の噂を耳にして遠々と不知火、然ゆる筑紫の果から上つて来た。そしてこの風流男を見事征服して他の女達にアツと云はせやうと色文藝文の數々を送つたが男からは何の返事もない。彼女は遂に一策を案じて國家の老妾に化け、火籠を買ひたいと田主の家へ行つてその室に入り彼の傍に關んで挑撥誘惑したが、田主は黙つて火籠を與へて彼女を歸した。そこで一生一代の不覺をとつた彼女は

みやびをと われわきけるを やどかさす われをかへせり おぞのこやびを

と歌を送つて歌味を述べた。すると田主は早速に返歌を

みやびをに われはありけり やどかさす かへせりわれぞ みやびをにはある

と書いて送つた。

新の如くに當時の實感達は源朝の相きを持つてゐるばかりではなかつた。自ら押し離けて春を賣るのが普通であり、社會も亦それを怪しまず政府の大官連や官廷の人達もこれらの遊行雜述と歌を感服してゐた。

以上数人の遊行雜述の物語りだけに見ても奈良朝時代の性慾の解放が如何に自由で、同時に夫婦關係に於ても上代に劣らぬ程のものであつた事が推察される。同時にこれも亦我國時代から傳承した男色に於ても、やはりこの時代に流行した。奈良朝時代の文化は佛教文化であり、その佛教は純然たる官廷佛教であつて、一般の民衆との交渉は薄かつた。然し國家權力の擴張と貴族間の信仰とはこの佛教の勢力を増進し、消天の勢ひを以て國內に普及し神龜元年には僧尼合計して一千百二十二人を算した。そして女性を禁ぜられた僧侶、男性を禁ぜられた尼僧は遂に「皮つるみ」の風習を生じた。同性愛は彼等の社會に於て公然と行はれ、世人も亦これを見聞しても敢て怪しむ者もなくなつた。これは我國の遣唐使に依りて彼地の文物が輸入され我國に於ては唐の文化を模し、更に吳國との通商は我國の當時の新智識を誇る者の間に、この男色の風を傳へた。爲めに僧俗共にこの男色を以て新智識を誇り、源重敏兒を受けて性の慾望を満たすの風が一世を風靡した。我國に於ける最初の史實は上古の卷に述べた通り小竹歌と天野歌との記述であるが、この事に關しても萬葉集中の大伴家持の歌に、

原久須磨を愛した歌が發つてゐる。これに關しては北村季吟の「岩つゝじ」には高家集、勳德廿一代集から男色の歌を抽出してこれに研究を加へてゐる。

新く佛敎と男色との關係が密接であつたやうに戰爭と賣淫と賭博との關係も亦、密接不離な關係に置かれてゐる。この三角關係を説明して、次に平安時代に移らう。

奈良朝時代の文化が佛敎を中心としての文化で、當時佛敎僧堂の土木工事が盛んに行はれ、これに従事する職人が如何に多かつたかは推察するに餘りがある。そしてこれらの職人の間に外來の輸入文化と共に相來した双六が興まり、しかもその流行が上下を擧げて滔々として風を爲すといふ有様であつたから、遂に國法を以て之れを禁じたが双六を弄ぶ風は止まなかつた。天平勝寶六年十月の官典に依つて六位以下は男女を論ぜず決杖百に處し五位は無任四位以上は封戸を停めると令し、その反對に二十人以上を密告するものは無位ならば位階を叙し、有位ならば筋布を賜はり、賭くる所の私財は悉く没收することになつても、少しもこの弊風は改まらず、賭博に勝てば有頂天となつて、また負ければ自暴自棄となつて共に瀧と女に走つた。

光顯ある文化の變遷の裏面には必ず風俗の變遷が伴ふ。殊に奈良朝時代は國初大和朝廷の政權確立の爲めに長い開闢の後を承けて、愈に外來文明と接觸した爲めに貞操の觀念の薄薄と相傳つて滔々と女

の天國をこの地上に現出した。それは鎌倉時代や天保の時代には未だ及ばないとしても、高家集に載された和歌がこの性の自由思想の如何に公然と社會から認められ、且つ讃歌されてゐたかを如實に示してゐる。水鏡卷下には天平寶字八年高家押部が誅伐せられた時に、官兵一千人が押部の娘を捕へて犯した事を記載してゐる。これは押部の家滅びてその娘が遂に賣笑婦となり多くの男に弄ばれた事を新く記したのであらう。然しこんな事件は他にも數多くあつたに違ひなく、戰爭と賣淫の發達關係も賭博と賣淫關係と同じく密接な關係があり、また當時の農民達がその妻や娘達を娼婦に賣つたことも賣淫發達の原因を爲してゐる。これに就て少しばかり説明を加へたい。

當時の債權關係の法律では人間を低當として金錢を借入れることを許してゐた。爲めに貧困な農民はその妻子を低當として金を借りたが、その返済期限が來ても借りた金の返せない場合にはその債權者は低當物權である人間を自家に拉置して償かせた。若しそれが女であつた場合には、この女奴隷として多くの男の枕席に座せしめないうまでも、買主はこれを自己の寵愛物として引取つたに相違ない。然しこれが總ては農家の子女と賣笑婦との關係の結ばれる基となつた。と云ふのは少し後世になると顯著なる官吏達がその領内の農家の娘を勝手に拉置して自己の枕席に座せしめるやうな行爲をした爲めに、この暴行爲に忍び得なかつた農民達が自分の妻や娘を恥しめられるよりは寧ろ進んで賣笑婦

にして、官吏の鼻を明かしてやらうとの憤慨的な所存から、妻子を娼妓にした例が思ひきだされる。山上信良の歌に「羽衣とる星長が妻は國邊まで、来立ち呼びひぬ、かくばかり御まきものか、世の中」の語」とある。

平安朝 性 態 史

大官人を寵愛した「浮れ女」

男色に目を暮らした〇〇生書

奈良朝時代は「遊行婦」の時代であつたことは前章に述べた通りである。巫婦は到處に住んでその存在を社会的に公然と認められた。大納言大伴家持とこれら遊行婦との關係たる交情は日本文學史の上に如歌に於つて後世にまで傳へられてゐる。奈良朝に次ぐ平安朝の時代は藤原氏專横時代で所謂「門閥政治の全盛」であつた。後宮には數多くの美女を蓄へ、後宮の女房達は後世の歌伎舞妓と云ふべき肉慾の樂園時代であつた。

〇〇〇が自己の愛する女の許に通ふのを憤り、〇を要請して却つて流罪にされた内大臣伊周兄弟が

あるかと思ふと、新道の晩に女房達の部屋を覗きこつて「動もなきこえぬ星もがな、二人寝る夜の隠れ家にせむ」など、物氣て見せる菅原大臣や、女房達の姿態に見惚れて思はず涙を流したと傳へられる藤原行成あり、兄弟姉妹の間の情痴沙汰に世上を賑はす殿上人、御母子相愛の公達、僧侶と情を通ずる才媛、朱雀大路に婦人を擁する痴漢を出すなどあり、更らに宰相時平は伯父の妻を奪ひ、將軍義家は法師の婦を犯すなどあつて上の好む所、下またこれに習つて正にこれに日本性態史の神髓を體時代、文字通りの附生夢死の時代であつた。

斯の如き御那草葉主義、戀愛至上主義が一世を風靡した時代に生きるには、男女共に「物の憐れを知り」また「誘ふ水あらば」何處の岸にでも花咲くのを以て理想とし、男女のたしなみとした。世は總べて娼妓型を歓迎しそれを道徳とするに至つたのである。その時代の才媛和泉式部は初め和泉守道真に嫁し、後に十歳も年の若い〇〇〇〇に愛され、更らに〇〇〇〇とも契り、轉じて道命阿闍梨や藤原保昌とも通ずるなど、究くの娼妓であつた。男の方にこれを求むれば在原業平があつて、彼は有名な女と契りを結んだだけでも十二名であるが、到處に遊んだ戀愛の形見は掃き棄てる程にあると云ふ草葉主義の體節であつた。だから「合せ物は隠れ物」の思想は人心に喰ひ入つて離婚再婚は香茶一杯の御決定よりも手軽行く行はれ、貞操を守るを以て却つて「物にこだはる」とし後指さして笑ふ

程であつた。然るに就する所に依ると、〇〇〇の女舞〇〇〇〇〇〇が〇〇〇〇に標準額定に思ひ違つてゐたが、父の右大臣顯光これを知つて大に怒り尤子の髪を切り落し尼とした。然しその後も二人の者は密會するのを止めないので、遂には顯光も二人の意に任せた。とあるが斯る事件も當時に於ては日常茶飯事として世間は怪しまなかつた。そればかりか却つて二人の物にこだはらぬこと、顯光の氣の利いた計らひを嘆して賞めないまでも、決して惡様に云ふやうなことはなかつた。

斯くの如くに女は男から情を寄せられた時には假令好まぬ男であつても、その心を汲んで感懐するを女の嗜みとし、男もまた嫁ひな女に遇つても程よくしてやるのを男の體儀とした。だから在原の兼平は高橋の假盛にさへも愛を吝まらず、武藏守の知は氣に入らぬ平仲をさへも容れるに至つた。これが總べてその時代の道徳であつた。斯くして藤原氏の時代は肉慾の天國であつたが爲めに、市賣賣は窮乏して〇〇采女は妻よに類なく自然と廢止されたが、神社の采女は未だ存在してゐた。然しこれとも次第に名稱だけのものになり、實際には圓司、圓造の妻や娘となつた。そしてこの圓司、圓造が如何に女性の上に學識を發揮つたか即ち神祕と圓權とを以つて漁色をほしいまゝにしたかは、次の傳馬樂に依つても明かに知られる。

押し橋は、十まり七つ、ありしかど。武生の様、朝にとり、夕まりとり。取りしかば、押し橋

もなしや、さきんだちや。

とあるが之れを見ても藤原武生の圓司が土地の女子態に對して淫蕩漁色の體態を凝めたかが察知せられる。

延暦十七年十月十一日に官符を發して、百姓の女子を娶ふことを禁じた。然してこれらの漁色家の人身御供となつた神采女が晩年になつてから圓造から追ひ出された後の行末は、實笑より他に行く道はないのである。即ち巫相として夫々にと男の性慾の對象ともなり道具ともなつて、幸ふじて生命をつないだのである。當時如何にこの巫相を世人が輕蔑したかは、彼の巫部性を名乗つてゐた諸人から改姓を願ひ出で、許されたとある記録に見ても、嘗ては〇〇に出入りして神事を司つた巫女が何時しか時代の勢ひに押されて實笑婦と化し、その價値が大に下落したことを斷つてゐる。

しかもこの巫相は更らに「歩るき巫女」なる實笑婦を生んだ。葉隠秘抄に載する所に依つて見ると

住吉四所のお前には

籠よき女體ぞおはします

男は誰ぞと尋ねれば

長少時なるすき男

とあつてこれは神楽女の賣淫行爲を明つたものであるが、更らに次の

吾が子は十餘になりぬらん

神巫してこそ歩りくなれ

田子の浦に汐騒むと

如何に海士人集ふらん

問ひみ問はずみ問敵らん

いとをしや。

とある、これなどは神社を離れ生活の道を失つた神楽女や巫女が彼地此地と漂泊して情を賣りつゝ、野山に里に三々伍々と連立つて渡り歩く光景を移したものである。

然し斯く神社の巫女が賣笑婦と化し、神に對する信仰も失われたが他面には佛教特に天台や真言に對する信仰が隆んとなり、即身成佛の思想菩薩に對する信仰、菩薩行の實現が盛んになつた。この即身成佛の思想と性に關する民間の思想とが合一して、その餘波は邪教立川流を産み、これが女子共有の傳統と合流して賣笑婦の生活を合理化し賣淫行爲と菩薩行とを結合して終つたのである。そして總べての賣淫は宗教的色彩に彩られ遊女は觀音菩薩の化身として衆生濟度の爲めに出現したとの傳説を

諸方に生むに至つた。そして遊女が觀音として祭られるやうな事にまでなつたのである。

當時の文書を搜ぐつて、如何ばかり性慾生活を宗教化し淪落の生活にあつて一生淫靡み上がることの出来なかつた女性が、この菩薩即遊女の儚ない慰めに生きやうとしたか、また女性を弄ぶ男子が自己の買淫行爲を宗教を利用して正義化そうとしたかを見よう。

拾遺往生傳卷下に、陸奥に一人の容色すぐれて美しい女がゐて定まれる夫もなく、衆人と接し來る者は迫はず去る者は拒まず、自由に求められるまゝに衆人にも己が身を許してゐた。親しくする男が來て彼女に其の理由を訊ねたところ、自分は人の情けこれ菩薩、愛慾これ流轉の業と聞いてゐる。依つて來る男を拒まず求められて斥けず、指を弾き眼を合せて不淨を觀ると答へた。これを傳へ聞いて衆人來らずなつたと載せてある。また日本靈異記にも信濃の優婆塞が和泉の鹿野の山寺に在つた吉祥天女の像を拜して、その天女と交歡したとの傳説、更らに播州書寫山の僧性空が靈夢に依つて神崎の遊女を訪ね、そこで生身の觀音菩薩を見たとの物語など、當時の性生活と宗教との關係が那邊にあつたかを窺ひ知り得られるのである。

僧性空は信心の堅固な僧で豫てから生身の菩薩を拜みたいと日頃念じてゐると、或夜の夢に生身の賣淫菩薩を見奉らんとならば、神崎の遊女長者に會へとの夢を得て覺めた。性空は賣淫を思ひに打

たれつゝも兎も角も神崎の遊女の許へ行くと、長者は遊女舞舞の途中である。長者は舞臺にゐて鼓を打ち唄をうたふ。その唄に曰はく

周防むろつみの中なるみたら井に。

風は吹かねどもさよら波たつ。

性空法師を正して坐りじつと長者を眺めてゐると忽ちとして普賢菩薩の姿に變り六牙の白象に乗り、肩取からは光りを放ち道俗貴賤の男女を照らす。そして微妙な聲音で唄ふには

實相無漏の大海に

五塵六慾の風は吹かねども

隨縁風如の浪たゝぬ時なし。

性空法師にむせてよく見なほすと何時しか普賢菩薩の姿は消えてもとの遊女長者の姿であつた。再び眼を睨れば菩薩の姿と現じ眼を閉れば遊女の姿となる。性空法師が驚嘆し感涙に濡れて肩取につく。長者役は後から追ひ來つて性空に「この事決して口外すべからず」と云ひ終りて死んだ。性空法師は感しんで歸路につき衆生、ひとしく長者の死を惜しみ悲しんだが遂に悟もこの長者を佛菩薩の化身とは知らずに過ぎた。これが奥山山の僧性空に關する遊女長者の傳説である。

同時に藤原の關門政治は文藝藝術の風を助長し、「百敷の大官人は眼あれや腰かさして今日も暮しつ」と云ふやうな生活を、上は王侯より下は關臣、國守、舍人に至るまで競ふやうになつた。そして遊女は堂々と宮廷に召されて帝の前で歌など詠んで興を添へた。遊女と云つても非常に階級的な差があつたことが窺はれると同時に、その當時の性道徳も亦如何に自由な放縱なものであつたかも知り得られるのである。様々の文献が残つてゐる中で一つ二つ引用して當時の風俗を見るときやう。

藤原の道長と云へば攝政、關白の位に居り、例の「我が世をば望月と思ふ」云々の歌を詠じて自己一門の榮華を誇り人をも人も思はぬ人物であつた。その道長が奈良七大寺巡りをして元興寺に到り寺寶と稱する「撫毛」の長さ六尺餘のものを見せられて些か恐ろしくなつたその歸路に鹿に會ひ道長も世間の手前があつて苦盡演じたやうな顔であつたとは當時の木にもあり、前に述べた僧性空と宮木との話——遊女宮木が性空を頼んで女人濟度を持ち込んだ話——其他様々の遊女對關白の情話を残してゐる。誠にこの時代は遊女が隆盛した時代で、關の小高が云つてゐるやうに「かうした勤めに様々あれど、君傾城といふものは此類での王様、それから段々あるうちに、おじやれの身には何がある、朝の夜るから見世さらし」とあつて、遊女の階級は様々に別れてその存在も單に京師などのやうな文化の中心ばかりでなく、諸國の藩々にもこの遊女がゐたことは僧性空（法然上人）と宣の遊

女との物語りが今に至つても傳承されてゐる通りに、如何ばかり多くの遊女がこの時代に日本に存在したかを證する一例である。そして平安朝時代に完成されなかつた女人演皮は次の鎌倉時代に持ち越された。

また山城、攝津、河内の三國を貫流してゐる木津、淀の兩沿岸及神崎地方に妓楼が設けられ其處に様々な遊女が出渡した。或者は父母の爲めに嫁ぎ或者は夫の爲めに嫁ぐ。そしてその生活状態の上から後世を顧ぶるの念深くなるのは當然で、勢ひこれらの遊女と僧侶との間のロマンスも生れて來た。これらの遊女の様々なものに就て大別して見ると、名妓として名を現はれた遊女は生計に窮してこの生活に落ちたのではなくして、責任淫蕩にして家に在つて婦道を守ることが出來ず、進んで滄落の巷に來たもの、または兵亂に際して父母を失つてこの境地に落ちたもの、戰敗者の子女として住む所なく相好となつたものが多い。それらとは全く理由を異にして家庭の窮乏を救ふもの、寒手に誘拐されて職業を替ませられる者に至つては、關の小島の云つたやうに「朝の夜るから店さらし」の哀れ御ない状態であつた。

それにしても時代の運轉が娼妓の社會的地位を高め、それらの女は官廷の中にも出入して寵愛を受けてゐたのであるから、當時の娼妓のレベルが窺ひ知り得られるが、然し斯る風を助長せしめた

原因は我國上古以來の傳統もあるが、外來文化の輸入刺戟も亦大に預かつて力あると考へなければならぬ。王侯宰相が遊女を愛するの風は支那の風俗であつて所謂風流韻事として尙はれたものである。この遊女を愛する風は隋唐の風俗文化の輸入と共に、滔々として奈良朝平安朝の時代に我國に傳つた。そして勅選歌集の中に名を留める者、物語に名を現はる者など出で來つて、一代の遊蕩見をして傾殺せしめる女があるかと思ふと、その反對に米一升布一片で愛を賣る女もあつて世は正に女人天國を現出した。

地方に至つては更に甚しく、京師にあつて細口に窮した賣笑婦は數々と地方落ちを行つた。それは何故であつたかと云ふに、當時京師の官吏の多くは中央財政の窮乏の結果から生活に窮してゐたが、地方は却つて開け始め新興の機運みなぎり地方官吏は多く富豪となつた。その例としては奥州の藤原秀衡の金色堂の建設があつて、京師の雲上人を驚かせたとか、藤原利仁が五位の官人が腹一杯に芋粥を喰へ飽きてみたいと云つたので、越前の國司を勤めてゐる舅の許へ連れて行つてその富有振りに驚かしたとかの話が後世に傳はつてゐる。更らに當時の才媛清少納言と藤原則光の仲にしても、紫式部や小野小町の例に見てもその類の相手が皆地方在任の國司であつた。これら當時の名流才媛にして官の爲めに相手を賣んだのであるから、賣笑婦が京師の貧窮官吏を見限つて、地方の富豪官更へ目を

つけたのも當然で、その爲めに益々地方在住の娼婦の数を増した。

これらの娼婦の群のなかで注目すべきは、歸化民族から出た賣笑婦である。國民族の我國に渡來したのは遠く神代からで、大國主命はそれであると云はれ、神代史にある天日矛の近江國へ來たのは大國主命と同時代であり、この天日矛は新羅王の王子であると云はれてゐる。樂の始皇帝の子孫と云はれる弓月王の渡來は應神帝の時代である。彼地亂の結果は續々として多數の歸化民を出し、また當時の我國の事情はこの歸化民を受け入れて、文物の發展進歩を制らなければならぬのであつた。これらの歸化民族のうちで最も勢力を有してゐたのは弓月王の系統の樂氏一族で、樂氏は古くから山城國葛野地方に居住し、遠く九州から奥州までもその一族は行互つてゐた。松尾神の寵を受けた玉依姫、〇〇〇に寵愛せられた敏達、敏仁、武香の三妃、〇〇〇に愛せられた貴命、應命の二女御、〇〇〇の永原妃など悉くこの歸化民族から出て、後宮に入つた女性である。財力に於てもこれら歸化民族は理財の術に長じ、樂氏は朝廷の財政を司る位にまで上つた。この關係が歸化民族の女性を後宮に入れる可く餘儀なくした原因でもある。

然しこれらは〇〇に入つて寵を假にし、門閥政治の力を爲した女であるが、茲にもやはりこれらとは反對に賣笑婦となり落ちた歸化女も相當にあつた。當時の文獻はそれを物語つてゐる。

そして其の當時の遊女は後世のそれとは相違して顧客の招待を待たずに、自分から押し掛けて行つたが爲めに却つて反感を買ひ、一口に乞食盜賊遊女と同視されるやうなこともあつたが、他面にはそんなに考へながらもそれを強ても斥けやうとはせずにおた「目出度う榮えさせ給ふ平家の太政入道殿へ召されぬ事こそ本意なけれ、遊び女の習ひ、何か苦しかる可き推参して見ん」——これは後世の平家物語の記者が歌妓佛が西八條の清盛邸へ押し掛けた時の敘述であるが、斯る風習作法はこの平安朝の初めに既に存在してゐたのである。

これらの娼婦の存在とは別にまた傀儡女、勸進比丘尼が當時の社會に存在してゐて、これが男性性慾の對象となつてゐたことを明かにしなければならぬ。この傀儡女の性質は何であつたか。先づ(一)には一定の住所を持たず諸方を漂泊してゐる群であつた。(二)には山林に茅屋を構へ水邊に竹戸を築んで客を待つ種類の女であつた。(三)には旅舎驛亭に招かれて客の要求に應じて賣淫する女であつた。(四)そして表面だけは舞を舞ひ歌を唄つた。(五)その生活は多く慘憺たる者であつた。これらから推察して傀儡女の種類のどんなものであつたかは、大抵は知り得られる。そしてこんな賣笑婦の中にも階級が存してゐて、上は貴神の間に召されて愛される者もあつて、これを表面だけを見れば歌妓として聘され歌だけで済んだやうであるが、實際は恐らく賣春行爲まで進んでゐたに違ひない。

ここで歌謡の歌ひ手としての結婚に就て述べなければならぬが、我々上代から奈良朝の時代まで、
重に守られて来た信仰の中で「御前」を唱へる巫女の務めがあつた。これは年の始め、田植、刈り上
げ、其他祭典の場合に神前にあつて神意を啓示する務めである。これが平安朝の時代になつて信仰が
衰へて来ると、この「御前」を神楽としてのみ扱ふ者が生じた。これが「祝言人」と稱せられる職系
人であつて、彼等は年頭の祝ひ、家屋新築の祝ひ旅行災厄のまじなひ等を神に祈るのであるが、この
祝言人の中に巫相が混じて地方を漂泊し歩いた。そして職業の必要上から祝言人となつた。巫相は鼓
を携へ歩いたが、この巫相の鼓が何時しか巫女の手にも傳はり巫女も巫相と同様に鼓を打ち歌を唱ふ
やうになつた。

當時の巫女の有様を知る爲めに更科日記から引用して見やう。

足柄山といふは四五日かねて恐ろしげに暗がりわたり、鼓に宿りたるに月もなく暗き闇の夜に
ふやうなるに、巫女三人何處よりともなく出で来たり、五十ばかりなる一人、廿ばかりなる十四
五なるとあり。庭の前に傘をささせて居立たり。男ども火を燈して見れば、昔こはだと云ひけむ
が孫といふ。髪いと長く細よりかかりて、色白く顔げなくて、さてもありぬべき下仕などにも
ありぬべしなど、人々あはれがるに、腰すべて似るものなく、空に澄みのほりて目出たく歌をう

たふ。人々いみじう哀れがりて、けちかくて人々もて興するに、「四國の巫女は、えかからじ」な
ど云ふを聞きて「難波わたりにくらぶれば」と目出たく歌ひたり。

この更科日記に見ても轉るやうに、當時足柄山に巫女の群が住んでゐて、この山を往復する旅客の
情を慰めたものと見られる。そしてこれらの女達は此處に見えるやうに、單に歌舞言曲を以て客に
せられただけでなくして、賣淫行爲のあつたことはその生活からして推察し得られる。足柄山の山姥
の傳説は「山うば」でなくして「山おば」であり、「おば」は即ち巫女の古語であることも、「濱おば」
即ち海邊の娼婦の名稱であつて現在でも地方には「おば」なる言葉が娼婦の名稱として使はれてゐる
所がある。これらに徴しても山姥は即ち足柄山に住んだ巫女の一團であつたことが知られる。今日ま
でも到處に残つてゐる山姥傳説はこの山林に住んだ巫女生活の言ひ傳へである。

この巫女の群に落ちて賣淫行爲に依つて巫女が巫女とは別に發展したものが熊野比丘尼である。即
ち紀州熊野の熊野比丘尼と云はれるもので、熊野神社は當時信仰の中心であつて、上下の階級を問は
ずその参詣者は夥しい數に上り、所謂「熊野詣」は當時の人心を支配した。この熊野より参詣に集
する人達の要求に応じて娼婦がこの地に集つたことも當然で、その影響するところ神に仕へる巫女を
佛に仕へる巫女と變じ、更に轉じて旅客に仕へる巫女たらしめた。即ち彼等は比丘尼となつて熊野

神社に奉仕することを表面として、その裏面には常に財を賣り肉を賣るを以て職業とするやうになつた。そしてこの熊野の比丘尼は初めは熊野の山に住んで地獄極楽の繪圖を参詣人に賣り歩いて賣笑をしてゐたが、次第にその範圍を擴めて終には全國的に波及し、後世江戸時代までもこの繪圖比丘尼は存在を續けたのであつた。

武士階級と賣笑婦との關係に於ては武家政治の確立時代である次の鎌倉時代に詳しく觸つて、此處では農民と賣笑の關係並に官廷官人の男色の歴史を記述して置かう。

この時代（平安朝）の政治は藤原一門の閥門政治の弊を受け、京師の官吏は貧困に陥り、地方官吏は苛酷請求を以て農民を苦しめ、その富みたる財を以て漁色を縱にした。その結果農村の子女は多く娼婦に賣られて、地方豪族の弄ぶところとなつた。當時の地方官吏の氣質を代表するものとして藤原陳忠（信濃守）の逸話を茲に擧げると、彼は信濃國より上洛の途中に於て或る山路で馬蹄共に谷底へ轉がり落ちたが、幸ひにもその途中で樹の枝に支へられて、一命だけは助かつたので、家來共は驚ろいて籠を下ろすと暫らくして引上げよと聲がする。そこで家來共が籠を引上げて見ると籠の中には穿が一杯に入つてゐる。家來が再び籠を下ろすと今度は主人の陳忠が上つて來たので、家來共は「この大事に關して穿でもあるまいに」と云つたところ、彼は叱りつけて云ふには「つまらぬ事を云ふも

のかな、汝達は賣の山に入つて手を空しくして歸へるであらうが、國守は到處に土をも掘む」と答へて呆然とさせた話を讀してゐる。この到處に土さへも掘んで來る貪婪横りこそ當時の地方官吏の氣質であり、苛酷請求して財を蓄へ漁色して地方の子女を泣かしめて、その父兄をして怨嗟の聲を發せしめた原因である。

斯の如くして平安朝時代は「遊女」の時代であつた。そしてその「遊女」にも種々の品目を生じて「浮かれ妻」なる名が生じた。これは奈良朝の「一夜妻」と平安朝の「浮かれ女」とを一語にした名で、續千載集中に

一夜あふ往き來の人の浮かれ妻、幾度かはる契なるらん。

また鮫れ女は即ちじやれ女（奈良朝時代の）からの轉語で、六百番歌合に

浪の上にこがれて過ぐるたはれ女も、頼む人には頼まれぬかは。

「河竹の流れの身」といふ語も古くこの時代からあつたと思はれる、金葉集には

一夜といつか契りし河竹の、ながれてとこそ思ひそめしか。

「遊女」「遊の子」といふ文字も我國で造られた語である。「川竹の身」とか「流れの身」とか云ふのと同様、これらの遊女が多く水邊に住んでその生活をしてゐた所から、こんな語が出たものと斷定し

○○○○○○○○○○人なり。それに咒師小院といふ重を愛せられけり。この重あまりに寵愛してよしなし。法師になりて夜重はなれずつきてあれとありけるを、重いかが候べからん、いま書しかくて候はばやといふけるを、僧正なをいとおしさに、ただなれとありければ、重しよしよ法師になりけり。

新の如くに男色の風は紫衣の僧正高徳より下は納所坊主の末に至るまで行はれ、社會もこれを怪しまなかつたばかりでなく、總ての権門勢家に行渉り果ては○○○○○○○○り、歌麿の香高きところまでも、頑直を愛し紋兒を寵して憚らなかつた。

古今著聞集卷十五、竊執の條

○○○○の御時、御寵兒二郎丸に貴徳納利等の秘事、授くべきよし○○ありけるに、時責再三辭し申て致へず、かやうの重は當時こそ候て、成人の後は我が業にあらは是を秘すべからず、世のため道のため後進の基ひに候とて遂に授けず、これによりて○○心よからず成にけり。其後八幡神宮頼清が寵重小院、石壽に各に舞を舞はせけり。

新の如くに男色は○○にまでも弄ばれ、殊に左大臣藤原の頼愛はその日記に自分の業道のことを書き記してある。降つて武家の間にもこの風は流行し美談を以て武將に仕へる者を數多く出した。そし

てこれは一般民衆の間にも喜ばれた實證を擧ぐると、神樂歌に

大宮のちいさ小舎人や、手々にや、手々にや、玉ならば、手々にや。

玉ならば重は手にとり、夜るはさ寝てむ、手にやは、夜るさ寝てむ、手にや。

とあるがこれは男色を叙述したもので更に、

總角や、たうく、ひろばかりや、たうく、放りて寝たれども、轉びあひにけり、たうく、

通ひあひにけり、たうく。

とあるは同じく男色の事實を語るもので、總角は若衆であり少年であつて、轉びあひにけりは即ち○○○○の事實を叙述したと見る可きであらう。「口紅の君」は女子相愛のことであつて、後世に至つて俗にこれを○○○・○○○と呼んでゐるのはこれである。歐洲にもこの例はあり、カマストラ（印度の經本）にもこの半男女のことを記して夙より女子相愛の事實を殘してゐる。我國の平安朝時代の「口紅の君」は即ち、この半男女のことである。

平安朝の時代は新しくして文物煥然として、朱雀大路には百官威儀を正して參朝し、佛敎の興隆その極に達して多くの名僧高僧を輩出したが、同時に色慾の世界に於ては百鬼夜行どころか百鬼夜行の光景を現じ、「浮かれ女」皮つるみ「口紅の君」など醜態し横行して、弊風も亦その極に達したので

なつて見せるといふのであつた。そこで其時の勝負は奥方の負けとなつて、夫の前で裸體にならなければならぬ事になつたが、如何に夫の前でも裸體になることは苦痛であつた。それかと云つて附けは附けだから今更ら引込みがつかなくなつて、奥方も遂方に暮れて居られると、奥方、日頃奥方の御侍して居られる地蔵様が双六の上に現れて、短ち女體となつて奥方の身代りをしたといふ傳説である。この二つの話は勿論事實のものではないが、然しこんな傳説を生んでその傳説が世上に流布されて肥後となつて後世に傳つたところに、當時の社會道徳が窺はれると思ふのである。

史上に有名な源義朝の妻常野の例なども、彼女を貞婦の體のやうにしてゐるが、彼女は義朝の死後敵の清盛の子を産み、後清盛に棄てられてからは大藏卿、藤原長成の妾となつて子を産み、轉々と男から男へと身を許したが、それを貞婦のやうに云ひ立てるのは決して正しい評價ではない。斯る時代相であつたから実笑傳の榮えたことは、平安朝時代に比して一層の發達を遂げた。そこに女人濟度の宗教が生れ、情死が流行するやうになつた。

女人濟度の宗教は平安朝時代の女人體の天台、眞言の傳説の反動として生れて來たものである。淨土、眞宗、法華などに於ては眞實深かき女人も一面に信心堅固にさへすれば、救はれて後世は安樂世界に入ることが出来ると思はれた。この傳説は短ち力強い勇を以て世上に流布し、遂に淨土宗の立者

時代にはこの女人濟度の傳説に動かされて、官廷の女が二名までも官廷をぬけ出でたといふので、それが原因となつて源空(法然上人)は土佐に流罪となつた。がその流罪の途中に於てさへも勉めかしい話を述べてゐるのである。それは眞の空の遊女に關する物語で、法然上人傳の中にも載せてある。今それを引用しやう。

勅 修法然上人傳第三十四

播磨國室の泊りに着き給ふに、小舟一艘ちかづきたる。これ遊女が舟なりけり。遊女申さく「上人の御船の由うけたまはりて推參し侍るなり、世を渡る道まぢまぢなり、如何なる罪ありてか、かゝる身となり侍らん。この罪業重き身、いかにしてか後の世助かり候ふべき」と申しければ上人あはれみの給はく「けに左様にて世を渡り給ふらん罪障まことに輕からざれば、報謝また測りがたし、もしかからずして世を渡り給ひぬべき罪もあらば、速かにその業を棄て給ふべし。もし餘の罪もなく又身命をかへりみざる程の道心いまだ起り給はずば、もはら余佛すべし。彌陀如來は左様なる罪人のためにこそ弘誓をたて給へる事にて侍れ。たゞ深く本願をたのみて念佛せば、往生候ひあるまじきよしを願に教へ給へば、遊女隨喜の涙を流しけり。

この如くに平安朝時代の反動として傳説は女性と發願を持ち始め、眞實になつては遂に肉食妻帯の

民衆的宗教となつた。この女人濟度の極端な一例は櫻町中納言が自己の妻を花山院左大臣に献上した
ことであるが、中納言と左大臣との仲は非常に親密の仲であつたが、この左大臣が自己の妻に耽溺し
てゐるのを知つた中納言は、自己の妻を左大臣に譲らんとして、「人の縁を果さなければ聚念無量劫の
罪を受くと佛説にある。今その罪を連れさせる爲めに計よのである」と説いて無理無理に妻を親友に
許したのであるが、當時いかに女人罪障消滅のための手段としてこの女人濟度の佛説が社會人心に
深く喰ひ込んでゐたかが知り得られる。この女人中心の宗教——特に淨土宗から分れて立川流が生れ
た。この立川流とは何であるか。これの説く往生とは男女交會のことである。この男女交會すること
が即ち即身成佛と説いたから、忽ちこの宗教は當時の無識しきつた風俗に迎合し、殊に賣笑婦の生活
を宗教的に合理化し、賣笑行爲を以て直ちに善行としたのである。

鎌倉時代の結婚の中に既婚階級が多く混じてゐたことに注目しなければならぬ。その原因をさぐる
に、多くは當時の社會がこれらの既婚階級の女子を社會の外に押し退けて、普通人としての交際を拒
んだ所から来た生活態度と、それと同時に押し退けられれば取しめられる程、普通人の仲間入り
したさの人情から自ら好んで結婚の群に入つたのと、二筋の道があるやうに思はれる。如何に多くこ
の既婚階級の子女が、結婚に落ちてゐたかは次のやうな項に使つても知り得られるのである。即ち「越

後ゾボでもチヨウリン坊でも金でまよめて一夜妻」と唄はれた。越後ゾボと云ひ、チヨウリン坊と云
ひ悉くこれら既婚を意味するものであるが、この結婚の群に落ちた既婚子女の数は後世になるに従
ひ夥しき數になつたらしく思はれる。この鎌倉時代に既に多くの結婚を既婚階級の子女から出して
ゐた事に就ては、當時の文獻にも見えてゐるのである。

だが然しこの時代の特徴は何と云つても「白拍子の」出現である。白拍子の發生に就ては源平盛衰
記の説明するところでは、これを「男舞」と稱して最初は直垂に立烏帽子妻で腰刀を挿して舞つたが
後には水子に袴だけで舞つた。これを白拍子と名づけたとある。そしてこれは當時の歌妓であると共
に娼妓でもあつて、それが何故に娼妓臭い歌舞音曲を以てしたかと云ふと、この白拍子の舞がそもそ
も延年舞と共に寺院から生れたものである爲めに、後に寺院から離れても娼妓に執着を帯つてゐたの
と、當時の世間の者の趣味が娼妓にあつたのと、二者相待つて白拍子をして娼妓臭くしたのである。

白拍子はどんな生活を送つてゐたかに就ては、様々な文獻に依つて見ても知れるが——即ち續古事
談、平家物語、義経記、古今著聞集、北條九代記など——それらの記事を綜合して考へると、(一)白
拍子の生活が娼妓としての存在であつたこと、(二)當時の殿上人、武家などの社會上に於ける中流
以上の者が、この白拍子の娼妓であつたこと、(三)主として文化の中心地に在住したこと等である。

これらから類推して白拍子が院に出入りしたことは當然なことで、〇〇〇〇と白拍子と源朝との關係などはこれを語る明確な事實であるが、この如くに白拍子が院に出入し得たのは、古い歌謡の傳承者としてであらうと思はれる。が然し時代の趨勢はこの白拍子を單に歌謡の傳承者としてのみ存在させはしなかつた。當時の記録を調べても、如何に多くの白拍子が宮廷の御官達の子を産んだか、そしてその私生児が高位高官に昇つて堂々と朝野に参じてゐるかを見たならば、この鎌倉の武門政治が表面だけは實業家達に見えて、その裏面には前代の風を承けて性運徳に於て種族の限りを盡してゐたかを知り得られるのである。次に白拍子の院から生れて高位に昇つた連中を列挙して見る。

順徳帝時代

從三位藤原實成(十九才)

父前右大臣公賴、母白拍子

後堀河帝時代

正四位下藤原基氏(廿一才)

父後入道中納言基家、母舞女阿古

後保元帝時代

從三位藤原實成(年不詳)

父正三位有隆、母舞女手屋

從三位藤原實成(十六才)

父故前大臣大臣公賴、母舞女

龜山帝時代

從三位藤原公實(三十五才)

父故從三位行侍實直、母舞女藤

伏見帝時代

正四位下藤原公尹(年不詳)

父故左大臣從一位實成、母白拍子

正四位上藤原實成(四十一才)

父故前中納言正二位實成、母白拍子

これらに見ても知れるやうに當時の白拍子なるものが、單に歌妓だけの存在ではなくして實業婦として宮廷に出入し、月夜宴客に寵愛せられたかが知れる。これは武家に於ても同様で、清盛に於ける女王女や御などの例もあれば義経に於ける藤原が、三位中將重衡と千手の情話もあれば、木曾義仲と千手前や虎の前などの例もあつて、當時の白拍子が宮廷と云はず武家と云はずその勢力を張つて

あることが知られる。

然し如何にこの時代に白拍子が出現してその勢力を要つたにしても、これは中流以上の階級に限られたものであつて、一般庶民の間には白拍子は些か高貴の花の類があつた。そこで伎藝として多くの民衆の需要は、もつと簡易で安直な対象物を要求した。だから昔からの遊女が伎藝としてこれらの人々に要求され、遊女の数は各地に分散して曾ながら繁盛を極めた。即ち伎藝の中心は鎌倉に移つたが依然として京都は経済的中心であつたから、この京都を始めその近くの江口、津、堺、豊後、さては遠く兵庫など少しも變ることなく遊里として榮えたのである。

鎌倉時代に、もしも遊女が出たのには、その原因には當時の政風——源平兩家の政争——の余波を承けた結果であることが想像される。如何に多くの名門の子女が遊女の野に落ちたかは、後述にまでも述べた傳説談話の数々によつても知られる。遊の浦に沈んだ平家一門の遊した女性遊は悉く流落の野に落ちて、官女、侍女を始め平家一族は、平家物語の中に説明されたやうに「女房遊は武士の遊けなきに捕はれて、田圃に歸へり、若も若きも、或は根を替へ、或は形を賣し、有るにも有られぬ有様にて、思ひ難げぬ客の遊、遊のはさまにてぞ明かし難しける」とある如くに悉くが遊女となり相續となつて、遊者の手に弄ばれたまたは生活の遊の餘儀なきに、漁夫や樵夫に身を賣つて壽命を

つないだことと思はれる。これは明治維新の變遷に際しても著るしかつた事で、明治初年の藝妓に如何に武士階級の出身が多かつたかに見ても、この鎌倉時代の名ある遊女が武門の女であつたことの説もうなづける。例へば安藤貞任の娘、藤原信西の女、平家光盛の孫、源七兵衛景清の娘などと數へ来ると際限なく擧げられる。

「相續は多く軍人の家庭から出る」と云ふ語を聞くが、この語の因つて来るところは、やはり前述のやうな事が原因してゐると思ふ。こゝで遊女と云つても當時の遊女の社會的位置を明かにする爲めに次のやうに概括して置かう、(一)白拍子の出現にもかゝはらず、遊女はそれと拮抗して勢力を保持したること、(二)なかには白拍子と同じく貴族の間にも出入する者のあつたこと、(三)遊女の中にはその修養に於ても情操に於ても相當に高い品位を保ち得る者のあつたことなどで、歴史の上でも様々な情話を残してゐて、例へば平家盛の妻藤野、源頼家の愛妓愛海などは悉く遊女であつたし、中興門中納言宗行が嫁された家は瀬川の遊女屋であり、頼朝も橋本の遊女宿に遊び義朝の橋本に於ける遊女は知られて居り、清盛も聚島神社へ参詣の歸路に、宣津の遊女に押し懸けられた事など、當時の文獻に残されてゐる。

斯の如くに遊女が平安朝時代より尙一層の發展を遂げて、白拍子と相抗し得る迄になつて来ると、

秋夜長物語

後醍醐院の御宇に、西山の隱居上人とて遺事傳したりし人、尤は北條東塔の衆徒にて、
の宰相の御前御成と云ふ人なり。遺心堅固ならむことを祈りて、石山寺に籠りける。或夜の夢に
容顏美しき見の、花の雲を袖につゝめる有様を見て後には遺心を忘れ果て、夢のみ身を離れぬ心地
すれば、陸方なみに浮れ歩きけるに、三井寺の遊りにて雨に會ひて遺心院の御房の庭に立寄りけ
れば二八ばかりの兒の水魚紗の水干に薄紅の袖かきかねて、腰の圍りはけやかに腰懸し、深く優美
なるが花を手折りて歌謡してすみたり。花園の大匠の御子梅若丸と申すにぞ坐しける。有りつる
夢の直ちに遣はねば、心も空に其夜は金堂の後に眺め明かし

これや夢ありしや現わかかねて

いづれに迷ふ心なるらむ

かくてこの君と興りを結びけるとぞ。

傳傳にその興を繋げるならば〇〇〇〇は宰相中將信通と興り給ひ、
好かりし等、當時の公卿の間に男色の愛せられた事實を数多く挙げ得られる。

室町時代性慾史

將軍の女房持り執權
の漁色・僧侶の男色

我國歴代の實史を書き來つて意々室町時代に入つた。この室町時代は我國文化史の上に最も注意
すべき時代で、江戸から明治へかけての様々な風俗宗教制度の多くは、この室町時代に發成し後世に
傳へて完成したものである。性慾史の上から見ても前代の余弊を承けて、女子は益々物品化し戰國の
時代に入ると共に貞操觀念は全く地に拂つて消滅し、只管にその娘を提供して地位を得んと焦慮する
の風を生じた。その甚しき例は將軍の「女房持り」と執權の「官廻り」とに現はれてゐる。

將軍の女房持りとは何であるか。その名にも現れてゐるやうに足利將軍が諸々の邸宅に赴いては、
自己の氣に入つた女があるとそれが妻であらうと娘であらうと見境ひなく、御所に召し寄せて自分の
寵愛物とした事實を指して「女房持り」といふのである。これは鎌倉時代から存在したことはあつ
たが、この室町時代に入つて、源氏流び北條流び世は足利となるに及んで、閨門は亂れ朝野の使臣を

して「これ日本子孫相傳の法也」とまで云はしめる程に、將軍は入浴に名を飾りて諸家に出入しその
妻や娘を漁り廻つたのである。

足利尊氏の執權職、高師直とその弟、師泰の亂行は沙汰の限りであつたらしく、太平記の作者の筆
を飾りると

この師直、月無露客の女御などは、世を浮草の寄る方なくて、誘ふ水あらばと打たひぬる折節な
れば、せめてはさも如何せん。申すもやんごとなき宮殿など、その数を知らず、ここかしこに隠
し置き奉りて、毎夜通方多かりしかば執事の宮廻りに、手向を受けぬ神もなしと。京直部なん
どが笑ひぐさなり。新様的事多かる中にも、殊更兵加の程も如何と覚えて憂たてかりしは、二條
前關白殿の御妹、深宮の中にかしづかれ、三千の數にもと思召たりしを、師直盗み出し奉りて、
始めは少し忍びたる様なりしが、後は早打ち願はれたる振舞にて、憚る方もなかりけり。かくて
年月を経しかば、この御願に男子一人出来て、武藏五郎とぞ申しける。

この師直は豊谷高貞の妻を奪はんとして遂に兵を以て高貞を滅し、その妻を奪ひ去つた程の横暴
であつただけに、香源三位頼朝が拜領した高瀬の前のやうな女があるなら、十ヶ國の所領とも交換
しやうと云つた。そしてこの師直の秘書と云へば藤波よいが、實は能文書きの役を勤めたのが兼好法

師である。然しこの足利氏の室町時代は財政は極端に衰微して八代將軍義政の時代に愛妾の出産費用
に窮して、具足を買入れして漸く十兩の金を調達したと云はれてゐる。皇室の式儀はこれまた想像以
上で御堂が兼好に押込んで物品を盗み去るやうな有様で、宮廷の守護は殆んど弛緩して、遂に應仁の
亂には後花園帝は皇居を出られて室町邸に赴かれ、御土御門帝に位を譲られたが、この間兩帝を通じ
て十三年の間は皇居に歸られなかつた。後柏原帝の即位大禮は慶祚の後二十二年にして漸く式典を奉
げられる等のことあり、後奈良帝は御宸筆を以て生活の資を得られ、正親町帝は御大葬をさへ營めな
かつた程の荒廢で、前代までの白拍子遊女の數も從つて嚙口に窮して、漸次に凋落しその反對に下級
の娼婦が急に盛興してその數は次第に増加して來た。即ち立君、辻君、湯女、娼婦、早歌、戲女など
といふ種類の娼婦が現れたのである。

立君、辻君は街に出て客を曳く女で、歌にも「宵の間は探りあまざるゝ立君の、五條わたりの月ひ
とり見る」とかまたは「三つ川うばとやつひになりなまし、地獄が辻に殘る古る君」とか云つてゐる。
湯女は前述の如くに浴場にあつて客に湯を賣つた娼婦であることは明白で、娼婦はこれも立君や辻君と
同じく橋の畔など立つて客の袖を曳いて春を賣つたものである。早歌は娼婦でこれは娼婦の名稱で江
戶時代にも傳つたが、早歌は白拍子の系統でこれは當時の土娼が好んで歌を唄ひ、客の心をひいた所

から来たと見る可く、當時の狂歌に「舞のため夫のための社君を、さてはさうかといふ人もなし」とある。戯れ女即ち戯女であつて、これは鎌倉時代から既に存在してゐたが、これが最も活躍したのは室町時代であつた。

そしてこれらの土娼は都市に集中する傾向を破つて、地方へ分散して行つた。そして地方へ分散して行つた土娼は、地方の大名小名の京師に上るに際しては同伴して来たから、京都の花明御暗の巻は意欲して昔のやうな名妓伎妓は姿をかくし、唯樂える者は下流な醜態のみとなつた。

然し斯る傾向は單に賣笑婦の間のみの問題ではなかつた。長い間打續いた歌謡からして、公卿門閥の娼遊は悉く賣笑化し而かもその貞操が普通の町賣り遊女の値段よりかも安價で賣買されたのである。「歌謡氏草子」に記する所には、ある賣りの男が遊女塗火を見染めて、これを手に入れたいと野太鼓の奈阿彌に賭ると、奈阿彌は即座に「公卿門閥の娼遊ならば如何なる見も及ぶ可かりしが、これは流れを立つる川竹の遊女なれば、大名高家より外へは出でず」と拒絶してゐる。これを見ても公卿門閥の娼遊敗者の子女が娼遊な賣笑の境遇に落ちたかゞ知り得られ、加之、當時興來した假名は舞の中を地獄の光景に變ぜしめ、離々たる轡車の中に餓死した白骨が横はるといふ光景で、こんを中に閉み止まつてゐる男女は共に一齣も二齣もある人間であつた。

新事左大臣のお妻といふ女房は、よくこの娼遊性を帯びた時代の女性を代表してゐる女性である。成り上り者の高土佐守はこのお妻を自分一人の妻と信じきつて通つてゐると、鎌倉に現した古女房が大の嫉妬家で、近く上洛するとの事に、彼は誰どころなくお妻を奥に聚せて勢多橋の畔まで来た。折柄、比良山風が奥の旗を吹き上げたので、内都を覗くと何ぞ隠らん奥の中は何時の間にやら八十餘りの老尼と變つてゐて、さてはお妻にたばかられたかと新事左大臣にとつて返して見ると、目蓋すお妻は形も形もなく女の賣唯一人。それを捉へて賣め問ふと「その女房に通ふ者多かりしかば、何處とても指しては知りたし」と答へた。がお妻は深く奥つた佐々木信胤と既落ちしたのであつた。

この話は當時の性道徳が如何なるものであるかを語るにいゝもので、時代の風潮は當時の女性をして悉く娼遊化したのである。だから當代の文藝と云へばその悉くが遊女に關する文學で、それも古代萬葉集中に現れたやうな遊女と地方國司などの間の情を述べ觀念を叙した文學とは違つて、世相の深刻さを寫して餘りあるものである。故に本願寺中興の英僧と云はれた蓮如上人の「子守唄」の一節を引用して當時の社會の暗黒面を見やう。

地獄が辻から加世が辻を見わたし、室町を通れば賣ろう賣るまゐは、上臈さまの御事か。十七八から二十にあまで、二十四五の上臈、ばうばう間に薄化粧、はさきとつて醜態ぐる、立ちに立ち

てまします。我等がやうなるあつなし、袖もいらぬ袷、せのひばに着ないで、絹の十徳上にそつと着そうて、すぎなりの笠をば深くと着そうて、吹けど吹かねど尺八、腰についさし、上着さまの御そばをよしよしと通つた。その時にお上着袂をじつとどめて、御とまりあれや殿とて、番はしほに飽つた。料足の一文、片割れも持たねど、男の義理なれば、先づ名を問ふた。これなる上着の名をば何と申候。あたらし殿と申候。あたらし殿と聞くより、いまいでと思ふて、そとよて見たれば、御名は新らし御顔は古うありある……(云々以下略)

この連如上人の作にも見る通りに、室町時代になつては國を擧げての窮乏と飢饉の觀來とに依つて白拍子傀儡女は姿を消して悲惨な賣笑婦を生み、これらの士婦に依つて營業する「道の者」なる制度を生んで、各地の驛亭には娼婦が出流して旅客の求めに應じて春を賣つたが、この風は社會上流と云はず下流と云はずに各家庭へも浸入して、下社上の風は當時の常態となり、上代より以來前時代までの肉慾第一主義、政略結婚主義より一轉して舞妓娼婦の横行時代となつた。これを當時の文學に現れたものに見ても、上代の日記、萬葉に現れたもの、または平安朝、鎌倉時代に見るものとは全く異を異にして、隨曲と神史とにこれら士婦の生活が噴はれてゐる。室町時代小説集の名で後世出版された(明治時代)ものなどが簡單な手引となるであらう。

「李姓物語」は支那文學の翻譯であるが、これが當時の民心に迎合して傳つて讀まれたことは、例令それが我室町時代にあつた事實ではないにしろ、新る生活を要求してゐた民心新る思想を是認した民心を知るには好個の材料であり、またこれに似た事件は必ず室町時代に數多くあつたに相違ないのである。

そこで「李姓物語」の筋はと云ふと、當時薩摩の守護の子なる中將安則が京都に滞在中に、白拍子李姓といふのを目撃めて友人國光に相談すると、「白拍子では金玉數にあらずば一夜の契りにも嫁ひ候まじ」と云はれて、鞍轡の織物の數々を李姓に與へて、漸く李姓と打解けるまでになつた。かくて一年餘りを通ふうちに、中將の財貨も悉く盡き果て今では玩服車馬までも替えるやうな窮境になつたのを見て、李姓は「元より白拍子は人を誰かすのが道なれば、中將殿の腹中盡きたる上は中將殿を離れん」と云つて中將を棄てて終ふ。棄てられた中將は身には惡疾出で父からは勘當されて、遂に乞食に迄も墜落して袖乞ひをするうちに、國らずも李姓に行逢ひ、李姓もその姿を見て前非を後悔し、共に夫婦となつて西國へ下り、父安則からは許される、と云ふ話であるが、これはまだ最後の章が芽出度し芽出度しで完結してゐるが、伏見物語「あきみち」になると、最も當時の世道人心の趨向を知り得るよすがともなるので書き記さう。

盛敵八郎といふ男の爲めに父を殺された山口あきみちといふ武士が、父の仇を報ぜんとして盛敵と苦心するが、八郎に近寄る術もない。ところがこの八郎が自分の妻に感慕してゐるのを知つた彼は、自分の妻の貞操を敵の八郎に許して八郎を打たんとするのである。而かもこの山口あきみちの妻は敵八郎のみならず、八郎の男にも身を許してその産を宿すと云ふのであつて、そのデカダン思想は江戸時代の戯作者萬屋南北のデカダン思想と匹敵する。斯る露骨な感慕な思想が敵八郎と共に生れ、女子を物品視する觀念が深く人心に喰ひ入つてゐた、と同時にこの時代を支障したものは既に黄金萬兩の思想であつて、この例は前述の「李姓物語」に現はれる。と同時に女の操を汚せば地獄の責苦をも受けるものとの考へもあつた例は、「あきみち」物語中に山口あきみちの妻が語に「二人の尻を賣るれば必ずとして丈三尺の黒腰の釘をもつて、そのかすを口の中より五體へ打ち通されるところを承つて便へ」と云つてゐるのに依つて知られるが、それにも拘らず父子相姦があれば僧侶の女犯あり、仇し男と既落ちする人妻、入浴に言寄せて女房持りする將軍、兵を動かして人妻を掠奪する執權など出でて、未來地獄の責苦は何ともあれ、只々この現世の享樂のみを追求して新妻々々の歌、樂主妻を謳歌した。

其處で神社傳説からも類々な名をもつた賣笑婦や破戒僧を公敵と出して、益々風紀を凌瀆せしめた

のである。伊勢大神宮の「御師」、鹿島大神宮の「事代主」はこの時代に神社財政の窮乏を救ふ爲めに出来たところの、悪徳者なのであつた。これが寺院の方へ行くと「高野聖」といふ名で悪徳の友と稱するものを賣り歩いたが、これが現處で小僧人や婦女を犯すなどの行爲をしたので、遂に「高野聖に賣かすな、獄とられて恥かくな」といふ傳説を生むやうになつた。

この賣財悪徳の方便は各地の神社傳説が争つてこの風を襲したので、出雲大社の巫女、洛北大原神社の神巫女、信州諏訪神社の歩るき巫女、伊勢比良尼、繪島比良尼などが盛んに出て賣笑を事とした。出雲大社は素戔嗚尊の神として民衆から深かい信仰を拂はれてゐた。そして大社修復の爲めに京都へ出た巫女が、素戔嗚尊から授けられた出雲歌舞伎を創始した。これが江戸時代の阿波歌舞伎の發祥となり、私娯の總元締となるやうな事になつたのである。儀禮歌九にこの歌舞伎のことを記して「歌舞伎といへることを近き頃久仁といふ巫女が舞出し……初めは僧衣を着て鉦を打ち、佛號を唱へて念佛隨りといふしに其後名古屋山三郎といふ者、久仁に刀をさしせ頭をつゝみて、早歌を歌へ舞はせければ歌舞伎といふ……歌に比田の横田の若苗とうたふも、皆出雲の國の里の名にしてこの國よりぞ初まりける。實にこれと興じてけり」とある。更に大原神社は「大原舞魚妻」と云はれて名のある舞魚妻の本場で、大原即ち大原ともちつて産の神と信ぜられてゐた。この神社の巫女が賣笑したことを

は有名な事實で、後世になつて「本主の平ばかりもつて居すと、大原どのの巫女に化けてなりと聞
く事がれよ」と云はれた程に、大原巫女の賣淫は公然とした事柄であつた。歩るき巫女は常に三人五
人と組んで丸腰など結つて袴を肩からかけ、白い湯文字を締めて歩るいた。そして年齢も十七八才
から二十四五才位で美しい女が多く、かうして蘭國を渡り歩いて賣淫した。伊勢比丘尼、繪解比丘尼
は皆この類である。

尙他に陸曲に出てゐる少年少女賣買の事實である。これは一見して賣笑とは關係のない如くに見え
て、實際はこれらの少年は男色の對象物として賣買され、少女も同じく賣笑の爲めに掠はれ賣られた
のである。安壽姫、野子玉の話は人買商人の如何に慘忍であつたか、またこの二人を買つた三莊太夫
なる女郎屋の主人のやうな男が、この二人に賣淫行爲を強いたかは、この物語の裏を考へて推察し得
られるが、然しこの種の人員が當時如何に多く各地に徘徊したか、三莊太夫の徒が如何に多く存在し
たかに就ては、多くの文献を後世に傳へてゐる。いまその二三を挙げやう。

甲斐國妙法寺記

天文十五年甲州の軍兵信州佐久郡志賀の城を攻落し、男女いけとり被成而悉皆甲州へ引歸申候、
去程に二頁三頁五頁六頁にても、身類ある人は承け申候……云々。

信長公記卷十二

天正七年九月二十八日、下京馬場町門役仕、使者の女房、あまた女をかどはかし、和泉の掛に
て日比賣申候。今度聞付村井春長、野呂捕糾明候へば、女の身として今迄八十人ほど賣たる
由申候、則成收也。

等々と擧げてゐては隠微なくなりさうなので、室町時代の最後を終るに當つてこの時代に依然とし
て流行した男色の實情を記して、それが如何に性慾史中の特異な變態性慾の流行が一世を風靡して民
衆の間にも擴がつたかを説かう。前時代まではこの男色は行はれたにしても宮廷公卿武門僧侶の間
みであつて、未だ民間には擴がらなかつた。然るに室町の變遷期に入つて、この變態性慾が一般民衆
の間に流行し喜ばれたのである。

この男色の最も有名な愛好者は足利將軍義満で、大内義隆と陶晴賢、伴能宗親もその筑紫紀行に
自分の男色のことを書いてゐる。當時の男色の相手としては、小僧、喝食、童髪、稚兒、若氣、念者、
遊人、若衆を擧げてゐるのを見ると、同じく賣笑婦にも様々な種類があつたやうに、この男色にも種
々な種類の者があつたと見える。武家にして變態性慾者であるから男色を愛好したものは、共に女色
も近づけたが、他に僧侶から來て女色を斥けた結果として男色にその脚を啗らした武將もある。即ち

細川管領政元は、朝敵頼朝を信仰して四十歳まで女を斥けて、潔白を愛し、上杉謙信は、生涯女と交はらずに専ら少年のみに執着し、北條氏照は十年間女人禁制を誓つて男色に耽つた爲めに、その夫人は自害したと傳へられてゐる。織田信長の妻、阿茶を愛したのと豊臣秀吉が石田三成を寵愛したのも同じく男色關係であることは世間周知の如くである。

僧侶に至つては「出世したくば坊主になりやれ」と云はれた程に當時の僧侶は權力を持つてゐて、政治、文學、藝術など悉く宗教以外にも參加して將軍の補佐となり學問の權威を握り一面の文化はこの僧侶の手に依つて發展したと云ふも過言ではない。だから僧侶の權力に連れて男色の塵を撒いたのは當時の結果で、當時社會に現れた役者は悉くその要求に應じて存在したものである。その例證を挙げると数々あるが、その二三を茲に引用して如何に耽溺僧會、變態性慾の天國であつたかを述べよう。

鎌倉時代の文安田樂傳記に依ると

文安元年六月二十九日、貞常親王實意大僧正の宅に成らせられて田樂見物あり。本、田樂傳記が子の願若丸ことに附れたり。願若丸今年十七歳なり。八夜の後舞前に召して、舞臺ありし大僧は、此も百部に述べ置し。

とある通り、その願若丸は「此も百部に述べ置き」ものであつたに相違ない。そして上の好む所、下之れに習ひて漸々と相率めて男色の愛好者となつたのである。

傳記

一、願若丸二山王とは飯山にて兒を奪むより云ひ初めし事なれ、七十一番職人歌合に山法師「ひえあがるわが願若丸のことには、いちちこならぬ人ぞ願しき」とあり、男色木茶漬に「假りに二大師と現はれて、願若丸も衆生門に降り衆道を興立し給ふ。されば願には一兒と弄び密には若僧と味む。」

二水記

永正十四年四月十五日、宮千代丸昨日上洛し、今晩舞臺として参り、小舞所に於て淫妄ありけり。宮千代丸は美少にして百部あり、此兒樂無雙の器用なり。二三年の間密に業中に候す。親王大僧以下公武の諸家ともに、彼が色に淫せざるはなく……云々。

とあるが、この如くに容姿美しい少年であれば誰も彼も心を狂はし情を亂して、その尻を這ひ廻つたのは單に女人禁制の僧侶ばかりではなかつたが、特に僧侶の間にその流行が甚しかつたのは當然である。そしてこの弊風を打破し人間本義の生活に立戻さうと、法橋上人や新羅上人が出たのであつたが

この愛慾性慾の嗜好はそんな事では感服する筈もなく、男色の風は益々盛んになつて江戸時代へ移つたのである。そしてこの弊風の極まる所、遂にこの男色を感服とする「遊り者」を生ずることになつたのである。

江戸時代性慾史

西鶴・近世に消かれた遊女生活

徳川を滅した私娼と遊童と男娼

愈々これから徳川三百年の歴史に入るのであるが、この時代こそは我國の歴史の上でも最も特色のある時代で、遊風は社文機關として珍重せられ名妓は續出し紳客は雲の如くに、その遊蕩の限りを盡した。

其角の句に「一つ賣れぬ日はなし江戸の春」と詠んだ江戸、不夜城三千の美女を誇る吉原の出来たのもこの時代で、我國性慾史の頁を飾る性愛の技巧はこの時代に完成したと見る可きである。それを集つたのは近世、西鶴、其角、さては歌麿、春信、豊國、一蝶などの書家から末期になつては種彦

春水などの作者が輩出して、文學に美術にエロタイシズムは一世を風靡した。

徳川初代の將軍家康が有名な後家好きで、織田信長を滅した明智の後を承けて秀吉が立ち、この秀吉が淀君に鼻毛を讀まれて關門大に困れ、その渡後は忽ち徳川の天下となつたが、奸智の家康は「武を以て天下を取る可し、武を以て天下は治む可からず」と、大に公卿を許して天下殺伐の氣をこれに依つて征せんとしたから、烈風一時に襲來して三百年の天下は最後に東夷婦に依つて倒され、士風は私娼に依つて征服された。

〇〇下谷に出茶屋がござる、柿ののれんに豆屋と書いて、〇〇賣りなら入らしやんせのう——と云ふ如き卑俗な唄が流行した。而して斯る卑俗の風は江戸を中心に全國の浦々にまで影響し、家康の時代にして早くも梅毒は各藩に傳染した。家康の次子結城秀康はこの梅毒のためは鼻落ち眼つぶれて死んだ。何故に斯くもこの梅毒が各地に傳染したのかと云ふのに、家康の天下を取るや參勤交代の制を定め、それには妻子の同伴を許さず、爲めに江戸詰の諸大名は吉原に遊んで、其處で梅毒を受ける者もあれば、その參勤の途中で土煙を買つて其等の女達から梅毒を傳され、それを更に吉原に移すものあり、そして歸郷するや忽ちに自分の妻女に傳染させたのである。そしてこれは更に國守大名に限らず、その隨行者も同様であつたから、この梅毒は忽ちにして全國に行渡つたのである。江戸に公卿制

度が驚かされて吉原が出来たのは、慶長十七年に北條家の浪人庄司若新門が惣領を集めて惣領を願ひ出だに惹き、雨來公卿を許して私領を禁ずるの法は今日に迄も傳つてゐる。

この惣領吉原に遊女となつたものは何が多かつたか。やはり前代前々代の例に洩れず、戦敗者の子女が多かつた。豊臣家の浪人遊女は多く家を潰され、それらの子女が櫛口に窮してなるもの、並にキリシタン宗の信者の子女にして、豊臣時代に時の政府の爲めに賣女の罪に落された者も決して数少くないのである。佐和山城二十八萬石の城主石田三成の娘が舞妓となつたことは有名な史上事實であるが、斯る例は他にも数多くあつてもそれが無名の浪人者である爲めに、世間に知られずに終つただけである。現に吉原高尾七代の身許を調べると、七代中に四人迄は武士階級の娘であり、名妓として知られた吉野太夫、御家太夫、編者太夫などは浪人の娘である。

この吉原が武士階級と平民階級との緩衝地帯となり、また平民階級の氣を吐く場所ともなつて、記文や奈良茂の豪遊録に薩摩の十八大番にと、武士が刀の手前を誇れば彼等は資金の力で武士階級を屈せしめやうとし、それが神祇屋や白粉屋の旗本娘となり、六法を踏んで氣を負ふ町奴となり、斯くしてこの遊屋を舞台として旗本娘と町奴との意地競べに、多くの花やかな物語を産した。一羽と褒められるか五千石とろか、何の五千石と褒よ」と放言して千三百石を褒り棄てた旗本があれば、一人は武士何

故郷にいやがられ」と冷嘲する句が出るなど、當時の風潮をよく現してゐる。

然し江戸時代に吉原は勿論代表的なものではあつたが、此處以外に性慾の棄て場がなかつた譯ではない。寧ろ吉原は高級な大名、富豪、武士などの遊び所で、却つて眞の民衆は到底近寄れぬ所であつた。これらの民衆の爲めには昔ながらに土娼が散在してゐた。即ち山姥、比丘尼、夜鷹、歌麿、船娘などあり、他に呼出し、羅子、白人、天神、更らに湯女、呂州、茶屋女、奥屋、間髪などの類と數へ来ると限りがない。地方の名稱に至つては此處に挙げきれぬ幾十を以て數へるであらう。これらの土娼の生活を文獻に依つて述べやう。

晴娘は年のほど四十以上より五六十ばかりの古る女多く、瘦せたるは小娘の姿に装ひ、姥は最もて眉を畫き、白髪を染めて烏田巻に結び、鼻頭の袂け落ちたるは縷燭の流れをもて補ふ。髷あり腰あり明直あり、何れも極毒にて細家に用ひ難き醜女の、顔に筋筋して疵の痕を埋め、手拭を頬被りして往來の袖をひかへ、數文の鏡に情の切り賣りして、客を呼ぶ聲凄まじくも亦哀れなり云々。

また船娘の事を記した記事には

天明の末迄は大川中洲の船水久備の邊りへ、船まんぢうとて小舟に縛さして岸によせて往來の快

を引き、客來るときは蒲出して中洲をひとめぐりするを興りとして價三十二文なりと。これも夜
窟と同じく客來にて足腰の叶はぬもの多し。

これらの文章を讀んで誰かその想像に眼を惹かないものがあるだらうか。遊藝三昧に目を惹き、「要
り」の「意氣地」と云つてゐる裏面には、こんな想像な生活が展開されてゐたのである。喰はんが
爲めには、生きんが爲めには斯くまでしても賣淫の生活をするより餘はなかつた。江戸三百年の治世
も表面から見れば華やかであらうが、その皮一重を剥いて見れば民衆は喰はんが爲めに斯の如き生活を
し、また斯の如き想像な賣淫婦を對象として性慾の始末をしてゐたのである。だが然しこれらの裏面
の想像にも拘らず、表面は益々泰平になれて遊藝の氣に染み、「歌舞伎」はこの江戸初代に於て世に行
はれた。

この歌舞伎は今日所の歌舞伎芝居とは違つて、歌舞伎の意味は異装とか好色とかの意味に使は
れたのである。そしてこの歌舞伎を案出した阿國は出雲の巫類であつて、林羅山の徒傳草抄野狐に「出
雲巫、京に来て、僧衣を着て飯を打ち、佛號を唱へて、始めは念佛隨りと云ひしに、その後、男の裝
束し刀を横へて歌舞す。俗にかぶきと名づく」とある。そしてこの隨りに種々な工夫を凝らして世俗
に向くやうに趣向したのが、阿國の情夫である名古屋山三であつた。そして阿國歌舞伎は忽ちに流行

の中心となつて諸方で持て囃された。これを讀して世人の心を惹かうとしたのが、利を求むるに餘に
餘を見るに賣た細細で彼女等は直ちに歌舞伎興業をもくろんだ。慶長見聞集にはこの間の消息を詳
しく書いて「見しは今、江戸にはやり物品々あるといへども、吉原町のかぶき女にしくはなし」との
阿國で以下のやうに載せてゐる。

慶長の頃ほひ出雲の國に小村三右衛門といふ人の娘に國と呼びて、専ら心に心さま優しき遊女候
ひし、この遊女男舞かぶきと名付て髪を短ふ新り折りわけに結び、袖巻を蓋し小野對馬守と名付
け、今様を歌ひ舞の巻れ世に越え、顔色無双にして袖を翻へすよそはひに見る人心を惹はせり。
それを見しよりこのかた諸國の遊女その容を學び、中にも名を得し遊女には佐渡島直吉、村山左
近、岡本繪舞、小野小太夫、出来島長門守、杉山主殿、幾島丹後などと名づけ、これは一座の頭
にてかぶきの和尙といへるなり。さて中洲にて幾島丹後かぶきありと高札を立れば人集つて賣
群衆なし、出るを遮しと待つ所に、和尙先立つて幕打上げ橋かゝりに出るを見れば、いと華やか
なる出立にて黄金遣りの刀腰差をさし、火打鏡の圓鏡など腰に下げ、腰若を伴につれてそらろに
立つ浮かれたる姿、女とも見えす只豆男なり、同じやうに裝束させて、齡ひ二八ばかりなるが容
ち繪にかくとも筆に及び難き程なるが、花の袂を重ね玉の裳を纏ね、五十人六十人、好色を事と

して華奢なる色衣に霞籠、古御簪、紅梅御簪をたきしめて、かぶき踊りて一同に袂をかへす。心は空に浮かれ男、今生は夢の浮世なり、命も惜しからじ財寶も惜しからじと、貴麗老若この道にすきて惚れ人となれり。云々

誠に遊女歌舞伎の光景を簡短に言ひ表はして、而かも一顧人をして恍惚たらしむる情景である。この歌舞伎が時代の精華になれた遊見の間に迎へられたのは當然で、徳川政府の爲政者はこの意風を認めて急にこの女歌舞伎を江戸から追放した。然しその結果は却つてそれ以上の奇毒を流した所の若衆歌舞伎を生み、この若衆歌舞伎から男色の流行は益々盛んとなつたのである。この若衆歌舞伎と同時に頭を持ち上げて来たのが、一般の男優によつて考案せられた芝居の「傾城事」または「傾城事」と稱する芝居で、これは吉原の遊里通ひや吉原での遊び事、または吉原遊女的生活を舞台の上で演説して見せることで、この芝居が當時の民衆の心に歡迎され賣笑の立地には大に力あつたもので、遂に「病む顔を見すて四ツ手に乗るも幸」といふやうな思想が一般遊女子の間に道徳として考へられた。そして川柳子をして「奉行に賣られ不幸に受け出され」と冷嘲せられる時代相を生むに至つたのである。これ以後芝居の主人公は傾城となり場所は吉原となり、外國人をして日本の劇は遊里と賣女とに取替した以外のものは何もしなすと云はしめるやうになつた。室町時代の文學の主人公が僧侶であり寺院

であつたのと對比して、江戸時代の劇文學は遊女傾城の文學となり遊里案内の劇となつて、賣女はその抜く可らざる勢力を社會に扶植したのである。そしてこの賣女の力が世上に奇毒かきの賣家を輩出し、また實際のところ江戸時代の名劇は多く浮世繪と稱する半賣畫が然らざれば「あぶな畫」と稱する奇畫を多く出した。巨匠歌麿さへも多くの奇畫を産してゐる。茲にその代表的な性慾文學の巨匠、四條と近松黒林子との文章を引用して、文學が當時の風潮を如何に扱つたかを見やう。先づ近松の「鏡の無出長瀬」を引く。その冒頭にある文句は

曲輪すまゐは時雨の松よ、ふりつふられつむら雨の、まだ千山露もまだ千山やよや。あゝ露は不
断の御簪を焚き、壺にもまさる燈火は、月常住の夜店かや、朱管三谷もいかな事、直下に元三津
の浪花の里、戀も所も氣につれて、高づ手廣き大曲輪……云々それ熱らもんみれば、大遊客衆
の秋の月は、小帳の雲に光り、小僧呼びましや長返事、露すべき夜半もなし、三香太鼓つでん
でん天下は夜半八つ過ぎ、曲輪は戀の壺中や、鴉籠やろばかりぞ寝靡なり。云々

大近松の露筆は讀む者をして當時の遊里の光景を眼前に見るが如くに彷彿せしめる。近松の筆によつて情死者を多く出したと云はれてゐるが、心中物に依つて男女相思の戀情を讚美し、現世は所詮果敢ないもの、死んで彼世で思ひのまゝの生活を遂げやうと、「死の讚美」をした彼の露筆に誘惑された

者も多かつたに相違なく、彼の情情的な文句に情致幽婉な肉感と竹本の幽鬱と三枝の剛烈とを以てしては、恐らく誰でも意厚心腹の狂ふを覺えずには居られなかつたと思ふ。

然し西鶴に至つては更に近松よりも鋭利な現實味を有し、近松がロマンスチックな情趣で唄つたものを西鶴はリアリスチックに嘲罵して見せた。好色一代男の中に結婚月旦をして、夕霧を次のやうに評せしめてゐる。

朝日より昨日までの勤め、屋内繁昌の、時代以來また類ひなき御領城の鎮、姿を見る迄もなく、髪を結ぶまでもなく、地味素足の尋常、はづれ紳かに細く、筆格好しとやかに、肉のつて眼光のからず、物ごし好く、風習を等ひ、〇〇〇にして、名奥の〇〇で、命を取る所あつて、齒かす酒飲みて、唄に聲よく、琴の彈手、三味線は得物、一座のこなし、文面氣高く、長文の書手、物を賣はず、物を惜まず、情深くて、〇〇〇名人、これは誰が事と申せば、五人一座に、夕霧より他に、日本興しと申せども此君此君と、口を揃へて賞めける。

この夕霧の容あしらひを描寫しては
命を棄つる程になれば、道理をつめて遠ざかり、名の立ちかゝれば了簡してやめさせ、暮れば遊蕩をつめて見放し、身思ふ人には世の事を具見して、女房のある男には恨むべき程を合點させ、

魚屋の長兵衛にも手を廻らせ、八百屋の五郎八までも言葉を使はせ……云々

左巻の遊女として西鶴は描いてゐる。近松が情の激するところ遂に男女をして情死せしめたのに反して、西鶴は飽くまでも現世に執着する肉の人間を描き出して、名妓夕霧をも手練手管の上手な女として扱つてゐる。彼が夕霧を描くに當つては、その肉體の描寫のみにとどまらずして、肉房の裏面にまでも筆が及んでゐるところに、我國エロチズム文學の最高峰を見せてゐるが、然かもそれが低級卑俗でなくして、藝術として光りを放つてゐるところに、西鶴が現代までも生きてゐる所以がある。

これらの遊女文學、性慾文學が次第に衰へて近松西鶴以後にも多くの作者を出した。即ち東には京傳、幸町の賣妻教から、春水、谷崎の賣妻本にまでなつて、徳川治下三百年の社會は春水と春本と淫具とは公然と取引されて、賣妻婦は今日のカフェの女給や舞臺のダンサーよりも世に評判されて、衆人瞻慕の目標となり、その淫風は千代田城の大奥に迄も侵入して、徳川幕府はその國門の争ひの爲めに疲弊し倒れたとも云ふ可きであつた。

斯の如くに當時の文學により繪畫により、また更に芝居によつて遊女體裁の宣傳をせられた結果は幕府許可の遊樂場も全國に涉つて二十五ヶ所を數へ、其他隠し賣女のゐる開場所、賭場所に至つては幾許であつたか測り知られない有様であつた。殊に長崎にあつては外國船の入港と同時に、これらの

これらの事に見ても江戸時代の中葉からは如何に私娼が盛んであつたか、そして幕府の嚴重な禁慾にもかかはらず、強に社會に根を張つたかが知り得られる。所詮は人間の性慾は即ち生慾である。一片の禁令も強度の強弱も、この生慾の前には無力であつたのだ。當時の幕政がこれらの私娼に對して如何に根本から断絶せんとして苦心したかは、彼等の職業した家屋を取壊し、名主は本會又は追放家主五人組までも肅清する連座法を設けて、斷乎たる手段を執つたが、それにも屈せず私娼は諸所に出没するばかりであつた。鬮子、鬮の師匠、比丘尼、女遊藝なども取締り賣女として召捕へ、三年間官原にて遊女とする等、あらゆる方法を講じて私娼撲滅を計るのが當時の幕府の爲政方針であつた。これは江戸にはかり限つた事ではなく、京都に於ても大々的に私娼狩りを行ひ公娼保護の態度を執つたが、殊に寛政二年六月に所司代太田備中守の行つた大檢査では、私娼一千三百餘人を一網に召捕つて悉くこれを公娼としたといふ記録がある。其他各藩に於てもこの私娼狩りには數々頭を傾したが、それにも拘らず私娼は依然として衰へず盛盛を續けた。

茲でこの私娼の二三に就て記さう。熊野から繪澤比丘尼と稱する賣色の女が出たことは既に述べたが、この比丘尼が分岐をつくつて歌比丘尼となり盛んに風紀を亂した、文獻に依ると「熊野比丘尼といふは紀州那智に住む山伏を夫とし、熊野を修業せしが何時しか歌曲を業とし、拍板をならして謡ふ

を歌比丘尼といひ、遊女と伍をなすの徒多く出来れるをすべて、其數俵を受けて一山宮めり。この淫を賣るの比丘尼は一種にして、鬮子とひとしきもをかし」とある如くに熊野は尼形賣女の大本山にして、これら多數の比丘尼を統轄してゐたのである。熊野通關にこの比丘尼のことを記して、

朝ぼらけより賣香まで、所さだめず遊ひ歩く、日向くさき歌比丘尼の有様、音は聞かみし文匠に巻物入れて、地歌の繪巻きし血の池の境れをいませ、不慮女の哀れを泣かす業をし、年節りの奥りに烏牛王配りて、熊野権現の事聞れめきたりしが、いつの程よりか隠し白粉に薄紅つけて附鬮子に鬮の或くなり、知らぬ程にて思はせ風俗の空目づかひ、歩み姿も鬮すへての六文字、米かみで鬮堂が歩くと笑はれしは昨日になりて、夜にのつて川舟を飾しがり、鏡重に飽て西瓜好きする鬮者共は、さつぱりしたるが面白しと、齋明にも精進かためにもしくものなしと、是を弄ぶぞかし。

鬮子は地を拂つて賣色専門の徒となつても、形だけは會忘れずに烏牛王を賣り歩るき、女の身で生命の次に大切な鬮髪を落してまでも賣笑したのは、單に物好からでなくその因つて来る所はやはり喰はんが爲めの術であつた。鬮は一代女の中で彼一流の筆で大阪を統轄したこの歌比丘尼のことを書してゐる。

舞々川口に四國舟の碇おろして、我故郷の船々思ひやりて淋しき浪の枕を見かけて、其人に高橋の歌比丘尼とて、此津に入船れての妾舟、船に年かまへなる親仁のながら楫とりて、比丘尼は大方渡賣の木綿布子に、龍門の中船寄前結びにして、黒羽二重の頭かくし、深江のお七指しの加賀笠、うね足袋穿かぬといふことなし。絹の二布の裾短く、となり同一に拵へ文合に入れしは、熊野の牛王野貝耳蓋しき四ッ竹、小比丘尼に定りての一升柄杓、動進といふ腰も引切らず、流行節を讀ひそれに氣を取り、外より見るもかまはず元結に乗り移り分立て候、百葉ぎの鏡を袂へ投げ入れけるも可笑。或は又新木を其値に取り又は刺繍にも代へ、同じ流れとはいひながら、これを想へば、すぐれてさもしき業なれども、昔日より此處に目馴れて可笑からず。

以上二つの文獻に見るやうに斯る異裝異形の比丘尼といふやうなものが、何故に斯く迄もこの時代に歡迎されたのであらうか。畢竟するにグロテスクとエロチイックとは同じ腹から生れた兄弟でもあらうか。エロチイシズムの極る所に必ずグロテスクが生ずる。當時の厭厭した心理には、普通の健全な妻は刺繍とはならなかつたのであらう。そこにこの變態な比丘尼の賣女が流行した所以であらう。徳川時代に於て男色が最も隆盛を極め、勢の赴くところ遂に男婦をさへ聖出せしめたのも、同じくこのグロテスクを求める人心の歸結であらう。が然し男色のことは後章に譲つて、茲にこの時代に始

めて出現して、官原三千の賣女を感嘆し、さしも盛んであつた私娼をさへも顔色なからしめた賣女のことに就て一言しやう。

官原は殆んど京女に依つて支離せられたのは改めて云ふ迄もない。高尾と云ひ御園と云ひ几帳と云ひ悉く京女で、官原の全盛期は京女の全盛期であつた。それに對して江戸女は頭が上らなかつた。西鶴をして書かした江戸女は「首筋短かく足ひらたく、氣は強く腰東賣家のへいへいで、腰さわりも寛々しく」と評してゐるから、到底官原の名妓として名を喚はれるだけの資格がなかつた。然し徳川の時代も半を通じて本保の頃になると、このへいへい言葉の江戸女が官原に對抗して頭を上げて来た。それが即ち深川賣者である。京郡女は情婦御縁として「花魁は人を騙んで一つ獲ち」と云はれる所に上品がつた官原賣女の誇りがあつたのに、深川賣者は「業になるほどつねる江戸賣者」と云はれる程におきやんで鼻柱が強く意地が強いのを誇りとした。然かもこの賣者が花魁の長髪髻に對抗して、三味線といふ武器を以てしたのだから堪らない。官原が名妓の凋落と共に次第に昔日の格式を落して、單に肉の賣場となつたのも時勢の然らしめる所であり、これに代つて私娼が流行したのも實ては江戸賣者にその地位を奪はれて、爲水奉水をして獨り江戸賣者の爲めに氣を吐かしめた。當時人口によく喚はれたものに「多は顔城、夏野郎、春は白人、秋獅子、雨の日は手かけもの、轉運日には

美少年、厄止し。

この時代に注目すべき現象は心中である。その原因は生活の逼迫、下級階級の生活苦、それから来る厭世観と未練観、性慾文學（近頃の心中物などの）の影響を蒙らなければならぬ。この時代に情死の流行した時代は前代にはなかつた。人心の鬱鬱する所に情死の觀念は現れ、刹那の肉の満足をも以て五十年の生命に代へて悔いなき思想が生れたのである。鬱鬱として哀しみ多く、肉慾の追求に疲れた揚句には、現世の苦を厭つて未來に憧憬れる情死の流行を言した。

「なま酔ひになつて隙間を一度買ひ」とか「よつほどのたわけ隙間を連れて逃げ」とかあるやうに、江戸末期は實に男色滔々として人心を支配したと云つてもいゝ程である。徳川家康の後家好きは前述の通りであるが、この老翁は男色に於ても仲々の好者であつた。彼は陣中に伊井萬千代を寵愛した。二代目の秀忠も丹後重と興り更に小山長門といふ愛妾をも持つてゐた。三代の家光にあつては武勇の譽も高かつたが男色の方も海内無双と稱されて、阪部五左衛門、酒井山城守、堀田加賀守、朝倉聖明等との奥義からず、女色を近づけやうとしなかつたので春日局が心配して、女色を近づけるやうに苦説したとの話は有名である。三代家光が斯くも男色を愛したので、この弊風は急に流行を爲し爾來代々の將軍には「御座直し」と稱する小姓を置くやうになり、大名小名を始め武士小者の末に至る迄も

美貌を以て仕へる者を出し、金貨を持たぬ者には野暮の骨頂とさへ思はれるの風をなし、従つて男色の爲めに將軍家を始め大名小名の家では紛擾を起し流血の慘を見るやうな事さへあつた。寛永三年に成瀬後守が將軍秀忠の念者小山長門に關係した爲めに兩人とも切腹を命ぜられ、同十七年には伊丹左京が自分に戀慕した堀田主膳を殺して自刃し、その關係から左京と相愛してゐた丹川采女も共に切腹するなどの悲劇を生み、五代將軍綱吉に至つては御營に紋兒百五十人を蓄へて寵愛したなどの珍聞あり、殊にその中でも御澤百保、萩原忠輝を受したなどは祖先家康、家光の名を恥しめぬ新道の豪の者であつた。御營の事を別にしても一代の高徳と崇められた天海僧正は美少年論を發表して衆道に鼓吹し、佛堂色漸も萬菊丸と浮名を流すなどになつて、茲に前代未聞の男色繁昌を來しその種類も若衆、隙間、小草履取、香具賣、舞台子、飛子、金剛、新べこ、渡り小姓などを生じ遂に「子供屋」と稱して吉原遊廓の如くに店を張り、「隙間茶屋」と稱して客を招く男色専門の遊所をさへ生ずるやうになつた。斯の如くに男色の隆盛を極めた原因には若衆歌舞伎の勃興が預つて大に力あつたことを思はなければならぬ。

若衆歌舞伎とは男色の流行を担つて興されたもので、京都では天和三年、大阪では寛永二年、江戸には寛永元年に鼓ひ起り、遊女歌舞伎を厭倒して旺盛を極め、勢の乗する所若衆姿に扮した美少年が

舞台に出て歌舞するに止まらず、劇中の主人公を若衆とする遊引物までも作られ、當時の若衆の情面を踏つた「松の落葉」中の数は數百萬を以てする程であつた。斯くしてこの好尚の赴く所は遂に野良帽子となり、若衆人形となり、野良紋揚子となりして風俗を亂し士氣を廢弛し、遂には人倫の大道を破壊して省みず社會の秩序を紊亂して恐れず、三百年の徳川幕府の基礎を築いた三河武士もこの男色の爲めに墮落用ふるに所なき腰拔武士と成り果てたのであつた。

人倫國家圖彙に

狂言役者男子を、遊女屋の女を抱える如くに抱え置きて戯を仕入れ、十四五にもなればそれく色づくり芝居へ出し、或よく名をとれば我門口に、太筆にて誰が宿と苗字を記し、夜は戸口の旗行燈に名を書きつけて置くなり。まだ舞台へ出ぬを陰間といひ、諸國を廻るを飛子といふ。

とあつて是れは一般に野良養成法であるが、斯くして賣り出した美少年を聘して酒席に侍らすには、如何なる方法が用ひられたかと云ふに、それは概して「子供屋」から希望の者を招いたのであるが、それは概して下等な遊びで上等な遊びは太夫と會ふのと同じやうな煩雜な手續を必要とした「子供」と近附になるも、芝居師へりを演の水茶屋の縁に呼び込ませ、かりそめの至して要する子には小歌所望して思ふままの遊興、その遊び中間より集めて銀一兩贈り」など相當の金を使つて

遊々と同染みを重ね、それが深くなると指切り髪切り、入鬘子などの習ひもして先く遊女と同じやうな騒ぎがあつたらしく思はれる。男色大體に十六歳の玉島主水が十九歳の豊田半右衛門と金友となり若道の語りひ深く「今年主水は六十三、半右衛門は六十六まで昔に替らぬ心遣ひ、二人とも一生女の寵も見ず、この年まで世を過ししは、これ遊道少人を好る能ならむ」とあつて、徳川時代にこんな事も普通にあつたことは、高野六十那智七十の傳説から推測して眞實らしく、男色の執着さはこれが變態性慾であつただけに強烈なものであつたと想像される。

開門政治は豊臣以來のものが徳川にも傳はり、舞局と歌舞伎役者や僧侶との關係は徳川十五代を通じて數々の抑話を生んでゐる。江戸生島の事件、延命院事件などはその代表的な事件であるが、ロシア革命の暗いカラスブーチンが漁色家の怪僧であつたやうに、徳川幕府の大奥にも數多くの僧侶の手が信仰を餌にして、肉に飢えた大奥の女達を牙にかけてゐたのである。斯くして徳川の権力は九州の宇武士の手で倒されたが、その徳川を斯く迄も腐蝕したのは實笑と春畫との力であつた。それが明治政府となつてから、どんな風に變遷して行つたらうか？ 明治維新の戦亂は如何なる新しいものを生み出したであらうか。日本文化の極盛期はまた實笑制度の極盛期でもあらねばならぬ。呼喚實淫國日本は「世界の日本」となつて却て何處へ行くか？

明治時代性慾史

維新先驅と露校の櫻角力

肥後風をよ吹く女學生大學生

徳川幕府の末になると武士階級の子女は次第に娼婦性を帯びて来て、幕府は對外的には勤王論に傾き、内部的には武士の家庭の風紀の墮落と賣笑婦の横行とに悩まされた。そして次第に政治的にも經濟的にも行詰つた揚句に、朽木の倒れるやうに倒れて絶つた。この維新の變亂は三百年の幕府に慣れた武士階級のみならず、當時の官家をして忽ち路頭に迷はせ、窮した果てはその妻子をして身を賣らしめるより他に生活の道を失くし、滔々として賣笑の巷に赴かしめた。明治政府の時代になつてから出た名妓と稱する女が、悉く食糧に乏れた旗本や其他の豪族の娘であつたことは、當時の史實がよく語つてゐる所である。ドイツの歴史にも「娼婦は軍人の家庭から出る」と云はれ、また我國の歴史にも「平家源平の賣笑婦の遺蹟、戰國時代の後を承けた徳川初期の士族の娘など悉く、没落した戦敗者の妻子が身の置所なくして賣笑の巷に没落した者が多い。既に明治維新の際に最後まで抵抗し

た會津藩に如何に多くの私娼を産出したか。最近の例に見てもロシア革命が如何に多くの賣色の女を世界に送り出したか。これらに依つても戦亂の後には多くの賣色の女を出し、賣色の女に依つて遺傳は亂れ風紀が墮落するか、これを明治時代の賣淫史に見て充分に知り得られるのである。當時の光景を賣淫者の口から聞いたものを其處から轉載すると

若い者なら奥様でも娼婦でも、下世話に云ふ背に腹はかへられずで、皆んな怪しい事をして日々身過ぎや口過ぎをする有様なのです。それに是れまで武家華公や商家に奉公してゐた若い娘までが、人べらしの爲めに職を失ひ、その幾割かはこれと同じ流れに落ち込んだのですから、明治初年の東京は女が餘つて、山の手でも下町でも怪し氣な女が滿ち充ちてゐたのです。就中、下谷の佐竹ッ原、神出の筋違ッ原、同じく神原などを重要な娼場として、本所のお竹原附近、数寄屋橋の日比谷原、芝の神谷町附近は夜になるとウヨウヨする程に賑に咲く花がゐたものです。勿論、それが悉く零落した武士の娘だとは云へませんが、兎に角にも武士の妻女が多かつたことは事實です。佐竹ッ原では十鐘出せば飛び切りの上玉がよりどり、少し玉の懸るいのだと四鐘で済んだのですから、今日から考へると只々驚ろくの餘はありません。そんな次第で忠臣蔵のおりえを賣地で行く奥様もあれば歌阿彌の「黒夜鏡十字辻占」の六浦正三郎もどきに、曾良ひ調染

んだ花魁に合力を受ける若衆もあれば、通り籠りの商人の袖を曳いて、それが屋敷へ出入りの奥
屋敷の香取たつたと云ふ細腰も出るなど、それは始めの有様でした。

そしてこれに引かへて職者側の方は如何であつたらうかと云ふのに、彼等は勝ち勝つて豊は高
に酒に喰ひ酔ひ夜はこれらの花を漁つて、阿呆の限りを盡した事がこれまた當時の史實に記され
てゐるのである。慶應四年官軍が江戸に入り、陣大名の屋敷に屯營してゐる頃の出来事であるが、三
味線舞の太夫が屋敷の窓外を覗りかゝつたのを呼び入れて、それを籠がりで〇〇〇等のことは
普通で、飲食店へ行つても酒に酔ひ、酔へば喧嘩となるのであつたが、その時には仲敷に女を出すの
が例であつた。また木戸、大久保、四郷なども官軍に公然と懸懸するのが普通で士佐大名の山内守
などは、官軍の軍女の飾り衣具やら突き出しの衣服の世話までして金を遣つたと云ふ時代であるから、
卑官の者はまたそれづくに身分相違の女を相手にして、甘酒屋の行遣の節で買女を買つたものである。
そして江戸職者が職を賣り者にして勤めたのと同様、明治職者はこれらの取り上り者を相手にして肉
の切賣を始めた。當時の客と職との關係を知るに甚だ奇談な面白い話があるから、それを茲に載
しやう。

明治職の役、干支籠に收つて都人未だ其地に安ぜず、士氣衰に於て人心憐々たり。一夕八士

あり、三州備前守の青柳本に廻り、歌妓十數人を聘し宴を要る。八士皆長刀美服、假手たる名士、
已にして酒籠り興盡し、或は起て舞ひ或は座して歌ひ、慷慨情詞手拍を拍ち節を爲し、歌水と
稱つて持門の舞を演ず、又舞を擧つて舞に代へ、鼻水涙の句を長吟する者あり、歌妓其舞に怯
れ家人假手に汗を垂る。一士腹を出して曰く、汝歌妓聖徳となりて角力をなすべし、勝つ者は
賞あらむと。歌妓遂に曰く汝爲さざれば歸さずと自ら胸を擧す、歌妓相顧みて色を失ふ。士
怒て曰く命に従はざれば此の柱の如くなるべしとて、刀を抜き柱を切る。歌妓歌して花魁、時
に一枚あり進んで曰く、爲すも耻しめられ爲さざるも耻しめらる、寧ろ進んで之れを爲すべしと
衆妓に先ちて衣帯を脱し腕て對手を求む。衆妓之れに聞まされて僅に衣帯を脱して進む。八士之
れを見て曰く快なり快なりと。勝者には四五兩より金七八兩を興ふ。是が爲めに初め泣て爲す者
も今は進んで爲し、各四五兩を爲して皆甘酒ばかりの金を得たり。云々

如何にも當時の遊見振りがよく現れてゐるではないか。而かもこの長刀美服の假手たる八士とは誰
々であつたらうか。これこそ明治維新の大立物、三條實美、四郷隆盛、木戸孝允、大久保利通等々の
活躍であつた。そして勤王の大名家兼電報中の談話沙汰も、これが下ツ層の兵卒どころか、後には
夫々に大官名士になつた面々なのである。彼等田舎武士が一朝にして権力にありつゝ、勝てば官軍敗

くれば、既に「遊藝」に心算が算入しての遊藝三昧、而かも三百年の寒平に洗滌された趣味を磨みにつ
つて、只これに池内林の快を求めた有様は、前の記事が面白く語つてゐる。

斯の如くに性慾に對しては、固る無頓着で沙汰の限りを盡した明治政府の大言も、外人の性慾問題
には眼を低ましたと見える。明治新政府確立して、借外國との交通繁くなり、外人の日本居留も数多くな
るに従つて、外人が日本婦人を強姦するやうな事件を惹起して、國際問題になつては困ると考へて、
其處で外人相手の遊藝を思ひついた。場所は、最初は築地の外人居留地内であつたが、それは一年半程
で廢止して終つた。そこで隣地たる横濱、神戸、函館でこの遊藝設置を計画した。

横濱は徳川時代に安政六年六月に開港地と定められたが、幕府でもこの外人の性慾問題には困つて、
立派な家造りの風女、風式のものを一軒つくつて、鈴木某なる者が購置してゐたが、それが横濱とな
つて次第に横濱遊藝なるものが繁盛するやうになつた。この横濱遊藝は大體は江戸官原に範を採り、
外人相手の技藝は長崎丸山を模したものであつた。この技藝並にその遊藝場に就ての挿話——即ち洋
妻、物置の二三を記して當時の遊藝風景に脈絡をしやう。

伊豆下田の港の商人お吉は今日では餘りにも有名な存在になつて終つたが、そしてこのお吉が洋妻
の元氣のやうに世人に思はれてゐるが、實は僅に洋妻の元氣がある。それは神奈川縣名産の遊藝お島

といふ女である。お島は神奈川の長延寺に居留してゐた和蘭領事ポルスブルツクに買はれた女である。
その最初の日には彼女は泣き喚いて拒むのを、遊藝屋の者達がかりで強したりなだめすかしたり散々
に手古摺らした揚句に、幾々因果を含められて人身御供のつもりで彼女は長延寺に出かけたのであつ
た。ところが一夜のうちに彼女の心は全く變じて終つて、それから次第に調業を重ねて深かい仲と
なつた。これこそ洋妻の元氣と見る可きであると史實は語つてゐる。何が彼女をさうさせたか？ そ
れは日本人相手の場合には一夜勤めて四百文にしか値しないのに、外人相手では二分（十二倍半）の
買ひがあるといふ物質的原因に根差してゐる。それに日本人相手では恰も人間扱ひもされぬかのやう
なのに反して、外人では珍重して買へるといふ精神的な喜びもある。斯くしてラシャメンなる新遊藝
が日本に生れた。

然しこの洋妻の資格は一般の賣女に限られてゐて、普通の家庭の女は洋妻になることを禁ぜられて
ゐた。お島を愛して洋妻にした和蘭領事ポルスブルツクは更に横濱本町二丁目の文吉娘おてうに愛着
して、一ヶ月洋銀百枚、即ち邦貨七十五圓で安に雇ひ入れやうとしたが、禁令に會つてポルスブルツク
の邸へ彼女を入れることが出来ない。そこで彼女を岩倉橋の抱へ船妓として儀札を受けさせ、名も長
山とかへて漸く月極めの妾として領事の邸へ行くことになつたが、その爲めに岩倉橋では毎月一兩二

分の歩合金を長山のおてうから納めさせた。歴史の上で有名な遊藝家の喜遊が自取した際の「降るア
メリカに袖は縮らさじ」などは、實に特異な異域であつて當時の多くの遊女は洋装になる事を喜びこ
そすれ、左様に取つてはゐなかつたと見る可きである。

横濱の遊廓を説いてチャップ屋に及ばないのは、遊藝點明を述するの慣みがあるから、この章に於て
一言したいと思ふ。遊藝名物チャップ屋の起源は慶應元年からである。同年春に幕府は各國公使と約を
結んで、山手遊藝場新造の工事に着手し同年九月一日に遊路開通し、その沿道に十三ヶ所の休憩所を
設け其處で洋酒を賣らせることにした。然るにこの小憩所が洋酒の一杯賣りのみに止まらず、忽ち外
人相手の人肉市場と變じて終つた。然し最初が酒を賣る目的であつた所から、肉の賣場が私娼窟と變
じた後も名は依然として、チャップ屋と呼びそれがそのままに通り名となつて終つた際である。明治政
府になつてその規模を計り明治二年一月に「往來の外國人へ賣淫取締 後者有之に於ては、當人を初め
關係者一同從罪申付、其町村役人家主夫々嚴重の可及沙汰」云々との極端な取締令を發したが、
何の效果もなく益々横濱名物として知られてゐる。

横濱に次では神戸であつた。神戸は古くから中國筋並に海路の要港であつた關係から、賣淫窟は存
在してゐた。奈良朝時代に既に兵庫には賣淫の徒が生活してゐた。江戸時代の中頃には繁榮を極めて

「引き店」と稱する小格子店が出来、少し上等になると「割」または「兩掛」と稱する遊藝妓衆の
やうな店も出来て、身分の低い者は「引き店」に行き、少し富裕な者はこの「割」或は「兩掛」で
女を買つた者である。神戸の開港は安政四年十二月、井上信濃守と岩瀬肥後守とが米國公使ヘルリス
との間に假條約を締結したが、慶應三年十二月七日になつて漸く開港することを得た港である。

開港はしたが當時の神戸は一漁村に過ぎず、開港と同時に續々と渡來した外人は長い間の性慾を満
足させる對象物もなく、その結果は更もすると往來の日本婦人を襲ふ者も出て来て、夜になると神戸
の町は女の往來が絶えて終ふのであつた。當時の兵庫縣令が伊藤使輔(博文公)でこの状態を心配し
且つ外人と和を合せる度毎に外人から、日本女の周旋を頼まれるので、これに備み抜いた伊藤縣令が
オチャラ屋(後に説く)の主人佐野常吉に勸めて、開港遊廓設置願を出させ、明治六年五月一日から
開港させた。これが神戸の開港遊廓の始まりとなつた。然し遊廓は出来上つたが遊女がないので、そ
こへ従來から營業してゐたオチャラ屋の私娼窟を連れて来て營業せしめたのである。このオチャラ屋
とは古くから神戸にあつた極めて安價の私娼窟で、一名を遊女又は十餘とも云つた。佐野常吉はこのオ
チャラを七人も抱へて私娼窟を賣んでゐた男で、これが前述の如くに公許の遊廓を開いて、茲に外人
相手の性慾交換場が開かれた。

然るに明治五年になつて司法卿江藤新平の果斷に依つて娼妓解放令が出で、その結果は神戸、大阪の大打撃となり、樓主は賣力盡き賣場は不振となり、娼廓は火の消えたやうに淋しくなつた。然しながら外人の居留数は益々増加し、その結果風紀は紊亂し醜聞續出し、流石の明治政府もその處置に窮して明治四年に取締令を發し更に同六年に兵庫縣令神田幸平は次のやうな上申書を明治政府に提出した。

- 一、外國人抱女の價一切遊女共離名附又非遊女共離申 妓妾の同區別相成致 國因難蓋起申候
- 二、神戸縣居地内に於ては外人居宅借貸自在の義につき市中人家を借貸抱女を借貸抱女を差置き中には數人同居居在共上時々婦人入代尤も遊女に紛敷く 國因難蓋起り申候
- 三、居留地内は市中ボリス 濠洲の外に付外國商館へ立入候 淫賣女取押 離相成差支申候
- 四、外國人名前の借宅にて日本遊女を差置密に外國人を招き賣淫爲妾候者有之風聞に付嚴密取締候 處其節は密に隠蔽を得ず候へ共必然可有之筋にて今後逆も無之とは難申博奕官等には此類有之風聞の取 國因難蓋起申候
- 五、兩 港中淫賣女取締する節は接近村落に淫賣女出來是亦取締執行の一途に有之候

- 六、「ボリス」職業にては誤りに人家へ贈込まざる旨の處置賣女時味に於ては不時贈込の概を與へ候 價必要と相成別一種の條事を設し 候 價必要の筋に有之候
- 七、淫賣女買 候者の價に於ては律中明條無之候 得共不正品賣買の條に照し 候 得ば買 候者も刑典を免がれざる筋に有之是亦取締を生ずべき處に有之候
- 八、申年中遊女解放相成 候 價は婦女をして人身自由を得せしむべしとの御趣意に 候 處懸所へ取極め其餘を禁じ候ては貸席の賣事賣の概を有し婦女を扶養し無放の御趣意貫徹致し 候 候 様可相成と存じ候
- 九、四年和森の律御止已後和森と淫賣女の區別無之取押 候ても和森を以て申立候へば處分の方法差支申候
- 一〇、淫賣女致 候 旨本人承認 候 上は違式七十五條の罰金に止り 候 間娼妓鑑別料を納め貸席の扶養を受け共上檢査法を受け候よりは遙に優り候 儀も心得可申差支申候
- 一一、廣く海外各國の景況を承り 候 處遊女無き所は無之只明欺詐の別あるのみと申事に有之左すれば遊女有之候 共御國辱には有之間敷是に反し禁令を以て捕吏不時に人家へ侵入し婦女を捕へ刑典に處する事は外國には無之之故に付反て御國辱に相成べくと存候

この上申書に對して明治政府の大官達は何と策の施しやうもなく、爾來日を過す程に風紀は益々亂れて外人と私娼との關係は益々固め取締りもなくなつたので、明治七年には娼妓の賦税月二兩と定め、外人の妾にも娼妓と同じ賦税したがこの時に假札を受けた洋妾は三十餘名であつた。然しこれでも取締りせず、今度私娼を撲滅する意圖で神戸市中遊女屋閉鎖手続可しと命令を發したので、淫風一時に鎮ひ起り神戸市中の目買の町にまで遊女屋が閉鎖されて却つて風紀を益々亂すの基となつた。これは明治十六年に至つて廢止され再び福原遊廓に集められて、數回制度から氣持制度に復歸した。

遊廓は横濱や神戸とは違つて地が北海に臨した關係から外人との交渉も左様なうるさくはなかつた。この點では新濱と大同小異であつた。函館で公娼の出る前には私娼が徳川時代から存在してゐてそれを洗滌文、風の子またはアチネと呼んだ。享和三年に茶屋(實は私娼屋)を營んでゐた者十九人あり、その中の頭領の藤十郎といふのが、奉行所へ遊女屋の許可を願ひ出た。奉行所では期限を五ヶ年として之れを許し、且つ軒數も當時の十九軒を餘り可らざることを申渡した。其後滿期後に再び願出でて今度は二十二軒となつた。然るに文政五年に豊川町に新に五軒の遊女屋が公許され、それにつれて次第に増進して来て、天保に入ると娼妓屋さへ始められて、漸次外形も官原風になり、それが遂に明治時代に持ち越されたのである。明治二年に開拓使が置かれ、従来の豊川町から遊廓町に移りそ

のまゝ今日に及んでゐる。

然し私娼公娼と外人との挿話殆んど今日に傳つてゐるものはない。あつても肥後として殘さなかつたのか、或は些々たる問題ばかりで、それが中央の問題となる迄に至らなかつたのか、その何れかだらう。

斯の如くに明治政府の確立は他の問題に於ては舊來の陋習を破り天地の大道に基くことが出来るかも知れなかつたが、唯實笑の點に於ては徳川時代と何等懸ぶ所なく、寧ろ徳川時代よりも一歩を進めた點さへあつた。正岡毅翁をして「嗚呼東洋國」の一書に筆を執らしめて、政府大官の賈淫と大官夫人の役者買ひの裏面を暴露し盡して、爲めにその一書は發賣禁止を受けたが、然しその中に書かれた事件は盡くすべくもない事實である。然しそれらの事は後章に關するとして、明治時代の性慾史の上で性慾そのものには間接的の關係しか持たぬかも知れぬが、而かも見逃せない重大な事件がある。それは明治五年十月に司法卿江藤新平に依つて斷行せられた娼妓解放令である。これは我國の歴史の上に於ても特筆に値する大事件と見る可きものである。娼妓解放令はどうして行はれたか、それを次に述べやう。

時代が明治に入ると識者の間では——特に外國歸へりの新知識の間では——この娼妓公許に對して

罰するもの多く多きを加へた。然しその根本とする所の人種とか自由とかいふ言葉は爲政者にとつては彼の唯理にも響かなかつたが、然し外國への露國といふ言葉は露國に耳に響かつた。そこでこれは何とかしなければ……と考へてゐる所へ突然に湧き出たやうに起つたのが、南米ペリユー國の軍艦マリヤ號が清國で買ひ入れた奴隷二百三十一名を載せて横濱に寄港した。その夜奴隷の一人が脱獄して英國軍艦に泳ぎつき、助けられて翌日英國領事館に保護せられた。英國領事と米國領事とからこの報告を受けた明治政府では直ちに司法卿江藤新平、神奈川縣令陸奥宗光に命じて取調べさせ、更に外務卿副島種臣の意見をも容れて大政大臣三條實美の決断に待つて、奴隷解放を執断せしめた。するとマリヤ號の艦長リカード・ルヘローからは「日本に於ても既に人身賣買をしてゐる奴隷が公然と許されてゐるではないか」と突込まれた。これには時の神奈川縣令大江卓もへこんだが、左様かと云つてそのまゝに引下がる譯にも行かず、ロシア皇帝アレキサンドル三世の仲介をかりて、兎も角も我國の官條を通すことになりマリヤ號に載せて来た、清國の奴隷は全部返還することになつて結末をつけた。

然しこれが動機となつて、奴隷の生活の調査となり遂に奴隷解放令の發布となつた次第である。この解放令は前年明治四年の「露多非人稱號禁止令」よりも以上に、晴天の霹靂であつた。樓主達は

周章狼狽して驚すに術がなかつた。徳川以來三百幾十年間を保護政策の下に榮えて来た露國を一舉にして潰すのだから、その吃驚も察しられる。然し紅毛司法卿の果斷はよくこの露國を成し上げた。殊にその解放令中に「奴隷解放へ人身ノ權利ヲ失フ者ニシテ牛馬ニ異ナラズ、牛馬ニ物ノ返贖ヲ求ムルノ理ナシ、故ニ從來相續奴隷へ貸ス所ノ金銀並ニ賣掛金等一切償ルベカラズ」とあるのは痛烈無比の江藤の性格が顯露してゐる。室町時代の「徳政」とか「人返へし」とかよりも骨に徹する辛辣さである。

然しその結果は却つてよくなかつた。解放せられて自由になつた奴隷達は、一步自由の天地に踏み出した瞬間から忽ち衣食に窮しなければならなかつた。彼等は貧色以外に糊口の術を知らない徒であつたが爲めに、再び私娼となつて衣食を満すか、それでなければ飢え死をするより身の振方を持たなかつた。加之、彼等は餘りに肉の豊滿に慣れきつてゐて、男のゐない露國の床は堪え難い苦痛であつた。爲めに解放せられた其の日から既に幾多の露國が到處に潰せられ、母子心中や刃傷沙汰、さては誘拐されて行方不明になる者など續出し、よく行つて外妻となる者、夜鷹の類に墮する者など、その結果を見るならばロシアの露國解放によつて却つて露國が苦境に落ちたのと同様に、この奴隷解放令は却つて可憐な奴隷を色欲其の餌食にするやうな結果を招来したのであつた。

事情が新くなつたので明治政府は再び各府縣に訓令して、技藝及び職能に關する取締を聯合に一任することゝして、漸くこの性的混亂から脱することが出来たが、それでも私娼の猖獗が甚しく特に東京府に於てはその始末に困つて、時の東京府知事大久保一翁は有違第八號を以て其の取締に苦心した程であつた。そして密賣の檢舉に際しては當人ばかりでなく保證人、宿主、組合者までも處分し、その處分も科料十圓以上五十圓といふ上に勞役に迄も服せしめた。然るにそれでも隠し賣女が絶えないので、今度は府下の貧賤賣者に對して三業株式會社といふのを設立させた。三業株式會社とは何であるか。即ち官原を本社として下谷、根津、品川、新宿、板橋、千住を支社とする。官原、引手茶屋、娼妓の三業を營業とする會社である。そしてこの會社に附屬して病院と女工場(後の女紅)とを設けて、病院では娼妓の病氣加療と檢査とを、女工場では娼妓に讀書、裁縫などを教へて、娼妓達の向上を計ることとし、それに要する費用として娼妓から徴せ高の百分の五を會社へ納めさせることにした。然しこの制度も私娼撲滅の對抗策としての効果を、左程に擧げなかつたばかりか、舊の島のように密賣されて晝夜に涉つて賣色を強制されてゐる被女達にとつては、却つて迷惑な事であつたに相違ない。女工場は何時しか形だけのものとなり、それも有耶無耶に消えて後には名を女紅と改稱して歌舞の練習所として、その形見が京都にだけ残つてゐる。

娼妓に至つてはこれを厭ふ者悉くで、病院の壁に「牆にかいた草紙をやめにして、生で見たがる野郎な役人」と張出した者があり、この檢査強制的結果は娼妓營業を止めて故郷へ逃げ出さうとする者さへ生じた。これに困つた官廳では告諭を出して、檢査の必要を説くなど、随分滑稽でもあり滑稽なことをも惹き起したものである。

斯くの如くして迄も政府が骨折つた甲斐もなく公娼は衰微して私娼が榮え、その間に露を表面板にして實は肉の切賣をする露妓が生じ、それと相呼應して明治初期の歐化時代即ち應鳴鐘時代の露風を招來して、上は大臣宰相より下は商人に至る迄も滔々たる淫風に掃ま込まれたのである。

「露新り頭をたたいて見れば、文明開化の音がする」と唄はれたこの歐化時代は、實は維新創業の肉慾第一主義の野蠻時代を、外見だけ體裁よくつくつたもので、昔のやうに刀を抜いて露妓を脅かし、本能の満足を買ふかはりに、今度は洋装と化粧と巧言とで人妻と通じ令嬢を誘惑した迄で、肉慾第一主義たる事は毫も變りはなかつた。畢竟、文明開化とは道德の露廠、婦徳の遺散を意味するのであつた。教へて見ると木戸孝允の夫人は京都祇園の露妓養母であり、伊藤博文夫人梅子も後藤象次郎夫人お仲も、山縣有朋夫人貞子も共に露者營業の身の上であり、現政友會總裁大隈、故政友會總裁原敬、政友會の智恵袋と云はれた岡崎亮輔、故大同育進、現政友會の切れ者山本健次郎、ニコボン宗の

隈田桂太郎、等々と書き出すと明治年代の政治家の夫人家風の愛妾は殆んど露相妓上りでない者はな
いと云ふ至極さである。「東京新聞」に皮肉な一文がある。これを見ても當時の女尊男卑の風を
窺ふに足りると思ふのである。即ちその著者は筆を執つて

「中夜に子を生めば、遂に娼を棄つてこれを親、その女子ならざるを恐る。幸に女を生めば、則ちそ
の父母、これが爲めに口を糊せんと欲するの一心を以てこれを養育す。三歳にしてその鼻高く膝の低
きを欲し、七歳にしてその眼涼しく口の小なるを欲し、十歳にしてその髪黒く面の白きを欲し、二七
の十四にして、その語の細び笑ひの巧なるを欲し、二八の十六にして、その腰の細く背の肥ゆるを欲
す。凡そ乳臭より香粉の薫するの間に抵るまで、曾て貞節を教ふるを見ず、唯だ魅めしむるところの
學問は、則ち三線の糸を彈するのみ。これ則ちその美をひさぐの學問なり。男兒も亦美人の美を樂し
んで後世子孫の計を爲さず……嗚呼盛んなる哉、口能く腹能く吐くものと雖も、夜に愛妓の膏を嘗め
て、而して朝に國家の大事を圖す。その名は則ち國事に執事すと雖も、その實は愛妓の爲めに給金を
賜ふと謂ふも可なり」

口を吐いて出ることの冷嘲熱罵は、當時の大官達が甘んじて受けなければならぬ批評であつた。而し
て「氏なくして玉の典」は當時女子の理想となり、奈良平安の朝に「出世したくば坊主になれ」と云

つた事は今では「出世したくば女に生れて露相妓になれ」と云はしむるに至り、男子もこれに倣つて權
妾を持たぬ男は肩身を狭くする時勢となり、人妻を奪ふは男の甲斐性位に考へられるやうになつた。
一代の妖嬈下川歌子が伊藤博文の寵を得たのも、かゝる風潮に乗じたのである。明治を最もよく代表
するものは露相妓であり、待合政治である。政治を談する者その大小となく待合の四角半程に酒盃を前
にし妓を擁して天下の政治を談じた。そして時人もそれを怪しまなかつた。政敵もこの待合を利用し
露相妓を利用して一國の宰相と隙を交へて互利を博し、宰相もこの間に財を積んだ、奈良朝が進行婦に
代表され、平安朝が浮かれ女に、鎌倉時代が白拍子に、室町時代が辻君に依つて代表され、江戸時代
が官原の遊女に依つて特色づけられるとすれば、この明治時代は正に露相妓に依つてその歴史が書かれ
てゐるとも云ふ可きである。露相妓になることこそは明治時代の「女子登壇門」であつた。

この露相全盛の風潮を更に昇めたものは、日清日露の戦争であつた。同時にこの戦争は春畫をも流
布せしめた。何故かと云ふと戦争に出かける軍人は悉くこれを「彈丸除けのお守り」と稱して懐中せ
ざるものなく、戦時中に満洲の野にある軍隊を嘗て込み組に組織された春畫の数は夥しい數に上つて
ゐる。「嗚呼愛國」の記する所では、軍に廣島だけでも五千人の私生兒を生じたと云つてゐる。何故
に斯くても多數の私生兒を生むに至つたか。その原因は遠征の兵士を慰養する忠君愛國の精神の激

からであると云はれてゐる。愛國心と私生児とは何の關係もないやうに思はれるが、決して然らずでこの連征の將士を愛國心から接待する爲めに私通姦通が公然と許されたことに原因する。これは兩儀役を通じて同様の現象が見られた。生命を棄て、出征する軍人にとつて何よりも満足を得たいと希望するのは「財」ではなくして「色」であることは當然である。そこで軍に賣り物買ひ物の關係のみならず、何うせ出なければ生命はないものと覺悟した人間にとつては、野獸性に還元する。そこへ愛國的精神として喜んで貞操を捧げる女があれば食指大に動くのはこれまた當然で、そこで「愛島だけで五千人の私生児」を産出した原因が解し得られる。

この日露戦争を期して前代までにはなかつた女學生を多數見るやうになり、また職業婦人の群をも見るやうになつた。職業婦人は明治時代にはまだ少くたるものであつたが、女學生こそは明治時代の花であつた。小栗風葉の「青春」はこの明治時代の女學生の情的生活を活寫したものととして代表的な小説であらう。讀いて東京淺町河岸に異味つてゐた所の高等淫賣——多くは女學生の墮落したものであつた——が世に持て囃されるに至つて、藝妓はその全盛期を去り、淺草千束町の「麗窟」と云はれた私娼が繁昌するやうになつてからは、官軍淫賣は衰れ、讀いて明治の末年に女優の出づるに及んでからは、さしも天下にその名を誇つた新娼、舞臺も「帝國劇場の女優さん」に天下の眼目を奪はれ

て、名妓の名は高麗と黒葉を最後として終り、今や松竹菊田のスターが全盛の名を囃はれる時代になつた。

「目白よいとこ早稲田をうけて、風風雨雨そよ〜と」の句はよくこの明治時代の女學生と男學生の關係を語るもので、小杉天外の小説「風風雨雨」は前記の「青春」と共に新しい明治の西動物と云ふ可きである。男學生間に流行した男色、女學生間に勢を得た同性愛は共に明治の中葉からかけて日露戦争まで續いた。その爲めの刃傷沙汰、心中沙汰は常に新聞の三四記事を賑はした。ヨカチヨと云ひ〇〇〇〇と云ひエヌさんと呼び添くこれらの消息を語らぬものはない。この男學生と女學生の性生活こそは明治の末期が生んで、そしてそれを大正昭和と引續いた新時代の性的風景である。然かもそれが賣色専門の女とは違つて、生氣激刺として而かも瑰々しい異質のやうに魅力を持つてゐたところから、惹き社會の話題の中心になり、その戀愛生活の一舉一動は當代の藝術家の筆を藉りて、世間に紹介されるに至つた。その小説家の中で傑出してゐたのは小杉天外で、彼は多くの「學生を主人公にした」小説を社會に發表した。其後正米白鳥の露華に依つて高等淫賣の生活に取材した小説が世に現れ、我國の自然主義文學の中心を爲した。

斯の如くに明治時代はその前半期は藝妓全盛の時代であつて、男にして藝妓の一人位に馴染みを持

たぬと肩身狭く思はれたが、總て時代は移つて日露戦役には女學生時代を現出し、自由高台の日本女子大學と早稲田田南の早稲田大學とは共に日本の新思想の發祥地であると共に、新時代の自由戀愛の道場でもあるかのやうに思はれたのであつた。

高等遊樂、酌婦、茶會所、飲酒屋、大弓場、揚弓場、ピヤホール、カフェを産んだ明治であり、不見舞、必舞、應來、吹へ込み、連れ込み、泊り込み、御同伴の新進語の出來た明治であり、トイチヘア、須磨の浦、尺八等々の國語を生んだ明治は、帝制女優の出現をその幕開きとする所の大正に代を譲つた。そしてグイシヤ、オイランの言葉と世界的言葉にまで普及させて、露技と娘技の時代は總つて今や世は女優と女給との百花繚亂たる女人權樂境であるが、この事に就ては餘りに新しくまた著書も汗牛充棟なれば省くことにした。

最後に明治時代に就て特筆したいのは、この時代の武運隆盛と共に文運も亦隆盛を極めて、その極るところ繪畫と云はず文藝と云はず数多くの傑作物を出したことは、前代未聞の事であつた。勿論、徳川時代に於ても文藝は驚かれ版本は毀たれ書者は手錠或は刑門の事があつたが、それは数少なかつたのである。明治時代に入つてからは官憲の忌諱に觸れて禁止されるもの多く、性慾に關するもの就中、多數を占めたことは明治の末期に於て既に大正昭和の淫風を預言するものであつた。

昭和七年二月十六日印刷
昭和七年二月十八日發行



不許圖

「性慾五千萬年史」

定價 金二圓三拾錢

著者 高山樗牛

發行者 上村壽男

印刷者 山下謙之助

東京市本郷區駒込上富士前町一〇九番地

會社 先進社

電話小石川 三〇四四番
東京六五二三八番

先達社刊行圖書目録

大佛次郎著	角兵衛獅子	定價 一圓五十銭 送料 十二銭
大佛次郎著	幽霊船傳奇	定價 一圓三十銭 送料 十二銭
大佛次郎著	山岳黨奇談(上巻)	定價 一圓五十銭 送料 十二銭
大佛次郎著	山岳黨奇談(下巻)	定價 一圓六十銭 送料 十二銭
大佛次郎著	蓮(上巻)	定價 一圓六十銭 送料 十二銭
大佛次郎著	蓮(下巻)	定價 一圓八十銭 送料 十二銭
吉川英治著	貝殻一平(上巻)	定價 一圓八十銭 送料 十二銭
吉川英治著	貝殻一平(下巻)	定價 一圓七十銭 送料 十二銭
田中實太郎著	旋風時代	定價 二圓 送料 十四銭
佐々木味津三著	風雲天滿双紙	定價 一圓六十銭 送料 十二銭
吉川英治著	江戸城心中(上巻)	定價 一圓七十銭 送料 十二銭
吉川英治著	江戸城心中(下巻)	定價 一圓七十銭 送料 十二銭

先達社刊行圖書目録

西澤桃介著	桃介夜話	定價 一圓五十銭 送料 十二銭
バーゲン(ヘップ)著 佐藤莊一郎譯	二〇三〇年の世界	定價 一圓八十銭 送料 十二銭
林房雄著	都會双曲線	定價 一圓五十銭 送料 十二銭
林房雄著	窓の花	定價 一圓七十銭 送料 十二銭
明石健也著	失業者の歌	定價 一圓二十銭 送料 十二銭
貴司山治著	同志愛	定價 一圓六十銭 送料 十二銭
細田民樹著	貴色窓	定價 一圓七十銭 送料 十二銭
三宅やす子著	金	定價 一圓八十銭 送料 十二銭
麻生久著	父よ悲む勿れ	定價 一圓五十銭 送料 十二銭
片岡鐵兵著	娘三日記	定價 一圓六十銭 送料 十二銭
今東光著	奥州流血録	定價 一圓八十銭 送料 十銭
川端康成著	淺草紅團	定價 一圓五十銭 送料 十二銭

先達社刊行圖書目錄

池崎忠孝著	米國怖るゝに足らず	定價 一圓五十錢
池崎忠孝著	日本潜水艦	定價 九十二錢
池崎忠孝著	六割海軍戦ひ得るか	定價 一圓五十錢
池崎忠孝著	大英帝國日既に没す	定價 一圓五十錢
河村南川著	排日戦線を突破しつゝ	定價 一圓五十錢
國地與四著	空の驚異ツエツペリン	定價 一圓六十錢
佐藤雅雄著	銅鐵のあらし	定價 一圓五十錢
佐藤雅雄著	謀	定價 一圓五十錢
新居格著	熱風報	定價 一圓七十錢
新居格著	民國大動亂	定價 一圓七十錢
早坂二郎著	一九一四年七月	定價 一圓七十錢
早坂二郎著	誰が世界大戦を製造したか	定價 一圓七十錢

先達社刊行圖書目錄

石丸藤太郎著	日本果して敗るゝか	定價 一圓十二錢
宣伏高信著	アメリカ其經濟と文明	定價 一圓六十錢
宣伏高信著	日本はどうなる	定價 一圓六十錢
宣伏高信著	新英雄傳	定價 一圓五十錢
小野賢一郎著	奥村五百子	定價 十二錢
椎名龍徳著	病める社會	定價 一圓六十錢
倉田百三著	絶對的生活	定價 十二錢
伊藤梅樹著	五代目菊五郎自傳	定價 一圓二十錢
海老名正著	會教大觀	定價 一圓二十錢
杉一郎著	會教大觀	定價 一圓二十錢
清水三郎著	會教大觀	定價 一圓二十錢

